えびの市文化財調査報告書第6集

永田原遺跡
小木原遺跡群蕨地区
（A・B地区）
口ノ坪遺跡

―上江・池島地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅰ―

1990・3

宮崎県えびの市教育委員会

序

えびの市は、日向・肥後・薩摩の分岐点にあたり、古来より多様な文化・文物が混和しながらも、独特の文化と伝統を持った地域であります。北には九州山脈、南には霧島連山を有し、用水には事欠かないことから、低・中位段丘には余す所無く遺跡が密集しており埋蔵文化財の宝庫とも言えるところであります。

本市教育委員会では、昭和60年度より上江・池島地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査を実施してまいりましたが、本市の古代史を解明するうえで貴重な資料を得ることができました。

本書は、昭和61年度から昭和62年度にかけて調査した永田原遺跡、小木原遺跡群蔵地区および口ノ坪遺跡についてまとめた報告書であります。

本書が学術資料としてだけでなく、社会教育・学校教育の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する理解と認識が深まれば幸いです。

なお、発掘調査に当たってご指導、ご教示いただいた諸先生方、県文化課、ならびに調査に対してご理解、ご協力いただいた工事関係者や地元の方々に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成２年３月

えびの市教育委員会

教育長　平　田　敏　正

例　言

1．本報告書は上江・池島地区県営圃場整備事業に伴う永田原遺跡、小木原遺跡群蔵地区、口ノ坪遺跡の発掘調査報告書である。

2．事業は宮崎県西諸県郡農林振興局の委託を受けて昭和61年度、62年度にえびの市教育委員会が実施した。

3．本報告書の執筆分担は以下のとおりである。

はじめに……永友良典（県文化課）
遺跡の立地と環境……中野~~浩二~~和浩（現えびの市社会教育課）
永田原遺跡……谷口武範（県埋蔵文化財センター）
小木原遺跡蔵地区……永友良典
口ノ坪遺跡……寺師雄二（現山田町社会教育課）

4．本報告書の作成にあたり、以下の方々から御助言、御指導をいただいた。記して感謝を表する。

5．別編「自然科学的分析」『小木原遺跡出土須恵器の胎土分析』は三辻利一奈良教育大学教授に、『えびの市小木原遺跡群蔵地区土壌調査』は有村玄洋県総合農業試験場化学部土壌保全科特別研究員兼科長、野中仙三郎特別研究員に依頼した結果の報告である。

6．土層注記の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」による。

総 目 次

はじめに …… 1
遺跡の位置と歴史的環境 …… 5
永田原遺跡 …… 9
小木原遺跡群蕨地区 …… 117
口ノ坪遺跡 …… 371
別編　小木原遺跡出土須恵器の胎土分析 …… 385
　　えびの市小木原遺跡蕨地区土壌調査 …… 390

はじめに

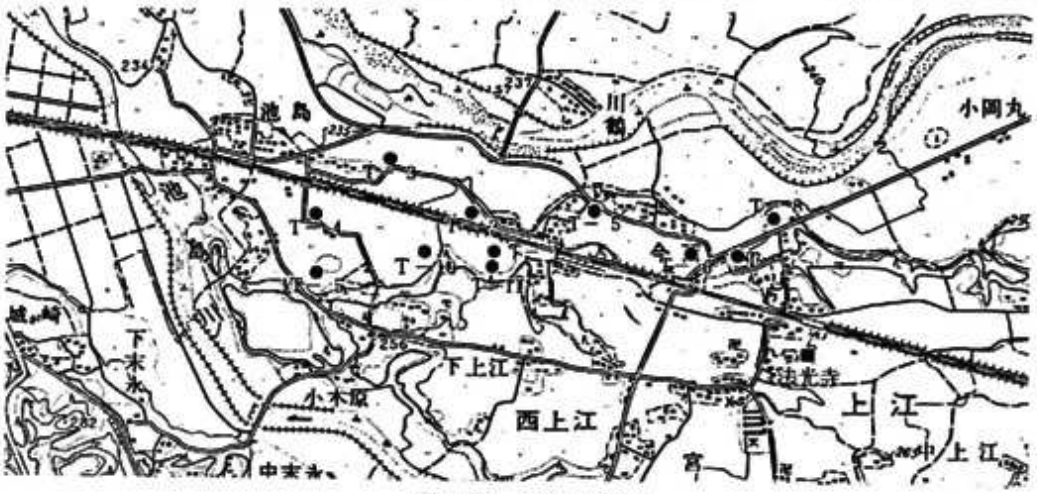
1．調査の経緯

上江・池島地区県営圃場整備事業は、昭和59年度から実施され総事業面積180haのうち、昭和60年度までに約30haが整備された。

えびの市教育委員会では昭和60年度に市内全域の遺跡詳細分布調査を実施し約180か所で遺跡を確認した。事業区内でもほぼ全域が小木原地下式横穴墓群を含む原田・上江遺跡、永田原遺跡、口ノ坪遺跡の分布内に含まれていたため市教育委員会では当該事業区内11か所の試掘調査を行ったところ昭和61年度事業区内の２か所(永田原遺跡・口ノ坪遺跡)から遺構・遺物の分布を確認した。

そこで、２遺跡について西諸県農林振興局、上江土地改良区、県文化課、及び市教育委員会の四者で埋蔵文化財の保護について協議を行った。その結果、事業施工上現状保存が困難な部分について記録保存の措置をとることとなった。調査は市教育委員会が主体となり、県教育委員会に調査員の派遣を依頼して実施することとなり、永田原遺跡については谷口武範（県総合博物館埋蔵文化財センター主事）の担当で昭和61年10月28日から翌年１月31日まで発掘調査が行われた。なお、口ノ坪遺跡については諸般の事情で次年度事業となった。

昭和62年度の事業区は小木原地下式横穴墓郡内に位置し、周辺に地下式横穴墓が数多く分布していることから濃密な遺構の分布が考えられた。そのため、前年度からその取り扱いについて四者で協議をおこなったが、事業施工上現状保存が困難な部分については記録保存の措置をとることとなり、永友良典（県教育庁文化課主任主事）の担当で昭和62年９月７日か



第１図　試掘調査図

ら翌年1月29日まで小木原遺跡群・蔵地区の発掘調査を実施した。また、前年度に事業が行われなかった口ノ坪遺跡については62年度事業となったため、寺師雄二（嘱託・現山田町社会教育課主事）の担当で昭和63年2月23日から3月16日まで実施した。

なお、昭和63年度事業区では前年度に試掘調査を実施し、63年度に小木原遺跡群内の蔵・久見迫・地主原地区の調査をおこなっている。

2．調査の組織

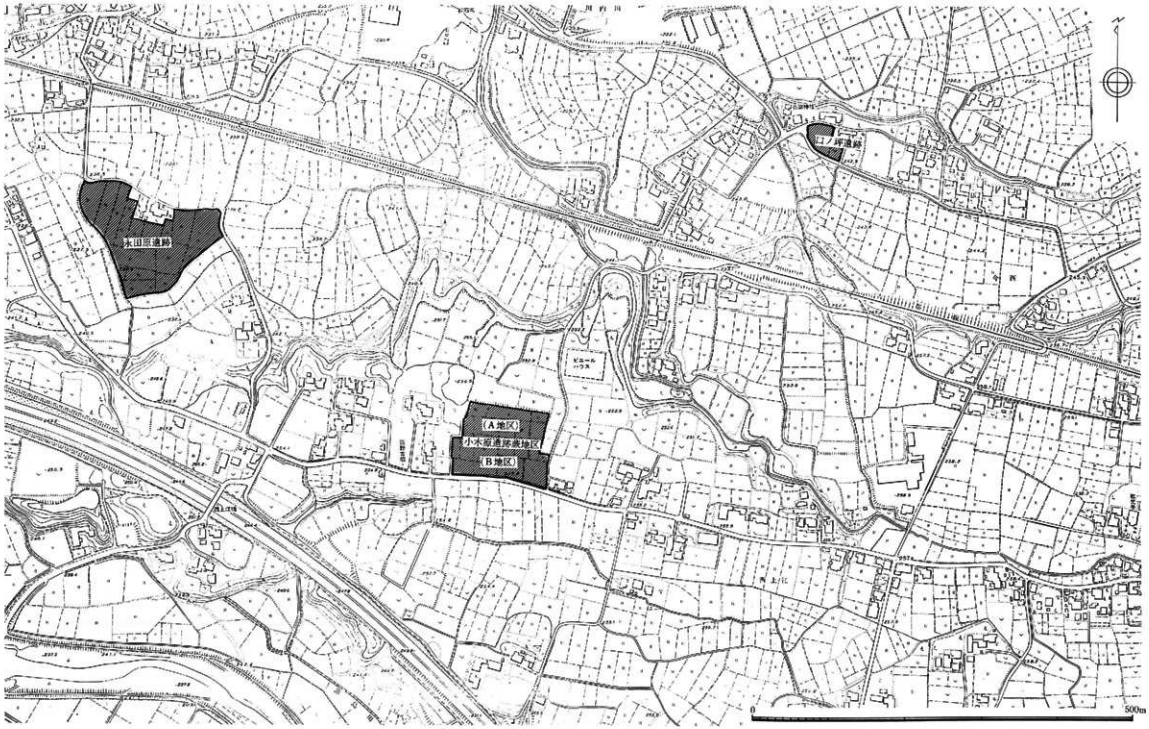
調査の組織は次のとおりである。

調査主体　えびの市教育委員会

教育長	平田敏正
社会教育課長	萩原利典
課長補佐	上別府文夫
社会教育係長	浜松政弘
社会教育主事	吉留伸也（昭和61年度）
（文化財担当）	白川良一（昭和62年度）
臨時職員	吉松啓子
調査員	谷口武範（県総合博物館埋蔵文化財センター主事・永田原遺跡担当）
	永友良典（県教育庁文化課主任主事・小木原遺跡群蔵地区担当）
	寺師雄二（現・山田町社会教育課主事・口ノ坪遺跡担当）
特別調査員	甲元真之（熊本大学教授）
	三辻利一（奈良教育大学教授）
	乙益重隆（国学院大学教授）
	上村俊雄（鹿児島大学教授）
	西健一郎（九州大学助手）
	有村玄洋（県総合農業試験場特別研究員）

なお、永田原遺跡出土の須恵器の胎土分析を三辻利一氏に、小木原遺跡群蔵地区の土壌分析と土壙墓内のリン分析を有村玄洋氏にそれぞれ依頼した。

また、調査にあたっては、木崎原操、竹ノ内実、吉田修身の諸氏から御指導、御助言をいただいた。さらに、亀園耕作氏をはじめとする今西・池島両地区の方々には多大な御援助を賜った。



第2図　調査遺跡位置図

遺跡の位置と歴史的環境

永田原遺跡は、えびの市大字今西字永田原に、小木原遺跡群蕨地区は、大字上江字蔟に、口ノ坪遺跡は、大字今西字口ノ坪に所在する。

えびの市は宮崎県の西南端に位置し、九州山脈と霧島連山に囲繞された狭長な盆地（加久藤盆地）である。加久藤盆地は、第三紀中頃以後、内陸凹地に湖成層が堆積、第三紀後半から第四紀初に火山砕屑物が堆積したのち、第四紀後半以後泥層と入戸火砕流（シラス）が堆積した。[1]のち、下刻が繰り返され、段丘面が形成されて今日に至る。段丘面には火山灰が堆積しているために水田耕作には適さず、肥沃に富んだ氾濫原が可耕地となっていたと思われる。山麓から鉄山川、池島川、白鳥川、長江川など大小20の支流が川内川に合流し、盆地中央を西へ流れる。

本書掲載の３遺跡は、川内川と池島川に狭まれた低位段丘の西端に位置する。沖積面との比高は永田原遺跡で約７ｍ、小木原遺跡群で約20ｍ、口ノ坪遺跡で約10ｍをはかり、標高はそれぞれ238ｍ、250ｍ、240ｍ前後である。小木原遺跡群は、地下式横穴墓の分布範囲でもあるが、弥生時代後期や中世～近世の遺構も含んでいることから、本書では遺跡群として報告する。

旧石器時代

遺構・遺物は発見されていない。

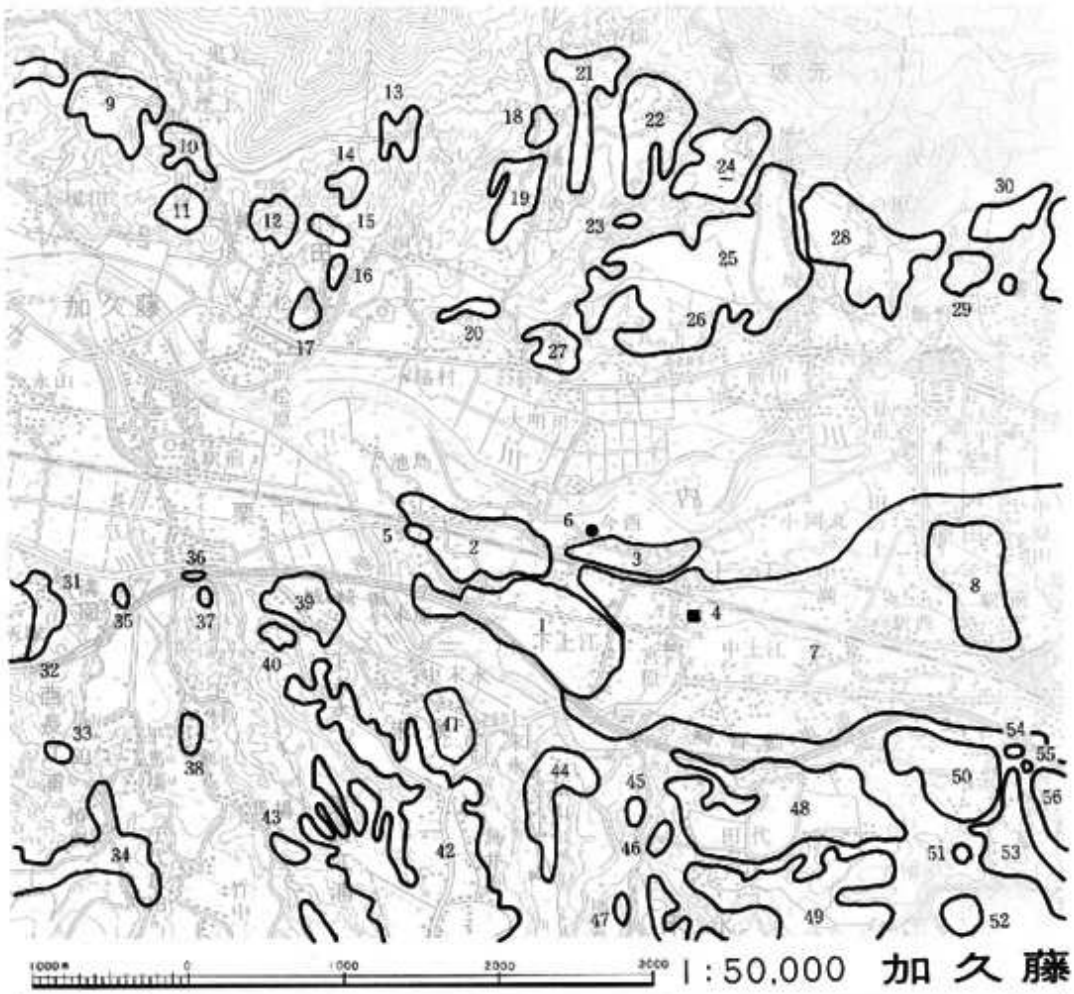
縄文時代

早期の遺跡としては、押型文土器の出土した前畑遺跡[2]、灰塚遺跡[3]、小木原遺跡群久見迫Ｂ地区[4]などがあげられ、久見迫Ｂ地区では柱穴状遺構が検出された。前期の遺跡としては、曽畑式、轟式土器の出土した前畑遺跡および灰塚遺跡があげられる。中期の遺跡は未発見である。後期の遺跡としては前畑遺跡、灰塚遺跡などがあげられ、当該期に属する遺跡が多い。晩期の遺跡としては、黒色磨研土器が出土した灰塚遺跡があげられる。

表採資料としては、村ノ前遺跡や天神免遺跡、灰塚遺跡、広畑遺跡、大迫原遺跡などで石皿が、村ノ前遺跡と天宮遺跡で石錘が、石鏃・石斧類は市内各所で採集されている。剥片石器の原石は、大口市~~日来~~白浜および人吉市桑ノ木水流（くわのきづる）産の黒曜石が主流で、チャートがこれに次いで多い。

弥生時代

前期の遺構・遺物は発見されていない。中期の遺跡としては、新田遺跡と小木原遺跡群久見迫Ｂ地区があげられ、甕形土器が各１点発見されている。後期の遺跡としては、免田式土



No.	遺跡名	時代	19	恵合原遺跡	古墳	38	鍛田越遺跡	古墳
1	小木原地下式横穴群	縄文～中世	20	大明司鳥越遺跡	古墳	39	城ヶ崎遺跡	弥生
2	永田原遺跡	平安～中世	21	山神原遺跡	縄文～古墳	40	植ノ木城跡	弥生～中世
3	口ノ坪遺跡	平安	22	竹畑第３遺跡	縄文～古墳	41	村ノ前遺跡	縄文～古墳
4	法光寺跡	平安	23	竹畑第２遺跡	縄文～古墳	42	野久首遺跡	縄文
5	木崎原古戦場跡	中世	24	竹畑第１遺跡	縄文～古墳	43	加田城跡	中世
6	香取神社	平安	25	広畑遺跡	縄文～古墳	44	加田遺跡	縄文～古墳
7	原田・上江遺跡	縄文～中世	26	竹畑地下式横穴群	古墳	45	井穴遺跡	縄文～古墳
8	猪山地下式横穴群	古墳	27	越シ遺跡	縄文～古墳	46	後迫遺跡	平安
9	牧ノ原遺跡	古墳	28	柳荷下遺跡	縄文～中世	47	弥谷遺跡	縄文～弥生
10	丸尾遺跡	縄文～平安	29	飯野城跡	縄文～中世	48	田代遺跡	縄文～古墳
11	塚土遺跡	縄文～平安	30	塚迫遺跡	古墳～平安	49	天宮遺跡	縄文～古墳
12	加久藤城跡	古墳～中世	31	灰塚遺跡	縄文～平安	50	妙見原遺跡	縄文～古墳
13	城内第３遺跡	縄文～古墳	32	灰塚地下式横穴群	古墳	51	田原陣遺跡	弥生
14	城内第２遺跡	縄文～古墳	33	長牟田遺跡	古墳	52	馬ノ木遺跡	弥生～古墳
15	城内第１遺跡	古墳	34	関元遺跡	縄文～平安	53	石落下遺跡	縄文～古墳
16	尾山遺跡	平安	35	溝渕城跡	中世	54	大迫第２遺跡	縄文
17	竹里遺跡	縄文～平安	36	谷川第１遺跡	平安	55	大迫第１遺跡	弥生
18	六本原第４遺跡	古墳	37	谷川第２遺跡	弥生～古墳	56	大迫原遺跡	縄文～古墳

図　遺跡の位置と周辺の遺跡分布図（１：50,000）

器の出土した灰塚遺跡と小木原遺跡群久見迫B地区があげられる。生活遺構としては、広畑遺跡で竪穴式住居1軒を検出しているのみである。

生産遺構は検出されていないが、石包丁が中棚遺跡、田原陣遺跡[15]、小木原遺跡群蔵地区、法光寺跡、大神免遺跡、さらに学畑遺跡で各1点、灰塚遺跡で2点発見されている。

古墳時代

生活遺構は調査されていないが、南九州独特の墓制が営まれている。

地下式横穴墓は島内[16]、灰塚、小木原[17]、学畑、建山そして杉水流（すぎづる）の6ヶ所に群在し、各々特徴がみられる。当墳墓はすべて平入り長方形ないし楕円形を呈するが、灰塚では竪坑上部閉塞、小木原のうち馬頭・久見迫支群では羨道閉塞（後者はアカホヤ塊で閉塞）、小木原地区と蔵地区、島内、学畑では共存している。これらは全て、加久藤盆地を見下すことのできる洪積世の砂礫段丘上に立地している。明治38年には島内で、「径15間、高さ4尺」の墳丘を有する地下式横穴墓が、大正2年には建山で、「高さ3m、饅頭形」の墳丘を有するもの2墓が調査されており、早くから当該墳墓の存在は知られていた（未）。昭和44年を中心として、島内と小木原では、段丘下部に堆積している礫を建築材料とする目的で、重機による掘削を行ない。幾多の地下式横穴墓が削失した。小木原については、地元在住の木崎原操氏が精力的に調査、立会いをされ、今日の基礎資料となっている。

小木原1号、杉原（＝島内）、杉原41—1号から甲冑が、小木原A号墳から小型仿製鏡と陶邑産の須恵器が出土している。築造年代は6世紀代に集中し、7世紀に降るものは無い。

地下式板石積石室墓は、建山を除く5ヶ所と大迫原遺跡に群在し、4～5世紀代に営まれている。

栫野第1遺跡と大迫原遺跡では相当量の土師器や須恵器が採集されており、これら墳墓の造営者達の集落が想定される。

歴史時代

奈良時代の遺跡としては、蔵骨器[18]（須恵器）2点が発見された天神免遺跡（字蓮花寺）が、平安時代の遺跡としては、10世紀前半の土師器や布目瓦が出土した法光寺跡[19]が知られているにすぎない。市内には、延喜式の十六駅のひとつである真幸（まさき）駅が設置されているが、その所在は不明であり、関連資料も皆無である。

えびの市は島津庄真幸（まさき）院に組み込まれていたが、この領地をめぐって島津氏と伊東氏による激戦が繰り返され、木崎原や三角田（みすみだ）の古戦場、首塚、六地蔵塔などが往時を偲ばせている。飯野城・加久藤をはじめとする20有余の中世の山城は、氾濫原に突出した段丘の先端部に集

中している。

飯野城周辺には、漢詩を作る時の辞書『三重韻』や教科書『碧巌録』を印刷・出版した長善寺、愛染院、昌極庵といった多く寺院があったが、廃仏毀釈で廃寺となっている。

島津氏支配の後は門割制度が設けられ、領地・領民支配が強化されていった。同時に、新田開発や整備も行なわれていったようである。

広畑遺跡の北東部には、16世紀後半に島津氏が開山したと伝えられる鉄山があり、砂鉄を原料とした製鉄が明治期まで営まれていたようであるが、文献・絵図等の資料も無く、実体は不明である。また、市の北西部、西之野において、1856年に鉄鉱石が発見され、島津斉彬の命によって短期間ではあったものの、原料採掘が行なわれた。のち1897年、地元民によって10年余、精錬段階まで営まれていた。

地下式横穴墓から出土する鉄器の量を考えると、上記２ヶ所の製鉄の開始年代の解明には非常に興味がもたれ、今後の調査に期待される。

このほか、大字二八の下において、昭和54年３月、圃場整備事業に伴って塚(仕置塚)を削平する際、一字一石経が掘り出され、若干数が現存している。共伴遺物は無かった様子である。

〔註〕

(1) えびの市教育委員会「えびの市遺跡詳細分布調査報告書」 1985

(2) 石川恒太郎・北郷泰道「前畑遺跡」「九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告(3)」 1979

(3) 石川恒太郎「妖塚遺跡」「九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(2)」 1973

(4) えびの市教育委員会「小木原遺跡群・蕨・久見迫・地主原地区」 1989

(5) (1)参照

(6) 宮崎県教育委員会「平松地下式古墳発掘調査」「宮崎県文化財調査報告書」第10集 1965
宮崎県教育委員会「えびの町真幸・島ノ内地下式横穴」「宮崎県文化財調査報告書」第12集 1967
宮崎県教育委員会「えびの町平松の地下式古墳調査報告」「宮崎県文化財調査報告書」第14集 1969
宮崎県教育委員会「えびの市島ノ内地下式古墳調査報告」「宮崎県文化財調査報告書」第16集 1971
宮崎県教育委員会「平松地下式古墳発掘調査」「宮崎県文化財調査報告書」第22集 1986

(7) 宮崎県教育委員会「久見迫、馬頭遺跡」「小木原遺跡」「小木原古墳、地下式A号墳」「九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書」(1) 1972
木崎原操「小木原古墳群調査報告第２報～第７報」「えびの」第２号～第８号 1971～1975

(8) 飯野町郷土史編纂室「飯野町郷土史」 1966

(9) 宮崎県総合博物館「宮崎県総合博物館収蔵資料目録 考古・歴史資料編」 1983

(10) (1)参照

永田原遺跡（ながたばる）

例　言

1．永田原遺跡で使用した略記号は次のとおりである。

ＳＡ……竪穴住居跡　　ＳＢ……掘立柱建物跡

ＳＥ……溝状遺構

2．土器の色調については「新版 標準土色帖」に準拠した。

本文目次

Ⅰ．調査の経過と概要 …… 13
Ⅱ．遺跡の環境 …… 14
Ⅲ．調査の成果 …… 20
　1．調査区の層序 …… 20
　2．弥生時代の遺構と遺物 …… 20
　3．歴史時代の遺構と遺物 …… 26
　　(1) 掘立柱建物の分布 …… 26
　　(2) 溝状遺構 …… 38
　　(3) 出土遺物 …… 41
Ⅳ．まとめ …… 76

挿図目次

第1図　周辺地形図 …… 15
第2図　遺構分布図及び調査区 …… 16
第3図　遺構分布図 …… 17～18
第4図　土層断面図(1) …… 21～22
第5図　土層断面図(2) …… 23
第6図　1号住居跡実測図 …… 24
第7図　出土遺物実測図 …… 25
第8図　遺構分布図 …… 26
第9図　SB1 …… 29
第10図　SB2・SB10 …… 30
第11図　SB3 …… 31
第12図　SB4 …… 32
第13図　SB5 …… 33
第14図　SB6 …… 34
第15図　SB7 …… 35
第16図　SB8 …… 36
第17図　SB9 …… 37
第18図　出土遺物分布状況 …… 43～44
第19図　土師器実測図(1) …… 46
第20図　土師器実測図(2) …… 47
第21図　土師器実測図(3) …… 48
第22図　土師器実測図(4) …… 49
第23図　土師器実測図(5) …… 50
第24図　出土遺物分布図(土師器) …… 51～52
第25図　須恵器実測図(1) …… 55
第26図　須恵器実測図(2) …… 56
第27図　須恵器実測図(3) …… 57

第28図　出土遺物分布状況(須恵器) …… 59～60
第29図　須恵器・土師質土器実測図 …… 61
第30図　布痕土器実測図 …… 62
第31図　出土遺物分布図(布痕土器) …… 63～64
第32図　紡錘車・土錘実測図 …… 65
第33図　磁器実測図(1) …… 67
第34図　陶磁器実測図(2) …… 68
第35図　陶器実測図(3) …… 69
第36図　陶器実測図(4) …… 70
第37図　陶器実測図(5) …… 71
第38図　陶器実測図(6) …… 72
第39図　陶器実測図(7) …… 73

図版目次

図版1　遺構検出状況 …… 107
図版2　上　検出状況(東から)　下　住居跡(北から) …… 108
図版3　土師器(甕・坏) …… 109
図版4　土師器(坏・高台付埦・須恵質) …… 110
図版5　須恵質土師器・墨書土器・紡錘車・土錘・須恵器・土師質土器 …… 111
図版6　須恵器甕・布痕土器 …… 112
図版7　陶磁器 …… 113
図版8　陶器 …… 114
図版9　陶器 …… 115
図版10　陶器・弥生土器・挟入片刃石斧 …… 116

表目次

土器観察表(土師器甕) …… 79～81
土器観察表(土師器坏・高台付埦・須恵器坏・墨書土器・土師質土器) …… 82～89
土器観察表(布痕土器) …… 90～93
土器観察表(陶磁器) …… 94～101
土器観察表(須恵器甕) …… 102～101

Ⅰ．調査の経過と概要

永田原遺跡は、昭和60年度に行われたえびの市内全域の遺跡詳細分布調査によって確認されていたが昭和59年度から継続して行われていた上江・池島地区県営圃場整備事業の昭和61年度事業区内に遺跡が含まれたため、西諸県農林振興局、上江土地改良区、県文化課及び市教育委員会の四者で埋蔵文化財の保護について協議を行い、事業施工上現状保存が困難な部分について記録保存の措置をとることになった。発掘調査はえびの市教育委員会が主体となり、昭和61年10月28日から翌年１月31日まで実施した。

調査区周辺は、以前から土師器や須恵器の破片が表採されていたことや立地面が300基を越える小木原地下式横穴墓群の下の段丘にあたることなどから古墳時代の集落が期待されていた。しかし、試掘調査の結果、包含層が０～40cmと薄くその下すぐに砂質層が露出し、すでに遺構については削平されているかあるいは存在しないのではないかと想像された。そこで、包含層が残存している箇所を中心に10mグリッドを設定し重機による表土剥ぎを行った。表土剥ぎ後、遺構、遺物の検出に努めたが包含層中での遺構検出は困難であったため黄褐色砂層まで掘り下げて確認した。その結果、包含層の無い箇所にも砂質層に掘り込んだ溝状遺構や柱穴などを検出し、最終的には溝状遺構17条、掘立柱建物跡10棟、弥生時代後期の住居跡１軒と多数の柱穴を検出した。遺構の大部分は発掘区の東側に集中している。溝状遺構は、大きくは南北に延びるものと東西に延びるもの、「⌐」字状に区画するものなど四つに分類できる。溝の役割として掘立柱建物跡との関係は今回の調査では指摘できなかった。また、溝の埋土を観察しても水が流れたような状況も認められないことから、区画として用途が考えられる。溝状遺構の年代は、相対的な前後関係は捉えられるが、時期決定できるものは少ない。その中でＳＥ４は暗渠状の集石の中から多量の薩摩焼や肥前系磁器類が出土し、おおよそ18世紀代に位置付けできよう。掘立柱建物跡の分布は大きく二群に分かれて集中する。第１群は発掘区の東端部に建てられた建物群で、ＳＢ４～10の７棟から構成される。建物の主軸はＳＢ４・５が南北方向で、それ以外は東西方向を示している。建物の規模としてはＳＢ６の１間×３間の身舎に東・西・北の庇を設けたものを最大として、１間×３間の建物１棟、１間×４間の建物１棟、２間×２間の建物１棟、２間×３間の建物１棟、２間×２間の建物の北・東に庇を有するもの１棟からなる。第２群は発掘区のほぼ中央やや南寄りに位置し、ＳＢ１～３の３棟から構成される。第２群においても主軸は東西方向が主体で南北方向はＳＢ１の１棟だけである。建物としては、１間×３間の建物１棟、２間×２間の建物２棟からなる。柱穴などからの出土遺物は少なく、建物の時期を決定するまでには至らなかった。

しかし、包含層からの出土遺物の分布は柱穴群や掘立柱建物跡の分布状況とほぼ一致し、第1群とした掘立柱建物群の区域に平安時代の遺物が特に集中し、何棟かは平安時代に含まれる建物と考えられる。それ以外は、薩摩焼や磁器類の時期、つまり近世に入ると想定される。発掘区の中央から西に延びる凹地は、遺構としての立ち上がりや土の堆積状況から自然のものと考えられ、遺構検出面からの深さが約60cm、幅約8mで発掘区中央部で次第に浅くなり消滅する。西側の凹地端は確認することが出来なかった。出土遺物には平安時代のものが多く、東端部で集中して出土した遺物のレベルよりやや低いことから、当時まだ埋没の途中に遺物が流れ込んだと想定される。

歴史時代の遺物は、大きく近世と平安時代に分けることができる。前者には薩摩焼の碗、茶家、摺鉢、甕や肥前系磁器などがある。後者は多様で土師器、須恵器、布痕土器、黒色土器、墨書土器、紡錘車、土錘などが出土し、その多くは包含層から検出されたものである。

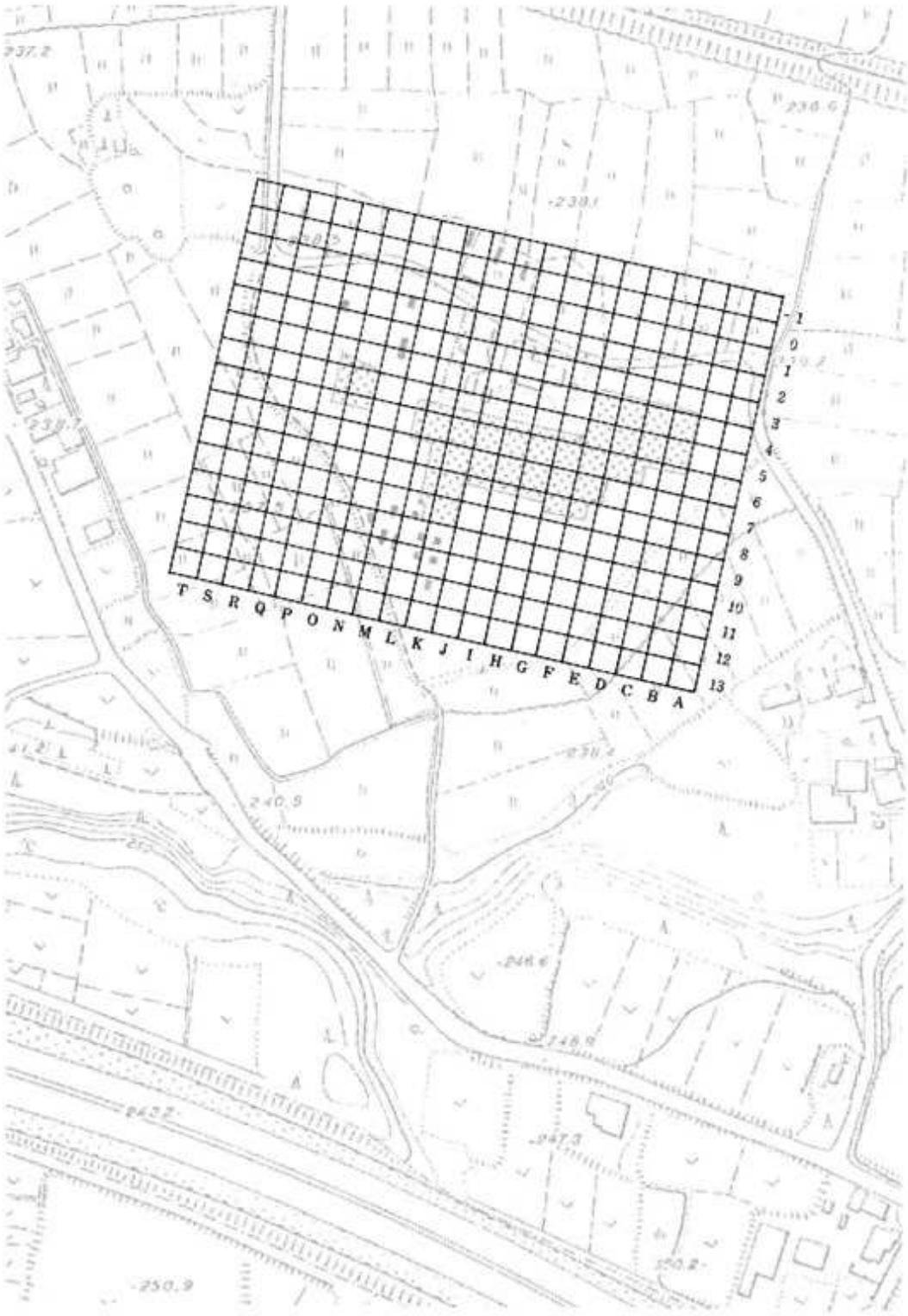
弥生時代後期の竪穴住居跡は、いわゆる花弁状住居で発掘区の東端隅に検出された。東側には明瞭な花弁部が残るが西側については最近の耕作や攪乱によって、花弁を有するかどうか判断できない。出土遺物も甕や壺など小量であった。また、住居跡周辺から抉入り片刃石斧が1点出土している。遺構・遺物の出土状況からすると弥生時代の生活の場は東に広がっていた可能性が高い。

Ⅱ．遺跡の環境

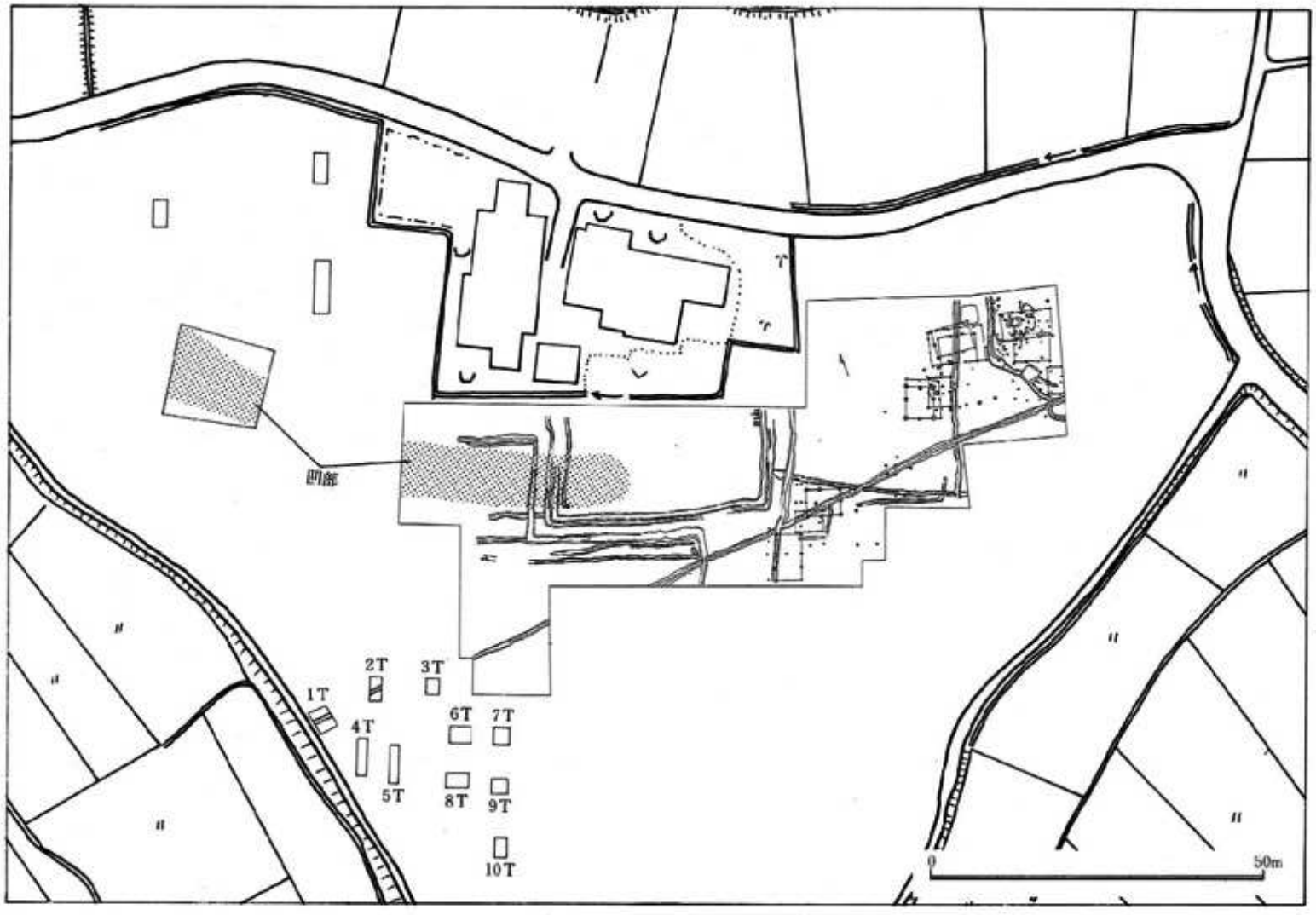
永田原遺跡は、えびの市大字今西字永田原にある。

永田原遺跡は、川内川とその支流である池島川に挟まれた標高約240mの段丘上に位置する。今西地区でも西端にあたり池島地区に近い。一帯は川内川と池島川の合流地点で「水利ハ便ナリ水害ハ極テ多シ」（池島村）、「水利ハ便ナリ水損ハ少シクコレアリ」（今西村）[1]とあるように洪水の被害が多かったようで、川内川がまきおこした洪水の被害は現在までに約200回にも及んでいる。[2]

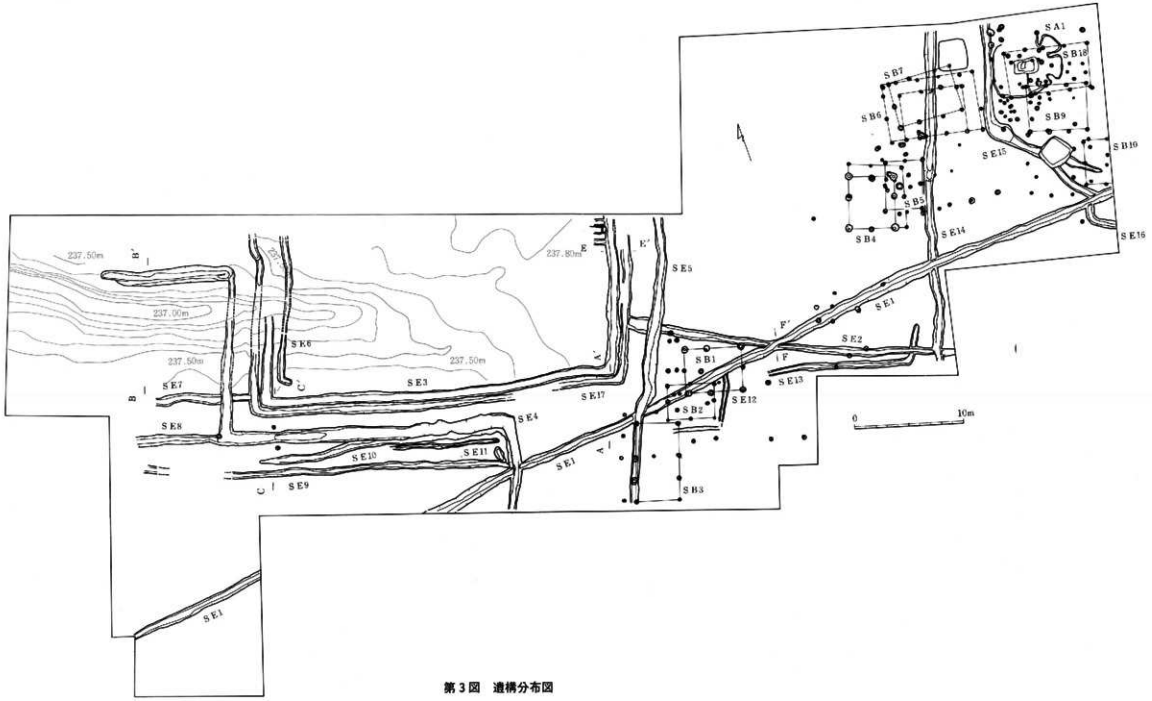
遺跡は低位段丘面[3]に立地し、同じ段丘面には先土器時代から古墳時代までの遺構、遺物は今回の調査まで発見されていなかった。[4] 1段高い標高約250mの段丘[5]には小木原（こきばる）地下式横穴墓群が築造されており、数回にわたって発掘調査が行なわれている。[6]低位段丘面に先人の跡をみるのは、口ノ坪遺跡、法光寺跡など平安時代になってからである。口ノ坪遺跡では、柱穴や土師器、須恵器などが出土している。法光寺跡は、「宗派及ヒ廢毀ノ年月詳ナラス字倉元ニ



第1図　周辺地形図



第２図　遺構分布図及び調査区


SA1
SB10
SB7
SB6
SB9
SB10
SE15
SB5
SB4
SE14
SE16
SE5
SE1
SE2
SB1
SE13
SE12
SB2
SB3
SK6
SE7
SE3
SE17
SE8
SE4
SE10
SE11
SE9
SE1
SE1
237.50m
237.00m
237.50m
237.50m
237.80m
0
10m

第3図　遺構分布図

アリ圍ニ丈ニ達エ高稍天ニ參ル蓋シ數百年ノ物ナリ相傳フ古ヘ寺庭ニアリシ所メリ今畦畷トナル」[7]とある。昭和60年に推定地の試堀調査が行なわれ、布目瓦や土師器が出土している[8]。市内には、延喜式の十六駅のひとつ真幸駅が設置されているが、その所在は不明である。また、当時えびの周辺は日向建久図田帳によれば、島津荘真幸院320町に組み込まれている[9]。

中世になると、日向では島津氏と伊東氏の二大勢力が抬頭し、各地で領地争奪が行なわれていた。特に、飫肥と真幸(飯野も含む)の両地域についてはその激しさを増すばかりで1572年には木崎原の戦いが行なわれた。これを機に伊東氏は没落し、かわって島津氏の日向支配が始まる。遺跡の周辺には、木崎原や三角田[10]などの古戦場をはじめ、大刀洗川という地名や島津氏の武将を祭った首塚の碑がみられる。

このように、えびのの地は日向、肥後、薩摩の分岐点（接点）にあたり、数多くの歴史事象を招き、その影響が出土遺物や各種の文献にみられるようである。

註

(1) 平部嶠南『日向地誌』1929

(2) 『川内川五十年史』建設省九州地方建設局川内川工事事務所　1982

(3) 遠藤尚「前畑遺跡をとりまく地質的背景」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』宮崎県教育委員会　1979
上記の報告書では低位段丘よりさらに下の段丘面になるが、最低位段丘は他に使用されているので、便宜上低位段丘面とした。

(4) 今回の調査によって弥生時代の住居跡が確認された。

(5) 註3)と同じ

(6) 「えびの市遺跡詳細分布調査報告書」『えびの市埋蔵文化財調査報告書』第1集　えびの市教育委員会　1985
小木原地下式横穴墓群の文献に関しては上記の報告に詳しい。

(7) 註1)に同じ

(8) 註6)に同じ

(9) 「建久図田帳」『日向郷土史料集』第5巻　日向郷土史料集刊行会　1963

(10) 註1)に同じ

〈参考文献〉

『飯野町郷土史』　飯野町　1966

『加久藤郷土誌』　加久藤町　1965

日高次吉『宮崎県の歴史』　山川出版社　1970

Ⅲ．調査の成果

1．調査区の層序

遺跡一帯は、水田に利用されているため現地形は平坦面を呈し、旧地形を想定することは難しい。土層の状態は、長年にわたる開墾のためか、南九州通有のアカホヤ層が全くみられず、厚さ20～40cmの耕作土や黒褐色土などの有機質土壌が僅かに認められるだけで、その下は黄褐色砂質層や礫層となっている。このことからすれば、あまり居住あるいは耕作には必ずしも適した場所とはいえない。

第1トレンチ東壁において基本層序をみてみると、Ⅰ層：暗褐色土、Ⅱ層：暗褐色土、Ⅲ層：黒褐色土、Ⅳ層：黒褐色砂質土、Ⅴ層：黒褐色砂質土とⅥ層との混じり、Ⅵ層：黄褐色砂層、Ⅶ層：礫層となる。Ⅰ層は現水田面、Ⅱ層は床土で暗赤褐色のマンガン結核を含み固く締まる。Ⅲ層・Ⅵ層が遺物包含層となるが、平安時代の遺物のほとんどはⅥ層から出土している。Ⅴ層がⅥ層との漸移層で、Ⅵ層が地山となる。

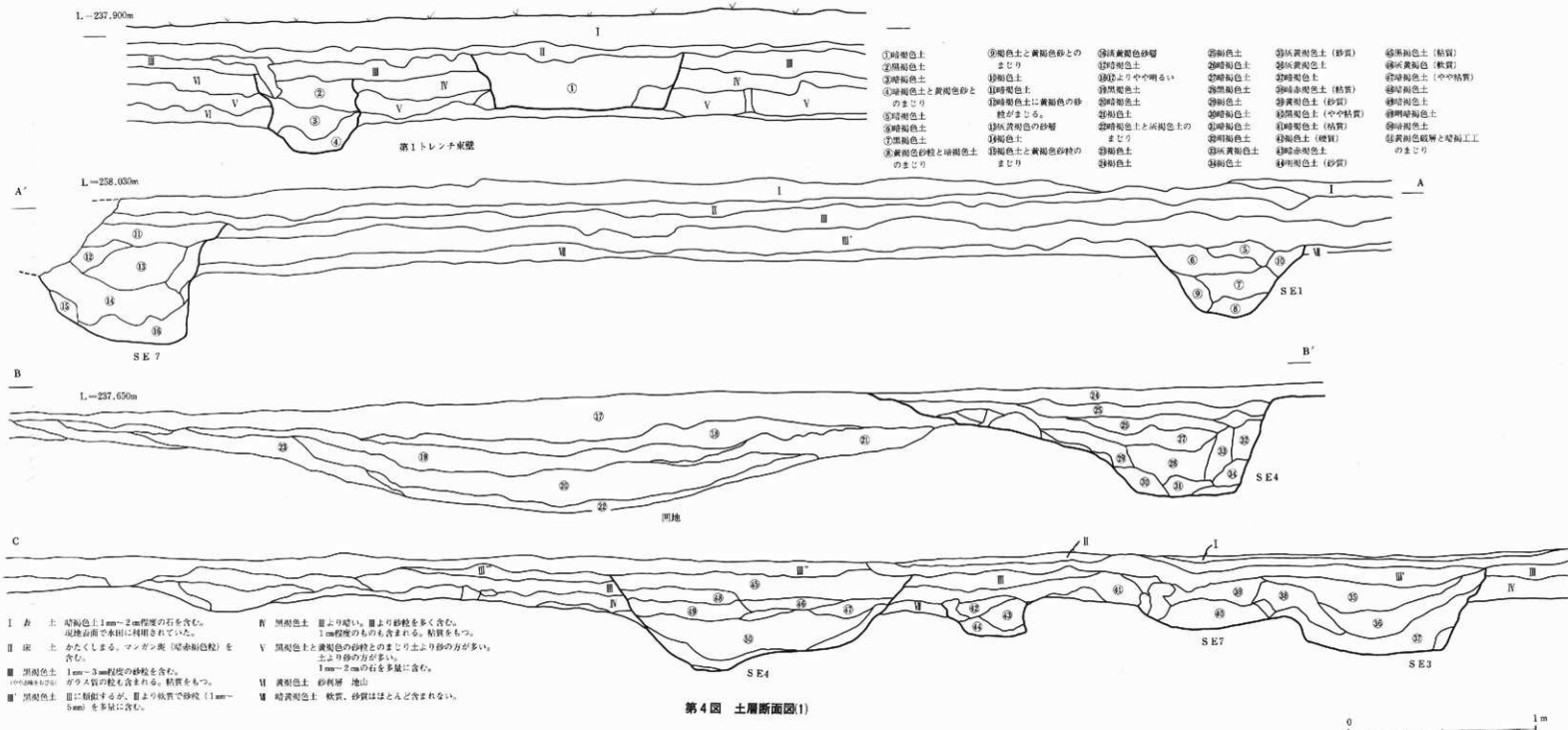
2．弥生時代の遺構と遺物

住居跡（第6図）

発掘区の北東端に検出され、東側には明瞭な花弁部が残る。西側については最近の耕作や撹乱のため花弁を有するかどうか不明であるが、花弁を持たない可能性が高い。また、柱穴も後世のものが多量に重複しているため確定はできず、住居ほぼ中央に位置する長方形の落ち込みは埋土中から陶磁器が出土し、後世のものと考えられる。住居は現存径5.5ｍ、検出面からの深さ約25cmで黄褐色砂層（第Ⅵ層）まで掘り込まれている。床面は貼床で、厚さは10cm内外である。突出部は3箇所現存し検出面で確認された。発掘区内からこの時期に属する遺構は、ほかには検出されていないが、表土や包含層から弥生土器が出土していることから同時期の遺構が存在していた可能性がある。

出土遺物（第7図）

住居内から出土した土器は少なく、1、3～6、8の6点のみ図示した。1は壺形土器で底部は尖底気味の丸底をなす。3は壺の胴下半部で底部は尖底気味の平底を呈す。上半部は割れ口付近から「く」の字状に屈曲し、器形は算盤玉に近いものと考えられる。屈曲部には現存部で2本の沈線と斜方向の刻みが施され重弧文風の文様が予想される。外面はハケ調整。4～6、8は甕形土器である。5は口縁部が内外へ張り出しT字状をなす。8は頸部があまり屈曲せず口縁部は緩やかに長く外反する。2、7、9～12は包含層出土である。包含



①暗褐色土
②黒褐色土
③暗褐色土
④暗褐色土と黄褐色砂とのまじり
⑤暗褐色土
⑥暗褐色土
⑦黒褐色土
⑧黄褐色砂粒と暗褐色土のまじり
⑨褐色土と黄褐色砂とのまじり
⑩褐色土
⑪暗褐色土
⑫黒褐色土
⑬暗褐色土に黄褐色の砂粒がまじる。
⑭褐色土
⑮褐色土と黄褐色砂粒のまじり
⑯淡黄褐色砂層
⑰暗褐色土
⑱暗褐色土と黄褐色の砂粒とのまじり
⑲褐色土
⑳暗褐色土と灰褐色土のまじり
㉑明褐色土
㉒褐色土
㉓褐色土
㉔灰黄褐色土（砂質）
㉕灰黄褐色土
㉖暗褐色土
㉗暗褐色土
㉘黒褐色土
㉙褐色土
㉚暗褐色土
㉛灰黄褐色土
㉜褐色土
㉝灰黄褐色土（粘質）
㉞灰黄褐色土（軟質）
㉟暗褐色土
㊱暗赤褐色土（粘質）
㊲黄褐色土（砂質）
㊳暗褐色土（やや粘質）
㊴暗褐色土（硬質）
㊵暗赤褐色土
㊶明褐色土（砂質）
㊷黒褐色土（粘質）
㊸灰黄褐色（軟質）
㊹暗褐色土（やや粘質）
㊺暗褐色土
㊻明褐色土
㊼黄褐色砂層と暗褐土工のまじり

Ⅰ 表　土　暗褐色土1mm～2cm程度の石を含む。現地表面で水田に利用されていた。

Ⅱ 床　土　かたくしまる。マンガン斑（暗赤褐色粒）を含む。

Ⅲ 黒褐色土　1mm～3mm程度の砂粒を含む。（やや砂質を含む）ガラス質の粒も含まれる。粘質をもつ。

Ⅲ′ 黒褐色土　Ⅲに類似するが、Ⅲより軟質で砂粒（1mm～5mm）を多量に含む。

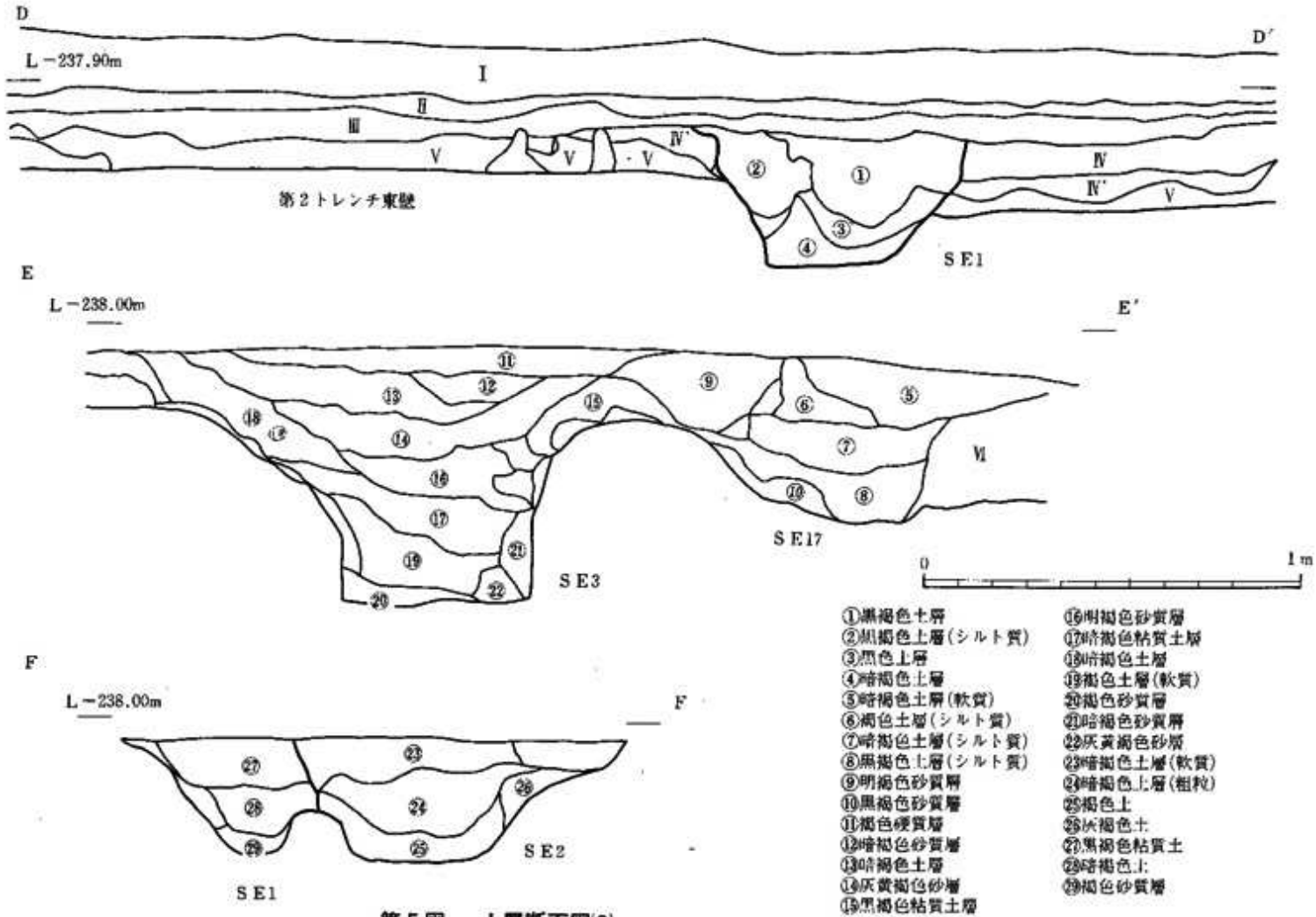
Ⅳ 黒褐色土　Ⅲより暗い。Ⅲより砂粒を多く含む。1cm程度のものも含まれる。粘質をもつ。

Ⅴ 黒褐色土と黄褐色の砂粒とのまじり土より砂の方が多い。土より砂の方が多い。1mm～2cmの石を多量に含む。

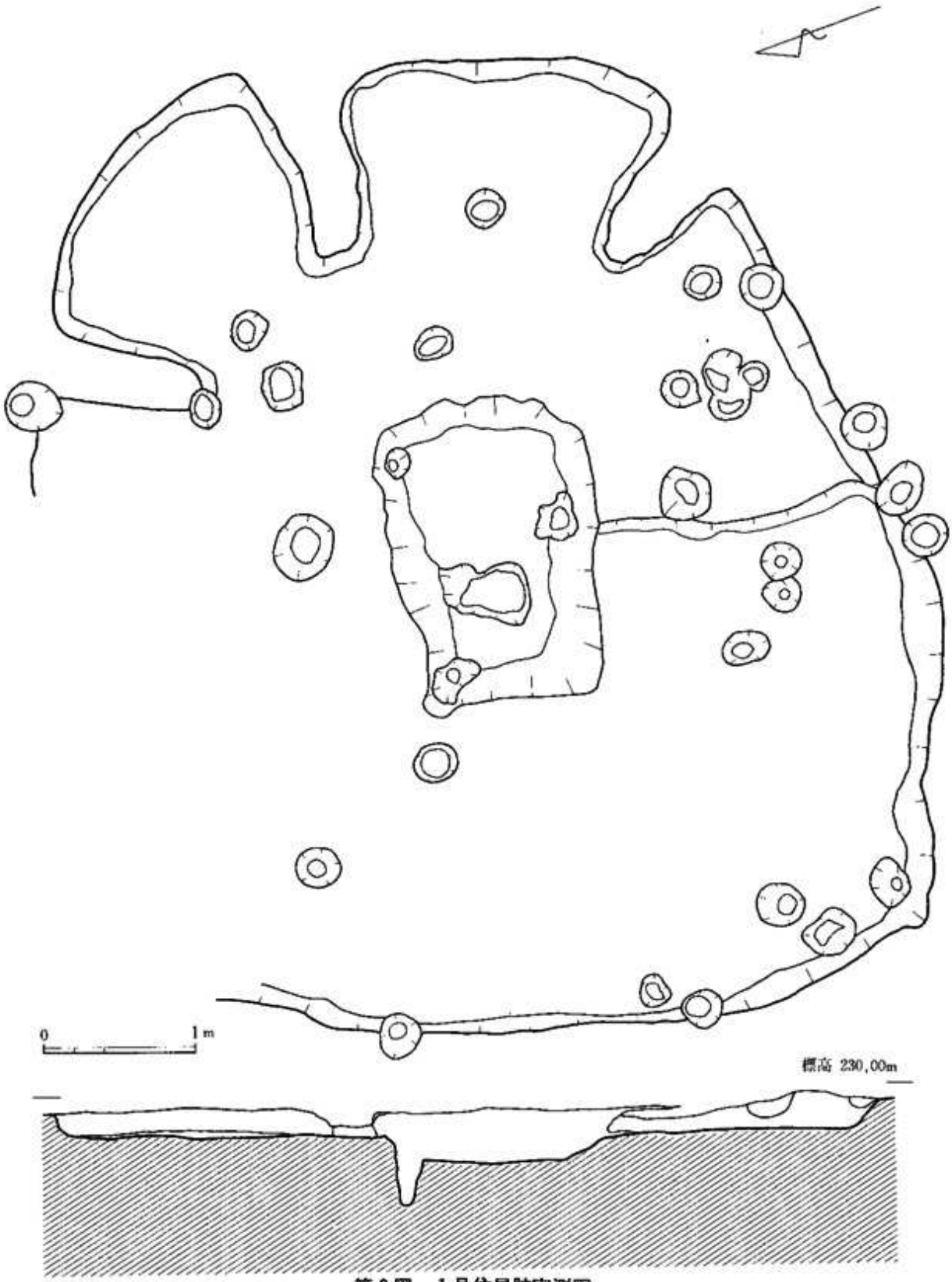
Ⅵ 黄褐色土　砂利層　地山

Ⅶ 暗黄褐色土　軟質、砂質はほとんど含まれない。

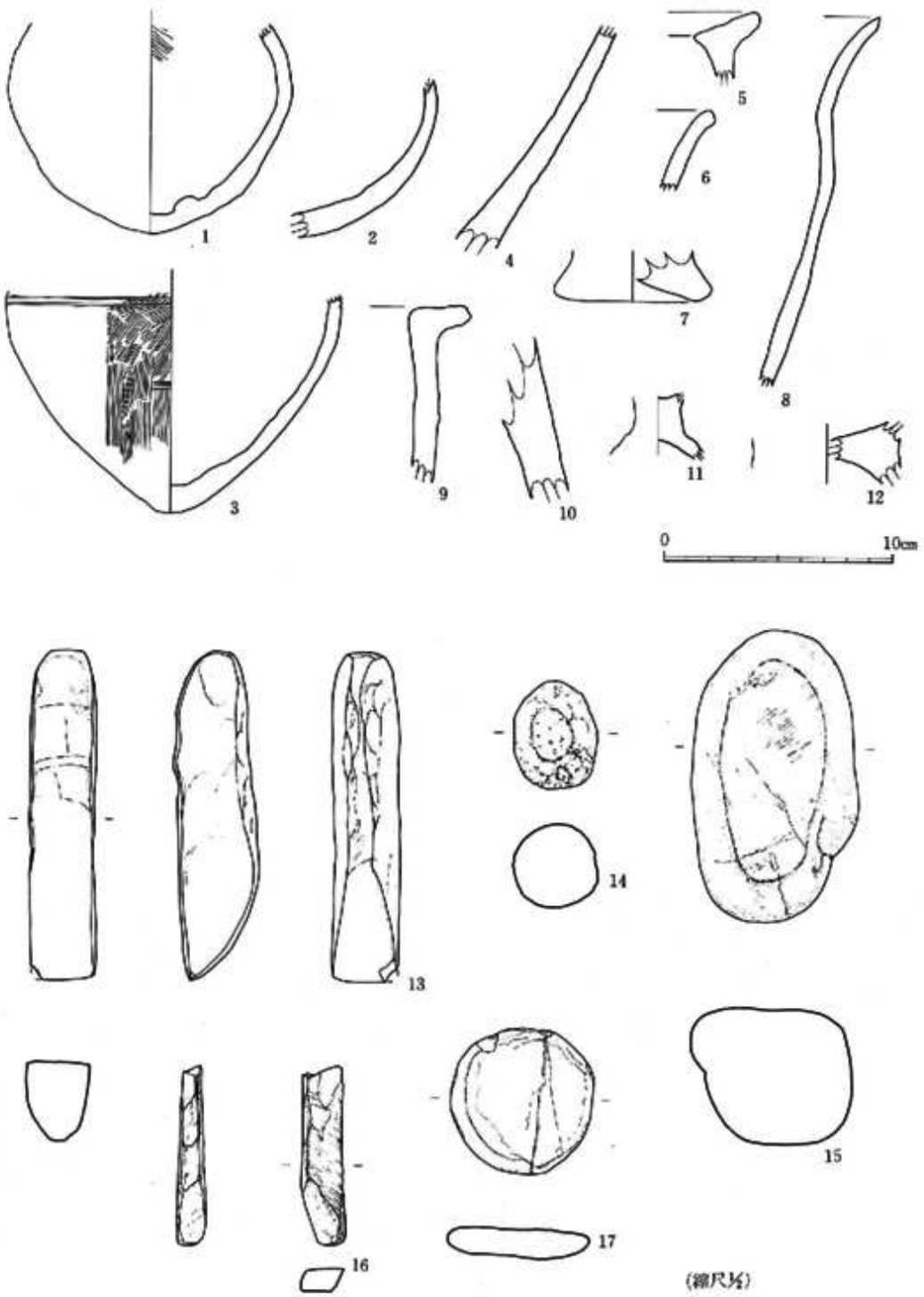
第4図　土層断面図(1)


D
D′
L－237.90m
I
II
III
IV
IV′
V
第2トレンチ東壁
SE1
E
E′
L－238.00m
SE17
SE3
VI
0
1m
F
F
L－238.00m
SE2
SE1
①黒褐色土層
②褐色土層(シルト質)
③黒色土層
④暗褐色土層
⑤暗褐色土層(軟質)
⑥褐色土層(シルト質)
⑦暗褐色土層(シルト質)
⑧黒褐色土層(シルト質)
⑨明褐色砂質層
⑩黒褐色砂質層
⑪褐色硬質層
⑫暗褐色砂質層
⑬暗褐色土層
⑭灰黄褐色砂層
⑮黒褐色粘質土層
⑯明褐色砂質層
⑰暗褐色粘質土層
⑱暗褐色土層
⑲褐色土層(軟質)
⑳褐色砂質層
㉑暗褐色砂質層
㉒灰黄褐色砂層
㉓暗褐色土層(軟質)
㉔暗褐色土層(粗粒)
㉕褐色土
㉖灰褐色土
㉗黒褐色粘質土
㉘暗褐色土
㉙褐色砂質層

第5図　土層断面図(2)



第6図　1号住居跡実測図



第7図　弥生時代遺物実測図

層からは破片が約50点ほど出土している。9は甕形土器で口縁部は逆L字状を呈す。内外面とも摩耗が激しく調整は不明だが、口縁部下に2条の突帯がつくと考えられる。10は高杯の脚部である。石器は土器に比べ出土量は少ない。16は住居出土で砥石である。一部欠損し、部分的に剝離している。4面とも面取りされ、何れにも擦り痕が認められる。13は住居周辺から出土した抉り入り柱状片刃石斧である。全面的に摩耗が激しく使用痕や調整痕は確認できない。長さ14.3cm、幅2.9cm、厚さ約3.5cmで、刃部が一部欠損している。14、15は砂岩製の磨石である。17は円盤状の石器である。径6.3cm、厚さ約1.2cmを測る。

出土遺物から住居の時期は古い要素としてT字状口縁があり、逆に8の甕形土器などは新しい様相であるが、壺の底部の状態から一応弥生時代終末に比定しておきたい。そのほか、包含層から逆L字状の口縁をもった甕や抉入片刃石斧など出土しており、付近には弥生中期の遺構が存在すると考えられる。

3．歴史時代の遺構と遺物

掘立柱建物の分布（第8図）

掘立柱建物跡及び柱穴群は、発掘区の東半分にまとまっており、さらに東と西の2群に分けられる。建物の方向は10棟の内7棟までがおおよそ東西方向を示し、南北方向は3棟と少ない。建物の規模は、SB6の1間×3間の身舎に東・西・北の庇を設けたものを最大とするが5m前後のものが大勢を占める。柱穴からは79や108の土師器坏やカメ、布痕土器片など若干出土している。また、包含層中から出土した遺物は、掘立柱建物周辺や間地に多く分布し、特に、SB6・7の内部より東西の縁辺部に集中している。そのほか、一部には弥生土器片も出土したものもみられた。建物の年代決定は、柱穴から出土した遺物が無かったり、あっても小片であることから包含層出土の遺物などと伴にあとで一括して述べたい。

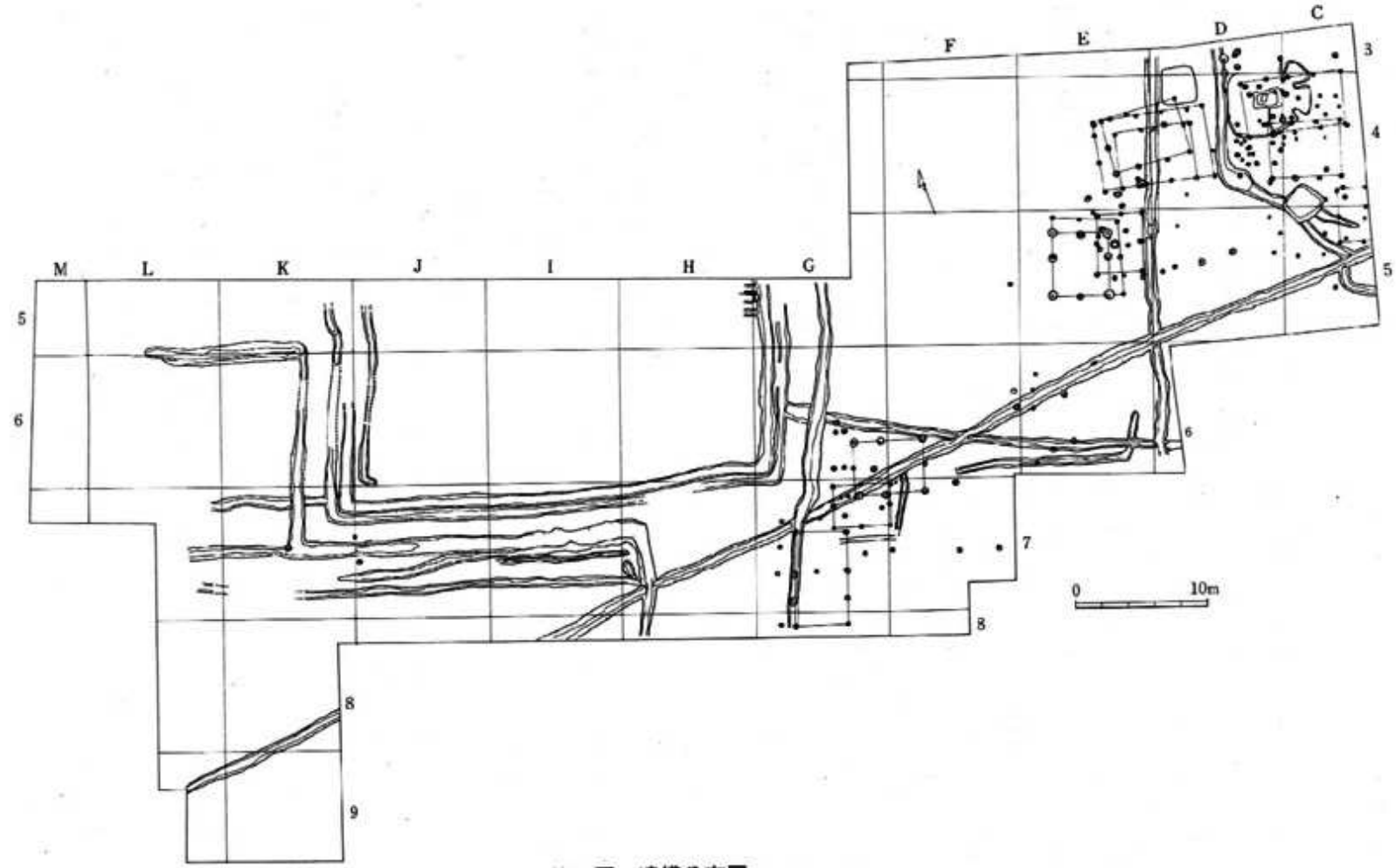
(1) 掘立柱建物

SB1（第9図）

第2群に属し、SB2およびSE1、SE2と重複関係にある。東西方向の建物で主軸をN－73°－Wにとる。身舎は桁行2間、梁行2間で、桁行5.20m、梁行3.92mである。柱穴の桁方向が径40～50cmと大きく、梁方向が30cm前後と小さい。深さも桁方向が約70cmで梁方向が約30～40cmと差異が認められる。柱穴内から遺物はほとんど出土していない。

SB2（第10図）

第2群に属し、SB1、SE1と重複関係にあり、SB3に近接する。東西方向の建物で



第8図　遺構分布図

主軸をN－72°－Wにとる。身舎は桁行２間、梁行２間で、桁行4.42m、梁行3.24mである。柱穴の掘り方は径20～30cmの円形をなす。深さ20～30cm。柱穴内から遺物はほとんど出土していない。

SB３（第11図）

第２群に属し、ＳＥ５、ＳＥ12と重複関係にあり、ＳＢ２に近接する。南北方向の建物で主軸をN－19°－Wにとる。身舎は桁行３間、梁行１間で、桁行7.06m、梁行3.98mである。柱穴の掘り方は径30～50cmの円形をなし、深さ70～90cm。柱痕が確認され、柱は径15cmの円形をなす。Ｐ－１から肥前系陶磁の小坏が出土している。

SB４（第12図）

第１群に属し、ＳＢ５と重複関係にある。東西方向の建物で主軸をN－73°－Wにとる。身舎は桁行２間、梁行２間で北と東に庇をつける。桁行4.78m、梁行4.16mである。身舎の柱穴の掘り方は径30～40cmの円形で、深さ約50～80cm。庇部は、梁行4.86m、桁行2.78mを測る。柱穴は径15～20cmの円形をなし、深さ20～30cm。柱穴からは、土師器が若干出土している。

SB５（第13図）

第１群に属し、ＳＢ４、ＳＥ14と重複関係にある。東西方向の建物で主軸をN－20.5°－Eにとる。身舎は桁行２間、梁行２間で、桁行4.44m、梁行3.36mである。柱穴は径20～30cmの円形をなす。深さ20～30cm。柱穴内から遺物はほとんど出土していない。

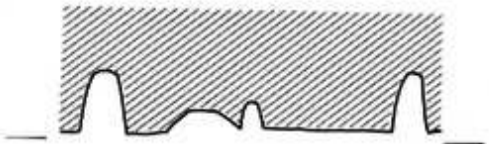
SB６（第14図）

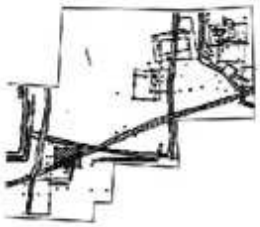
第１群に属し、ＳＢ６、ＳＥ14と重複関係にある。南北方向の建物で主軸をN－80°－Eにとる。身舎は桁行３間、梁行１間で東、西、北の３方向に庇をつける。桁行5.82m、梁行4.18mで、柱穴の掘り方は径20～30cmの円形をなし、深さ30～70cm。庇は梁行5.34m、桁行8.40m、柱穴は径20～30cmの円形をなし、深さ20～30cm。また、柱穴に柱痕が確認され、柱は径約10cmの円形をなす。柱穴からは、土師器が若干出土している。

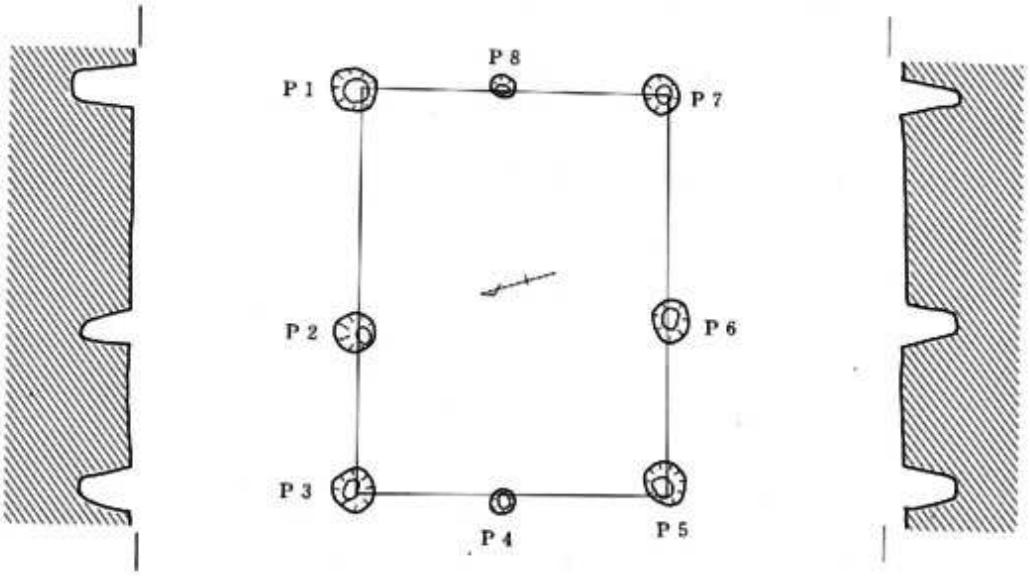
SB７（第15図）

第１群に属し、ＳＢ６、ＳＥ14と重複関係にある。南北方向の建物で主軸をN－87°－Wにとる。身舎は桁行３間、梁行２間で、桁行6.00m、梁行4.22mである。柱穴の一部は攪乱によって消滅している。柱穴の掘り方は径30～40cmの円形をなし、深さ30～40cm。柱穴内からは土師器が若干出土している。

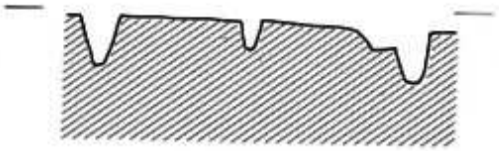
SB８（第16図）





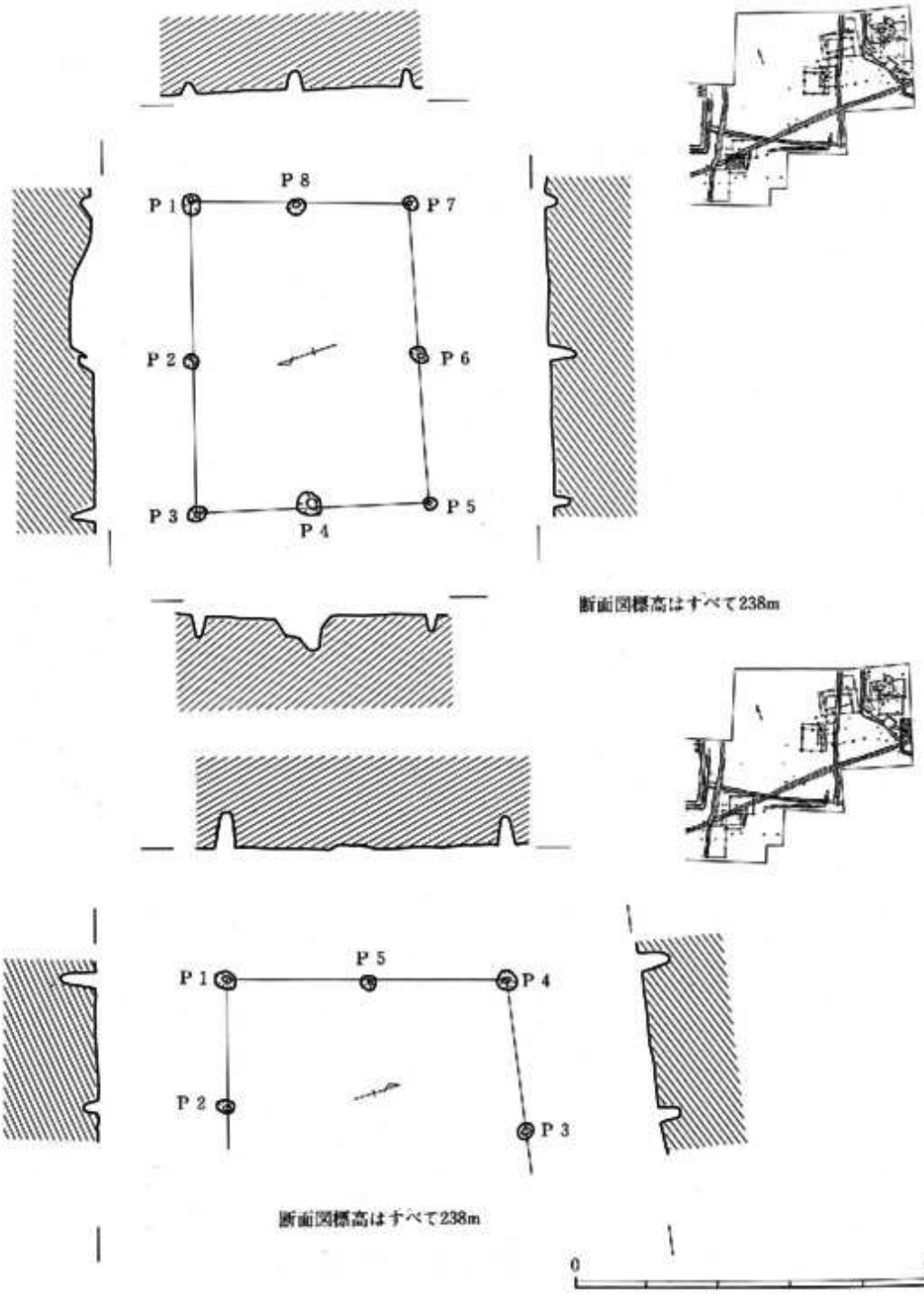


断面図標高はすべて238m

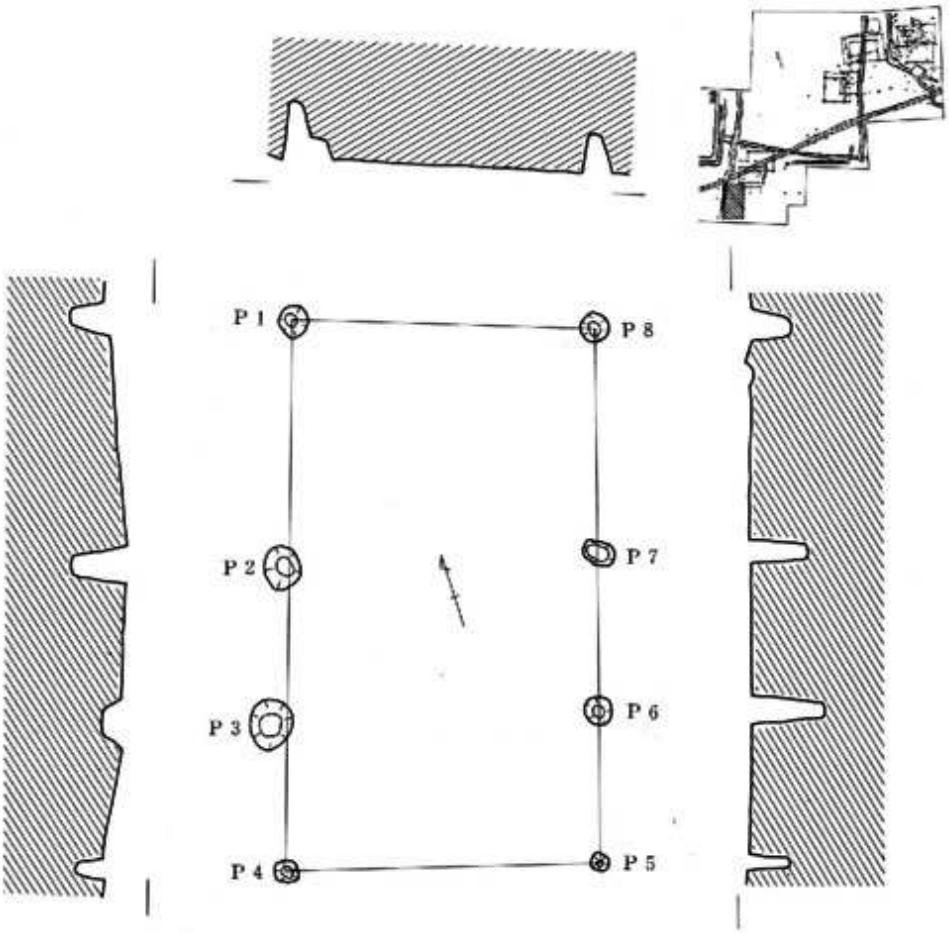


柱　間	桁 行 (m)	桁 行(m)				梁 行 (m)	梁 行(m)				主軸方向	備　考
		P1～P2	P2～P3	P7～P6	P6～P5		P1～P8	P8～P7	P3～P4	P4～P5		
2間×2間	5.20	3.18	2.02	2.88	2.26	3.86	1.78	2.08	1.84	2.08	N 73° E	SB2．SE1 SE12と重複
	5.14					3.92						

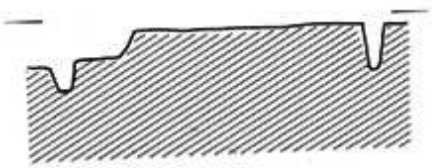
第9図　SB1



第10図　SB 2・SB10



断面図標高はすべて238m



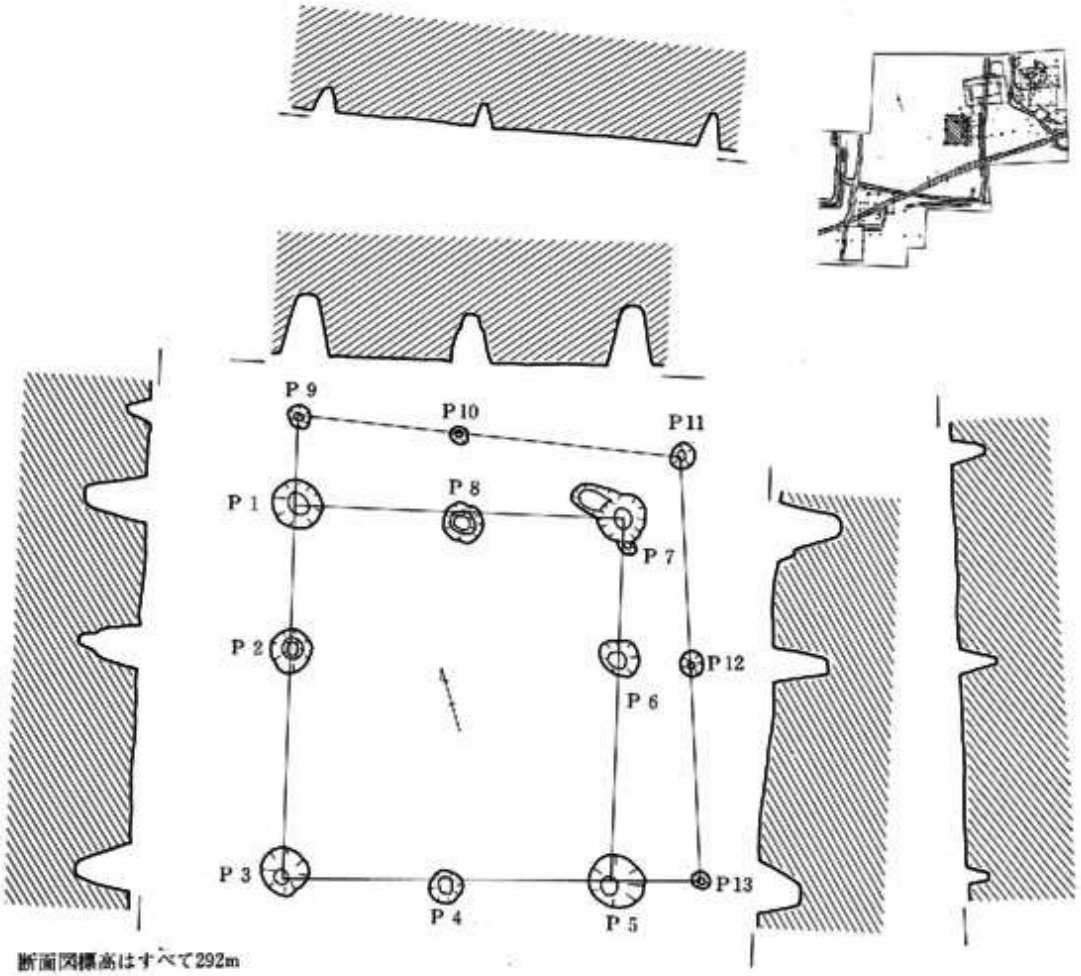
SB2

柱間	桁行(m)	桁行(m)				梁行(m)	梁行(m)				主軸方向	備考
		P1~P2	P2~P3	P7~P6	P6~P5		P1~P8	P8~P7	P3~P4	P4~P5		
2間×2間	4.42	2.24	2.18	2.26	1.98	3.04	1.48	1.56	1.64	1.60	N 72° W	SB1, SE1と重複
	4.24					3.24						

SB3

柱間	桁行(m)	桁行(m)						梁行(m)		主軸方向	備考
		P1~P2	P2~P3	P3~P4	P8~P7	P7~P6	P6~P5	P1~P8	P4~P5		
1間×3間	7.06	3.18	3.00	1.88	2.86	2.04	1.98	3.84	3.98	N 19° W	SE5, SE12と重複
	6.88										

第11図　SB3

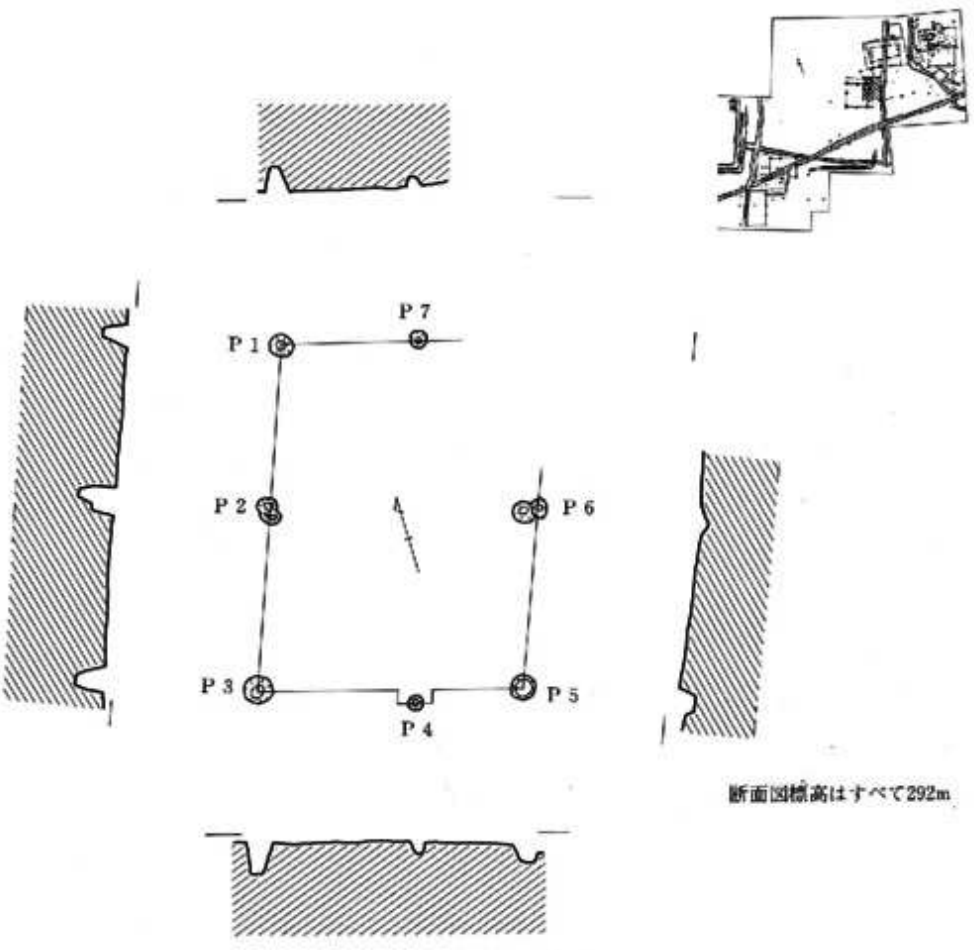


断面図標高はすべて292m

柱間	桁行 (m)	桁行(m)				梁行 (m)	梁行(m)			
		P1~P2	P2~P3	P7~P6	P6~P5		P3~P4	P4~P5	P1~P8	P8~P7
2間×2間	4.78 4.64	1.92	2.86	1.82	3.82	4.16 4.16	2.10	2.06	2.12	2.04

梁行 (m)	梁行(m)		桁行 (m)	桁行(m)		P1~P9	P5~P13	主軸方向	備考
	P9~P10	P10~P11		P11~P12	P12~P13				
4.80	2.06	2.80	5.44	2.66	2.78	1.14	1.14	N 17° E	北・東に廂 SB5と重複

第12図　SB4



SB 5

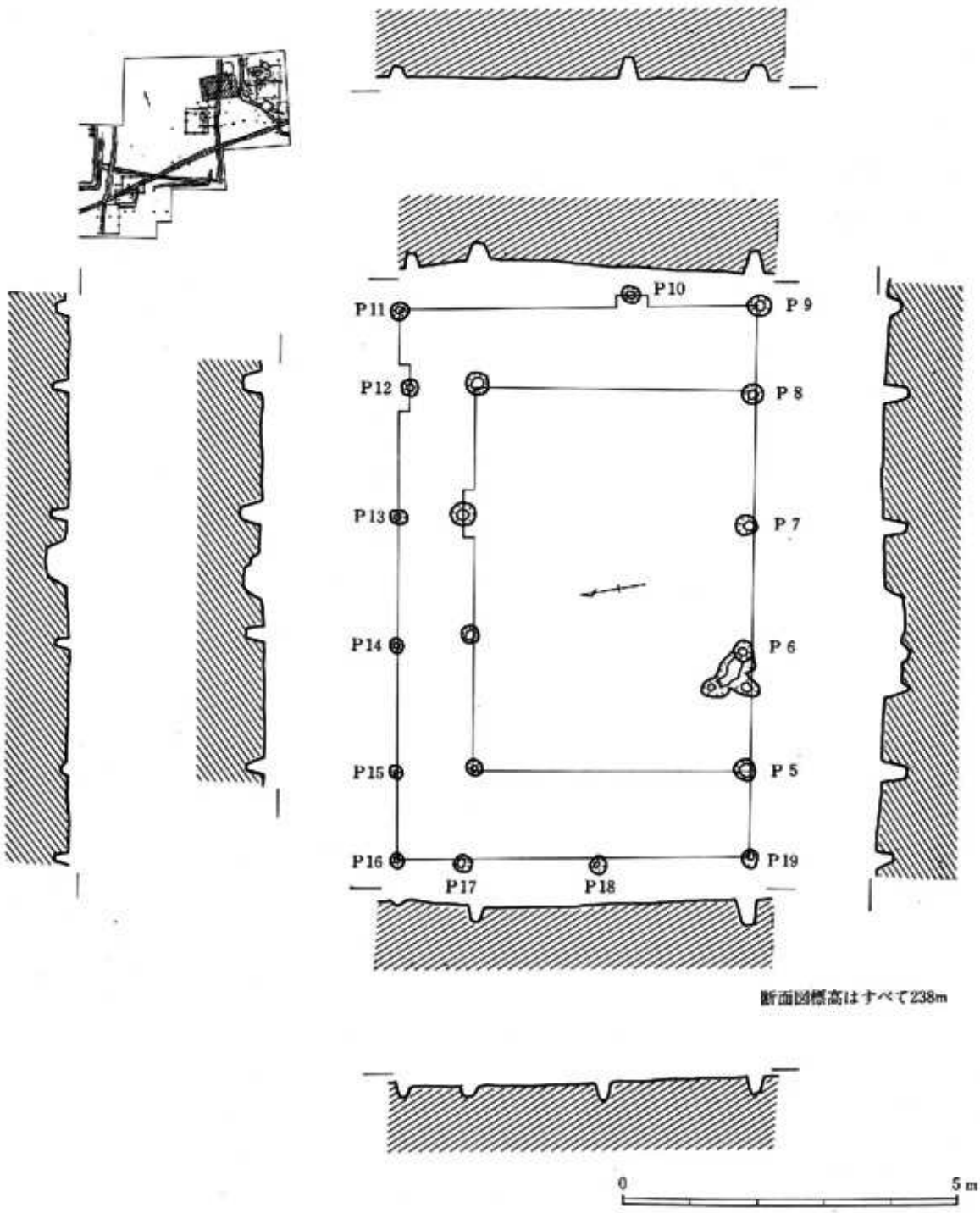
桁行	桁行(m)			梁行	梁行(m)			主軸方向	備考
	P1~P2	P2~P3	P6~P5	(m)	P3~P4	P4~P5	P1~P7		
2間×2間	4.44	2.06	2.38	2.34	3.36	2.00	1.36	1.76	N20.5°E	SB4. SE14と重複

SB 6

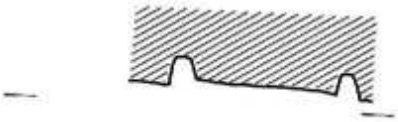
桁行	桁行(m)							梁行(m)		桁行	桁行(m)	
	P1~P2	P2~P3	P3~P4	P8~P7	P7~P6	P6~P5	P1~P8	P4~P5	(m)	P13~P14	P12~P13
1間×3間	5.82	1.94	1.82	2.06	2.04	1.90	1.82	4.18	4.16	8.32	1.26	1.96
	5.76									1.96		

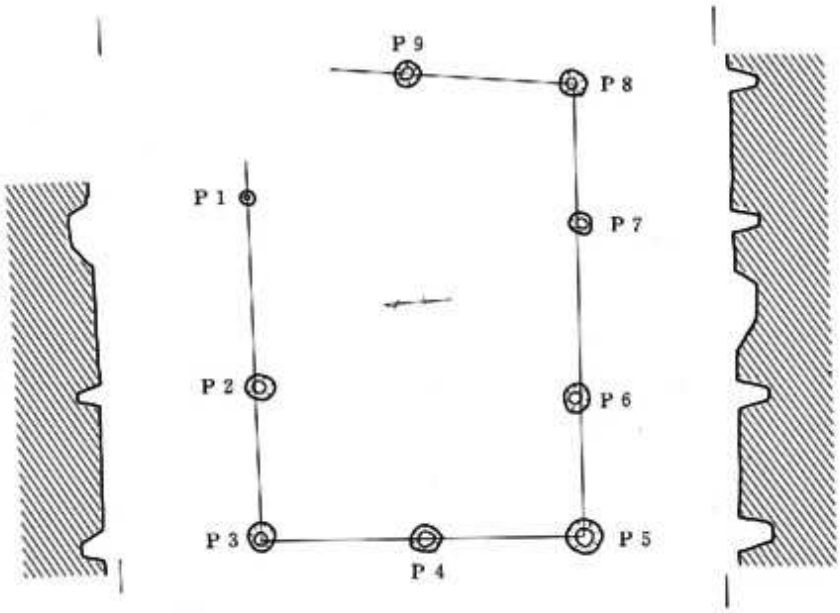
桁行(m)			梁行	梁行(m)					P9~P8	P5~P19	主軸方向	備考
P13~P14	P14~P15	P15~P16	(m)	P11~P10	P19~P9	P16~P17	P17~P18	P18~P19				
1.96	1.90	1.32	5.34	3.46	1.88	0.98	2.02	2.26	1.28	1.28	N 80° E	北、東、西に底
			5.26									

第13図　SB 5

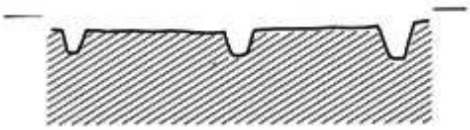

P10
P11
P9
P12
P8
P13
P7
P14
P6
P15
P5
P16
P19
P17
P18
断面図標高はすべて238m
0
5m

第14図　SB6



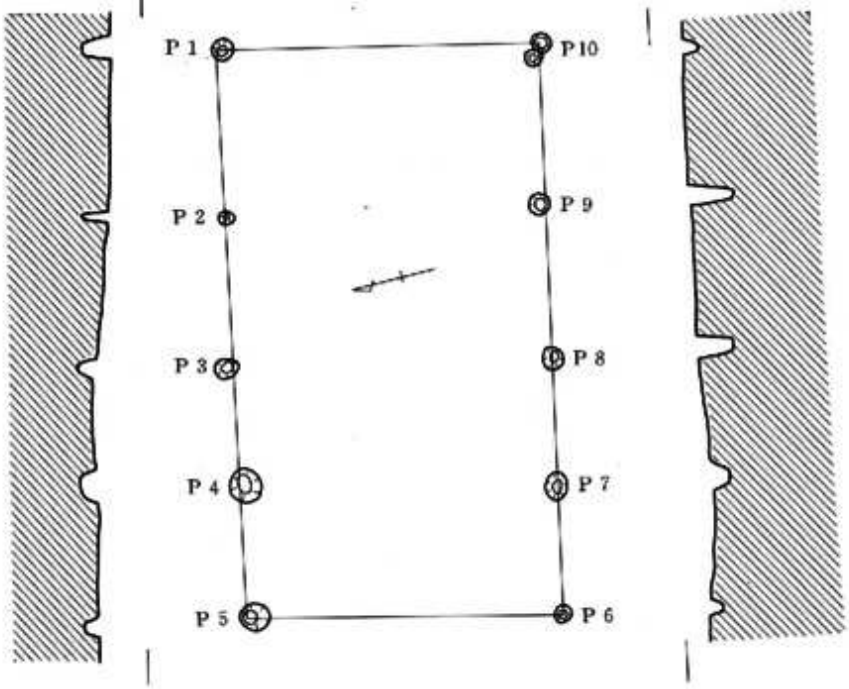


断面図標高はすべて238m

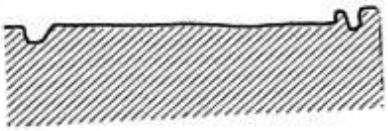


柱間	桁行(m)	桁行(m)					梁行(m)				主軸方向	備考
		P1～P2	P2～P3	P3～P7	P7～P5	P6～P5	P3～P4	P4～P5	P8～P9			
2間×3間	6.00	2.44	1.96	1.78	2.24	1.98	4.22	2.20	2.02	2.14	N 87° W	SB6、SE14と重複

第15図　SB7

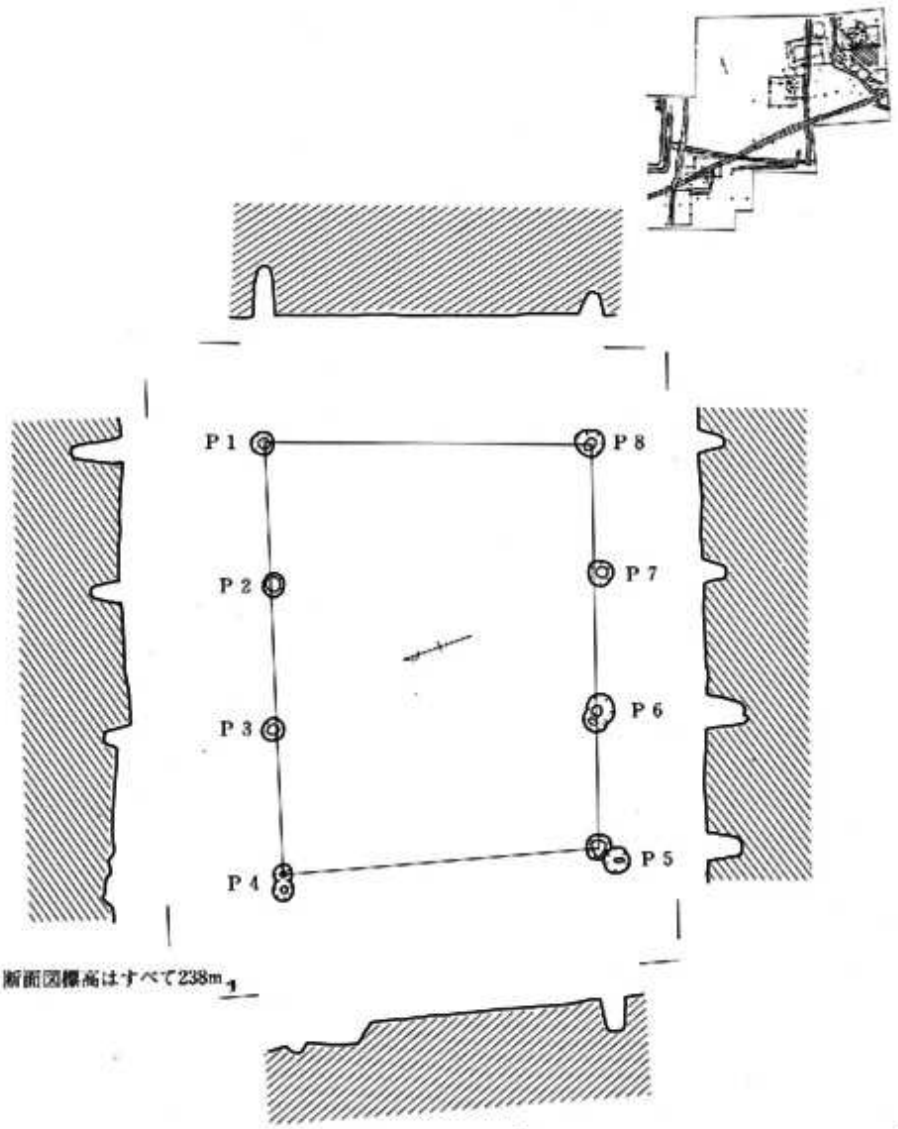


断面図標高はすべて238m



柱間	梁行 (m)	桁行(m)								梁行(m)		主軸方向	備考
		P1~P2	P2~P3	P3~P4	P4~P5	P10~P9	P9~P8	P8~P7	P7~P6	P1~P10	P5~P6		
1間×4間	7.28 7.32	2.14	1.92	1.50	1.72	2.08	1.94	1.68	1.62	4.14	4.08	N79°W	SB9と重複

第16図　SB8



SB9

柱間	桁行(m)	桁行(m)						梁行(m)		主軸方向	備考
		P1~P2	P2~P3	P3~P4	P8~P7	P7~P6	P6~P5	P1~P8	P4~P5		
1間×4間	5.54 5.18	1.82	1.95	1.86	1.64	1.76	1.78	4.20	4.06	N 73° W	SB8と重複

SB10

柱間	桁行(m)		梁行(m)	梁行(m)		主軸方向	備考
	P1~P2	P4~P3		P1~P5	P5~P4		
×2間	1.82	2.14	3.98	2.06	1.92	N 72° E	

第17図　SB9

第１群に属し、ＳＢ９と重複関係にある。東西方向の建物で主軸をＮ－７９°－Ｗにとる。身舎は桁行４間、梁行１間で桁行7.28m、梁行4.14mである。身舎の柱穴の掘り方は径20～30cmの円形で、深さ約30～40cm。柱穴内から遺物はほとんど出土していない。

ＳＢ９（第17図）

第１群に属し、ＳＢ８と重複関係にある。東西方向の建物で主軸をＮ－７３°－Ｅにとる。身舎は桁行２間、梁行２間で、桁行5.54m、梁行4.20mである。柱穴は径20～30cmの円形をなす。深さ20～30cm。また、柱穴に柱痕が確認され、柱は径約10cmの円形をなす。柱穴内からは土師器が若干出土している。

ＳＢ10（第10図）

第１群に属し、調査区外に延びる。南北方向の建物で主軸をＮ－７２°－Ｅにとる。身舎は桁行不明、梁行２間で梁行3.98mである。柱穴は径20～30cmの円形をなし、深さ20～40cm。柱穴内から遺物はほとんど出土していない。

(2) 溝状遺構

溝状遺構は、発掘区内でその役割や用途、掘立柱建物跡との関係など言及できるものはないが、方形に区画されたＳＥ３、ＳＥ17や「⌐」状に延びるＳＥ４など機能の差が感知される。溝状遺構は17条確認され、東西方向、南北方向、方形区画、途中で消滅するものの四つに大別できる。それらはそれぞれに切り合いまた、掘立柱建物跡と重複関係にあることから何時期の時期幅が考えられる。

ＳＥ１

発掘区の東端から西に延びる溝状遺構で、調査区内をほぼ一直線に横切る。ＳＢ１、２と重複関係をもち、ＳＥ14・２・５・４・９と前後関係を有する。遺構および土層の状態からＳＥ１が最も古いと考えられる。ＳＥ15・16とは切り合い関係が不明で、同一時期に使用された可能性もある。溝の上部はⅢ層によって削平されている。断面は台形を呈し、Ⅲ層下面からの深さは約35cmである。

ＳＥ２

発掘区の中央からやや東部分に位置し、東西に延びる。西側はＳＥ17とぶつかったところで消えている。ＳＥ１をＳＥ２が切っており、ＳＥ２が後出する。また、ＳＥ５がＳＥ２を切っていることからＳＥ２が先行するが、ＳＥ17との前後関係ははっきりしない。溝は二段掘りに近く、断面は台形状をなす。検出面からの深さは約35cmである。出土遺物としては20の須恵器や陶磁器類が若干みられる。

SE3・SE17

ＳＥ３、ＳＥ17は発掘区の中央からやや西側に位置し、平行して「コ」の状に区画している。ただ、ＳＥ３は凹地中央部で消滅する。ＳＥ３、ＳＥ17ともⅢ層によって削平されているが、ＳＥ３は断面が台形状をなし、検出面からの深さは約40cmである。しかし、北に延びた箇所では深さは約75cmと非常に深くなる。また、ＳＥ17は断面が「Ｕ」字状を呈し、検出面からの深さは約25cmとＳＥ３よりも浅いが、北側では約45cmと深くなる。土層の堆積状態からＳＥ３がＳＥ17に先行すると考えられるが、同時併存の可能性もある。遺物としては、青磁（２・３）、土師器杯（59・106）、須恵器（４・29・39）のほか図示しなかったが土師器甕や杯の破片、備前焼の擂鉢などが多量に出土している。現在の家が建てられている付近に当時の居住区が存在していた可能性がある。

SE4

ＳＥ４は発掘区の中央からやや西に位置し「⌐」状に延びるが、北側の西に曲がったところで一段深くなり終結する。ＳＥ１、７～９、10と重複関係にあるがいづれにもＳＥ４が後出する。東西から南に延びた「一」部分には底から上層まで川原石や陶磁器類が集積された状態で検出されたが、ほかの箇所ではこのような状況は認められなかった。ＳＥ４の断面は「Ｕ」字状を呈し浅い二段掘りとなり、検出面からの深さは約55cmである。また、北側の一段深くなる部分は、断面は台形状をなすが南側立ち上がりは北側に比べ、緩やかなスロープを呈する。深さは約60cm。明らかに凹地を削平して作られている。遺物のほとんどは集積された部分から出土し、薩摩焼が最も多く器種では甕、擂鉢、茶家、碗の順に多い。磁器類は陶器に比べ少ないが、その中では肥前系の碗類が主体で18世紀代に比定できる。土師器、須恵器などはほとんど出土していない。

SE5

発掘区のほぼ中央を南北に一直線に延びる。ＳＢ３、ＳＥ１、２と重複している。ＳＢ３との前後関係は不明だが、ＳＥ１、２はＳＥ５に先行する。断面は台形を呈し、深さ約30cmを測る。遺物は須恵器（118）、布痕土器（47）のほか陶器類が若干出土している。

SE6

ＳＥ３、17に区画された中にあり、南北に延び南端で東に折れたところで終わっている。断面は「Ｕ」字状をなし、深さは北端で約25cm、南端で約40cmと南側が深くなっている。出土遺物は磁器碗（14・15・48・98）、土師器坏（38・48・78・112）、黒色土器（93）、布痕土器（38・42）のほか図示しなかったものとして土師器甕・坏や布痕土器、須恵器など出

土している。

SE7

ＳＥ７は発掘区の西側に位置し、東西に延びる溝状遺構である。東はＳＥ４と重複しＳＥ17と交わり、西側は削平のためか途中で消滅している。検出面からの深さは深いところで約10cmを測る。

SE8

ＳＥ７と平行して東西に延び、東はＳＥ４と交わり南は削平のためか途中で消滅している。ＳＥ４と連接されていた可能性がある。検出面からの深さは約12cmとなる。

SE9

ＳＥ７、８の南に位置し、それらに平行して東西に延びる溝状遺構である。東はＳＥ４と接し、西側は削平のためか途中で消滅している。検出面からの深さは約10cm。

SE10

ＳＥ４から南西に派生して延びるもので、西側は削平のためか途中で消滅している。ＳＥ４との切り合い関係は不明である。深さはＳＥ４との接点付近では約18cm、西側では約８cmと次第に浅くなる。

SE11

ＳＥ４とＳＥ９の間に位置し、東西に延びる。中央付近で２cm程度の段差を有する。検出面からの深さは約６cmである。

SE12

ＳＥ12はＳＢ１～３の掘立柱建物跡群と重複している。「⌟」状に延び北側はＳＥ１と結がっているが前後関係は不明。南側部分は削平により浅くなっている。

SE13

ＳＥ12の東に位置し、ＳＥ２と重複している。東西に延びたあと「⌟」形に北に上がり終結する。西側は次第に浅くなり消滅する。深さは東で約15cm、西で約５cmである。

SE14

発掘区の東に位置し南北に一直線にＳＥ５と平行に延びている。中央から20cm前後の段差を持ちながら除々に深くなる。ＳＢ４～６の掘立柱建物跡群と重複するが前後関係はわからない。また、ＳＥ14はＳＥ１、２と切り合うがそれらより後出する。断面は台形状を呈し、深さは中央付近が最も深く約45cm、浅いところは南・北端で約30cmである。

SE15

ＳＢ６とＳＢ８の間を通り東南に延びる。ＳＥ１と交わるが、切り合い関係が不明で連接され同一時期に使用された可能性がある。断面は台形状を呈し、深さ約25cmである。

ＳＥ16

発掘区の東端に位置しＳＥ１から派生して東に延びる。ＳＥ１との前後関係は不明。深さ約20cmを測る。

遺物の出土状況

(3) 出土遺物

出土遺物には土師器（甕・杯・墨書土器・高台付碗・黒色土器・甑・皿・蓋）、須恵器（甕・杯・高台付碗・蓋・瓶・皿）、布痕土器、土師質土器、陶磁器（青磁・備前焼・染付・薩摩焼）などの容器類のほかに紡錘車や土錘などがある。これらの遺物のほとんどは遺構に伴うものではなく包含層から出土したものだが、分布状況をみると掘立柱建物跡など遺構が検出されたところに集中している。この集中箇所は大きく４群(Ａ～Ｄ)に分けることができる。Ａ群は堀立柱建物跡第１群のあるＣ～Ｅ－３～５グリッドに分布し、特にＳＢ６・７の東西縁辺に集中する。Ｂ群は凹地から出土した遺物群、Ｃ群はＫ～Ｌ－８～９グリッド、Ｄ群は掘立柱建物跡第２群周辺のものの四箇所に遺物のまとまりがみられる。出土量はＡ群が最も多く、以下Ｂ・Ｃ・Ｄの順に多い。特にＡ群は多くの掘立柱建物跡が重複していることから、これらの遺構に伴うものと考えられる。また、接合状況は大部分は同一群内で接合しているが一部には他の群の遺物と接合しているものもある。また、接合の位置関係をみると大部分は東西方向の接合関係を示しており、南北方向のものは少なく人為的あるいは自然にしろ東西方向に大きく「土」が動いていることが窺える。さらにＡ群とＢ群との出土位置や接合したもののレベル差をみるとＢ群の方が低く、当時まだ凹地が埋没する途中でこれらの遺物が凹地に流れ込んだのではないかと考えられる。

(1) 土師器

遺物はＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄの４群から出土している。Ａ群は掘立柱建物跡の内側よりその周辺に集中している。杯や甕、黒色土器が多く、接合関係は西側（11・25・33・34・41・43・65・89）、東側（67）、その中間（35・62・91）に分かれ、東側と西側との接合関係はみられない。Ｂ群と接合できたものは４点（甕１・杯３）あり、最も遠いのは約78.2m離れている。Ｂ群は凹地に沿って遺物が出土し、甕や黒色土器は少ない。Ｃ群と接合関係にあるものが１点あり、約34m離れている。これは東西方向の接合が多いなかで最も離れた南北方向の接合

関係を示すものである。C群はA・B群と接合関係を有するほか同一群内においてもいくつか接合している。D群は数点しか出土していない。

甕（第19・20図1～35）

出土した土器のほとんどは破片であるため個体数については不明だが、出土量は土師器杯とともに最高である。土器は基本的には外面がナデ調整だが、一部にはタタキを施したものやカキ目状の調整のものもみられる。また、内面頸部以下にはヘラケズリが施される。口縁部や頸部の形態から大きくA～D類に分類でき、さらに細かなちがいによって細分される。

A類……頸部が厚手で口縁部が滑らかに外反する。

Ⅰ類：口縁部が短く、口径が最大径となるもの。（1・2）

Ⅱ類：Ⅰ類に比べ口縁部が長く、胴部最大径が口径と同じか上回るもの。（3・4・19・25）

B類……口縁部が外反するもの。

Ⅰ類：頸部内面に稜を有するもの。（5・7・8・11・20）

Ⅱ類：頸部に稜をもたないもの。（9・13・14・15・23・24）

C類……口縁部が大きく外反するもの。（6・10・12・16・17・18・21・22・26）

D類……口縁部がB類に比較して短く外反するもの。（27・28・29）

その他として、31・32は甕胴部片で上下・横方向からのハケ調整が施され格子目状を呈している。33～35は同一個体で、胴部上半から底部にかけてナデ調整の後、擬格子のタタキが施される。A群から出土している。

杯（第21・22図）

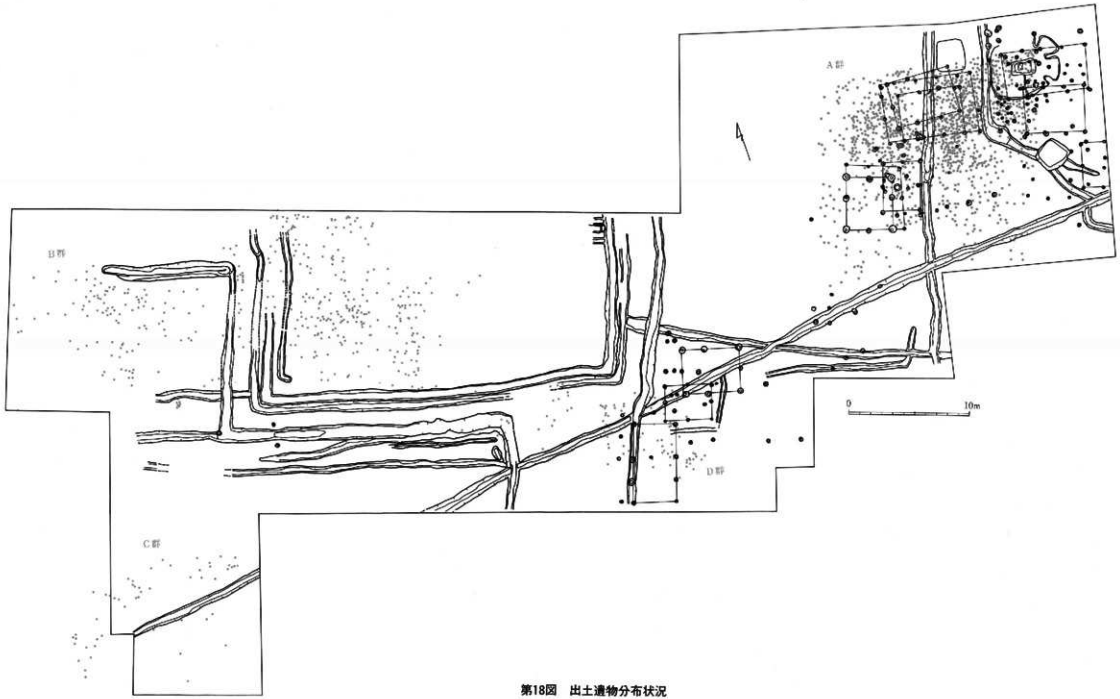
出土した土師器杯の大部分は回転ヘラ切りされたものであるが、破片であるため口径、器高など復元できたものは18点であった。これらの土師器の法量を表にしてみたが、明瞭な差を見い出すことができなかったため胎土や切り離しによって8つ（A～H）に分類した。

A類（55・57・58・60・71・76・87・85）

赤褐色を呈し胎土は密であるが軟質で底部や体部は薄手である。内底はていねいなナデでやや凹凸あり。外底部はヘラ切り離しされたまま未調整。底部から体部かけてはていねいに仕上げられ稜をもたない。口縁部は外反する。

B類（42・48・49・63・65・69・73）

淡赤褐色で胎土に砂粒を少量含みやや軟質で薄手である。外底部はヘラ切りのあとナデ調整。底部から体部かけては調整のまま、あるいはていねいに仕上げられ稜を有する。



第18図　出土遺物分布状況

C類（47・53・56・59・75・89）

黄鐙色をなし、胎土には細砂粒を含み軟質である。内底は平坦を呈し丸味をもって立ち上がる。外底部はヘラ切りの後、未調整のものやていねいなナデ調整が施されるものなどがある。体部は直線的に延びるものと内湾するものがある。

D類（40・43・46・50・54・62・64・83・84）

明褐色を呈す。焼成は良好でやや硬質で薄手である。内底はていねいなナデでやや凹凸あり。底部から体部にかけて稜をもち立ち上がる。

E類（38・39・41・44・45）

淡赤褐色をなす。やや硬質で胎土は密で厚手のものが多い。内底はていねいなナデでやや凹凸あり。底部から体部にかけて稜をもち立ち上がる。

F類（52・74）

灰黄褐色を呈す。内底はていねいなナデでやや凹凸があり、稜を有し立ち上がる。外底部はナデ調整や板目をもつものがある。底部から体部にかけて稜を有する。

G類（77）

厚手で淡黄褐色を呈す。内底はていねいなナデでやや凹凸がある。底部から体部にかけて稜を有する。

H類（79・80・81・82）

糸切り底のもので杯や皿・小皿などの器種がある。出土量は約10点と少ない。

甑（第20図36・37）

把手部分が2点出土している。36はD－4グリッド出土で大型の甑の把手の接合部分である。37は面取りされた小型の把手で、鉢の可能性もある。D－5グリッド出土。

高台付碗（第23図85～89）

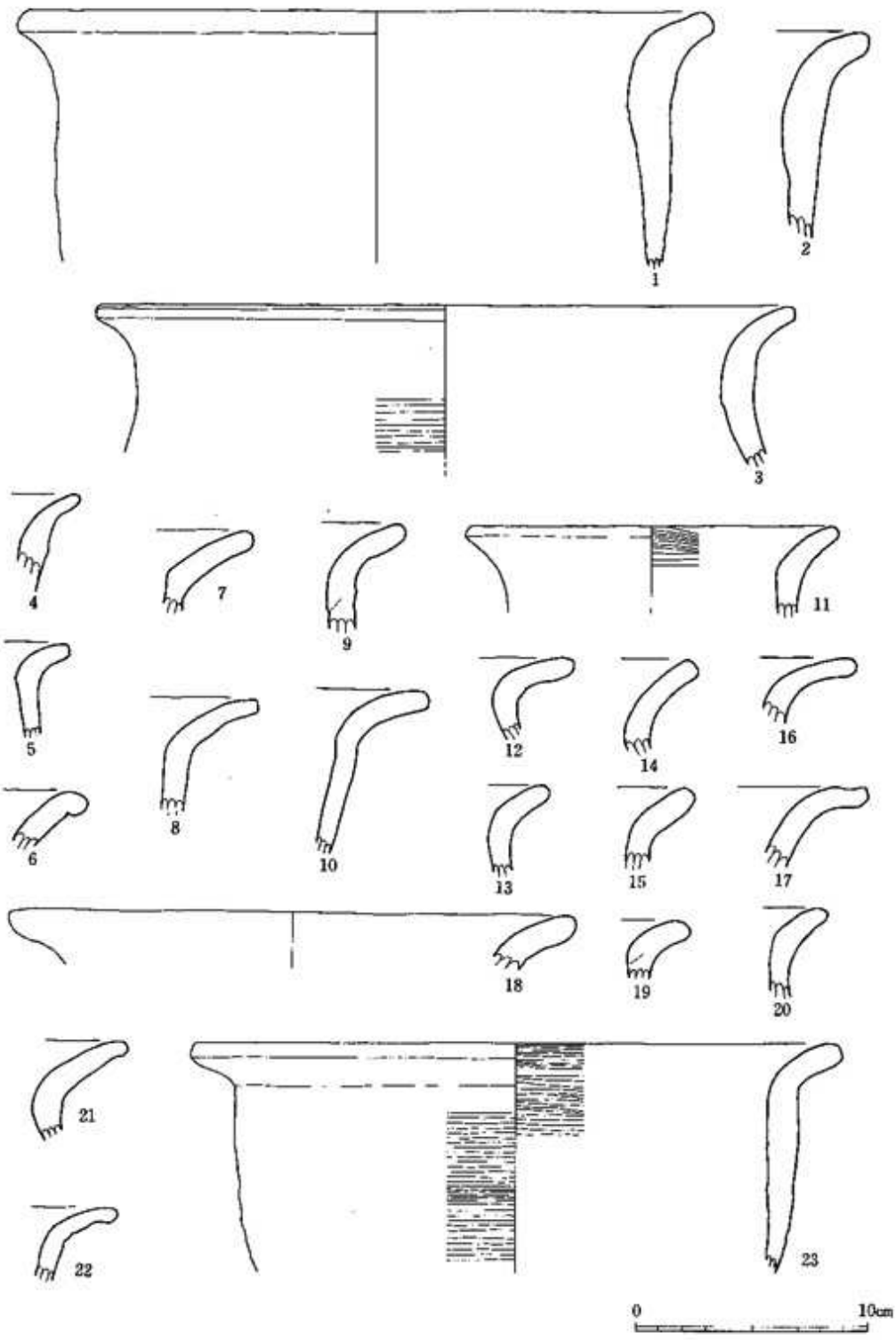
高台付碗は杯に比べて非常に少ないため、本遺跡での傾向は捉えられない。高台の形態は逆三角形をなすもの（85・87）、高台が低く小さいもの（86）、やや外方に延びるもの（88）、端部がやや角張るもの（89）などがある。

蓋杯（蓋）（第23図90）

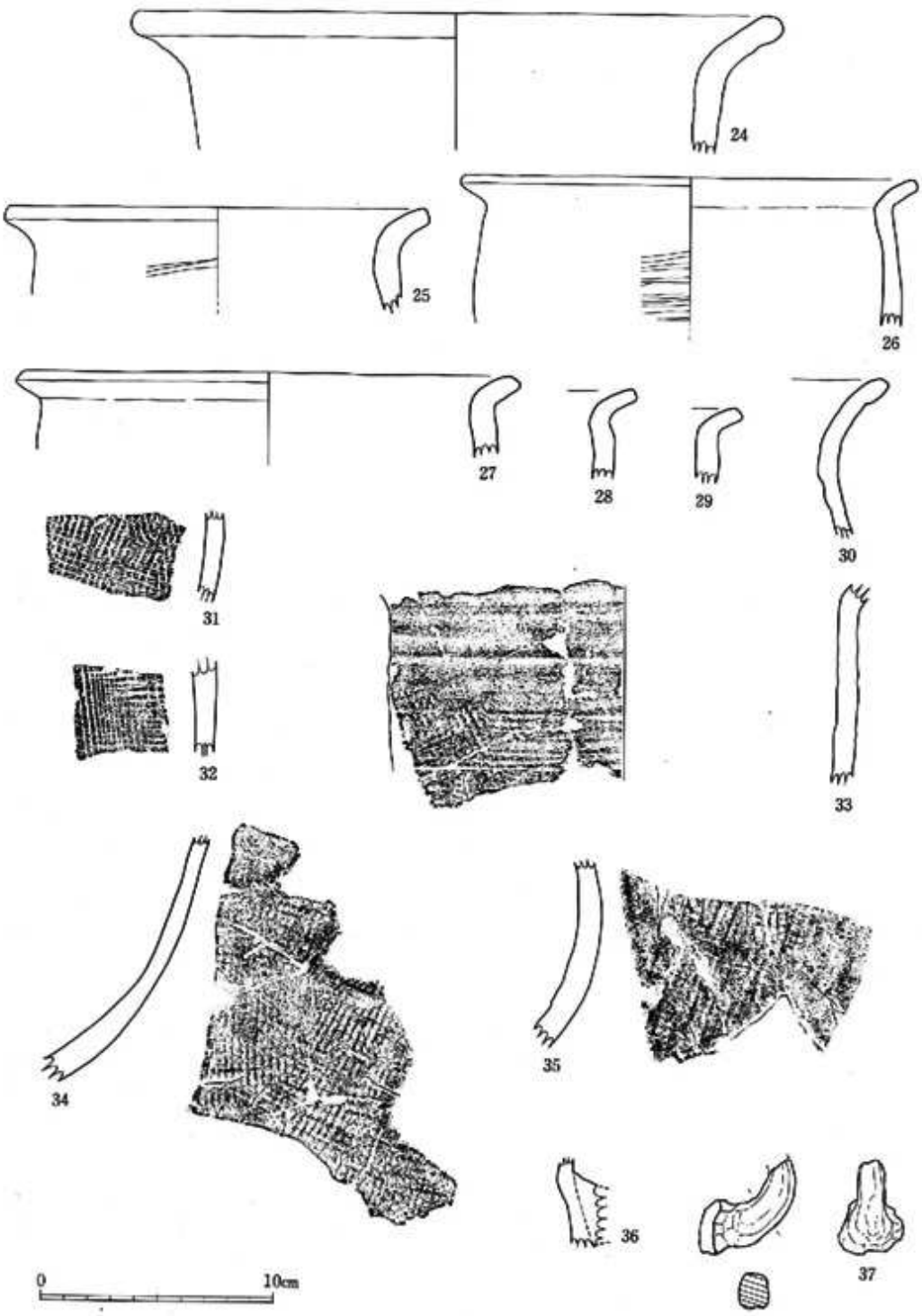
宝珠つまみを有する蓋で1点出土している。焼成はやや不良で軟質である。E－4出土。

黒色土器（第23図91～99）

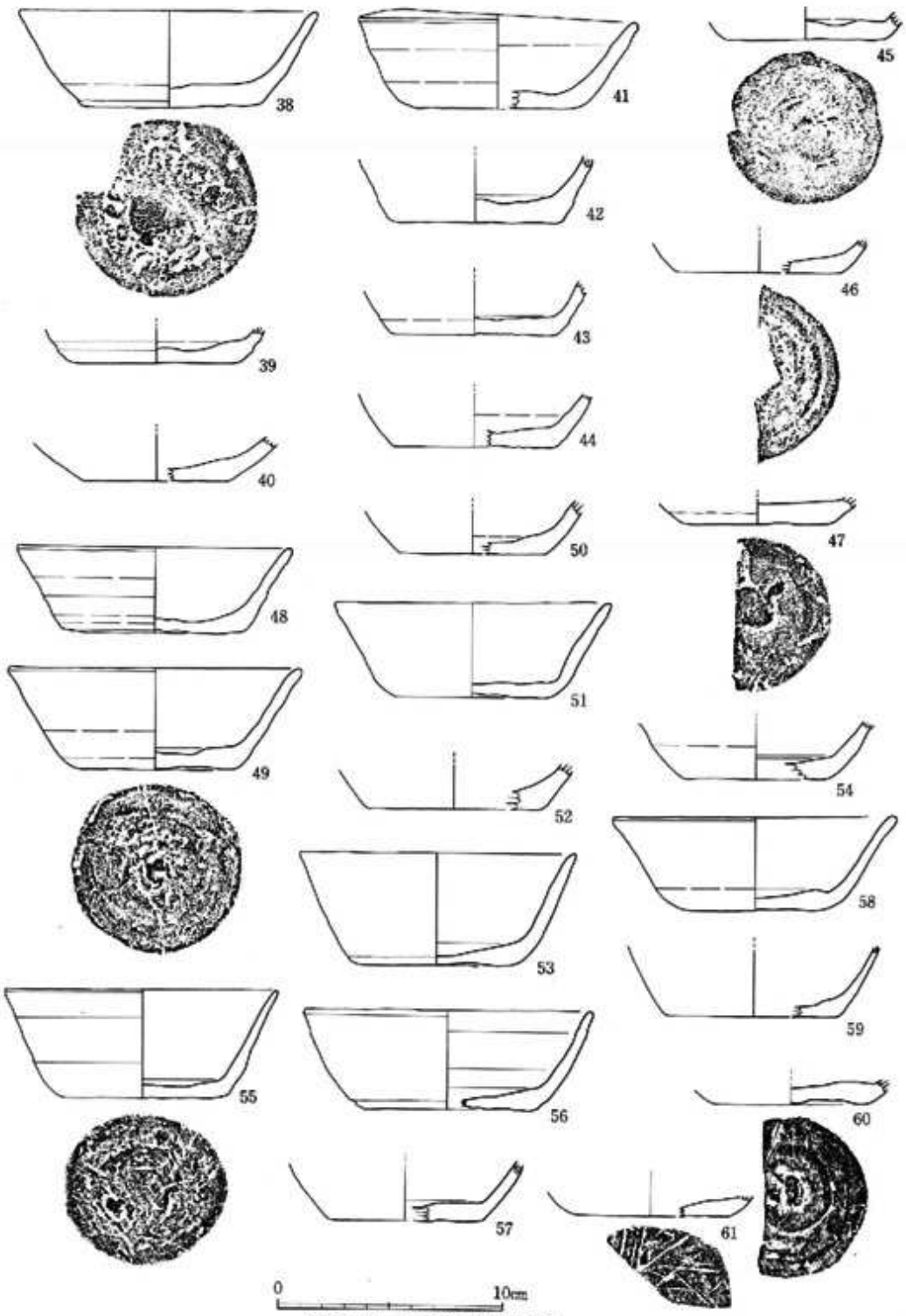
総数で32点出土しているが、すべて内黒のいわゆる黒色土器A類である。ほとんどが小片で完形に復元できるものはない。A群25点、B群は6点、C群は1点と少ない。接合できた



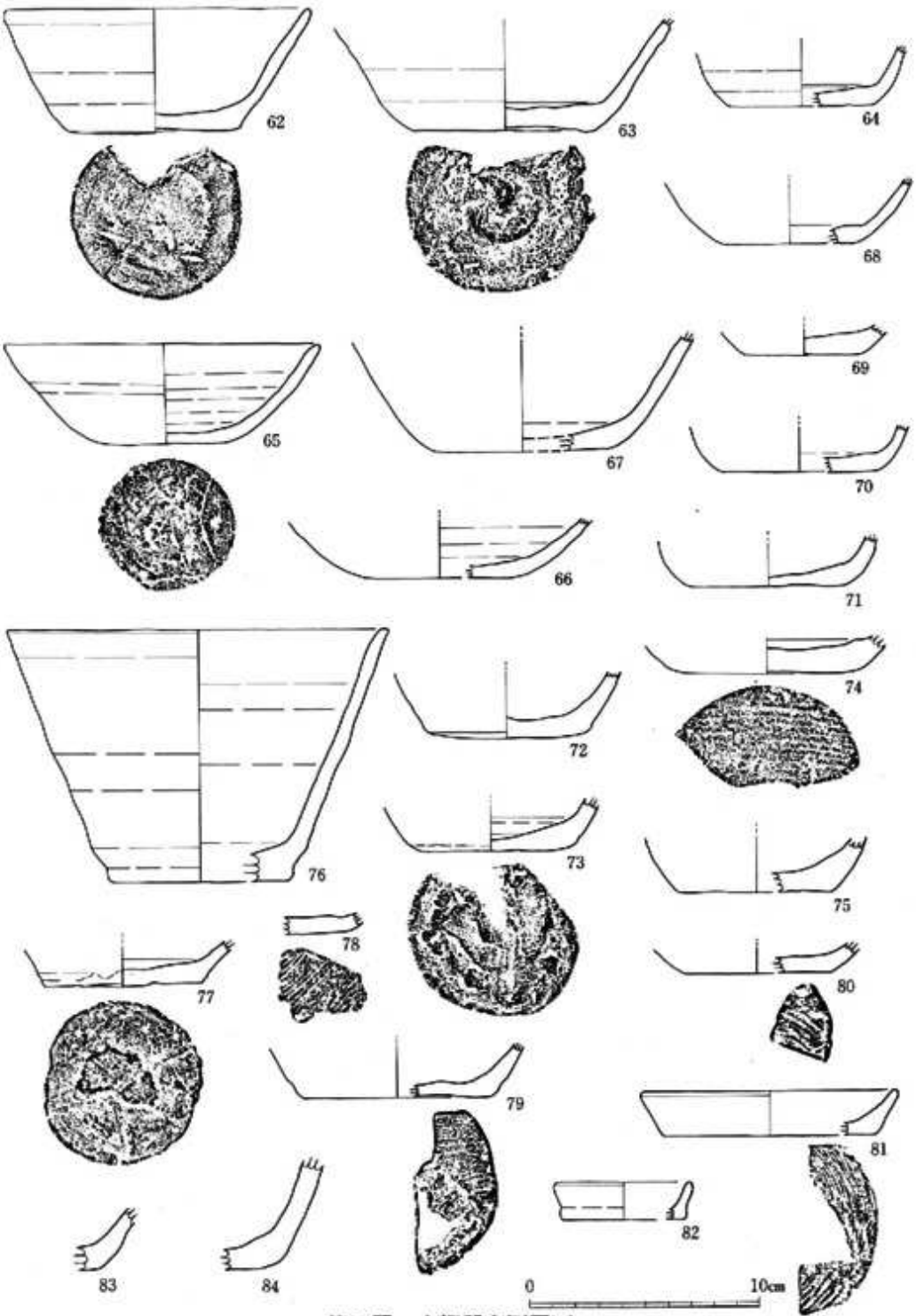
第19図　土師器実測図(1)



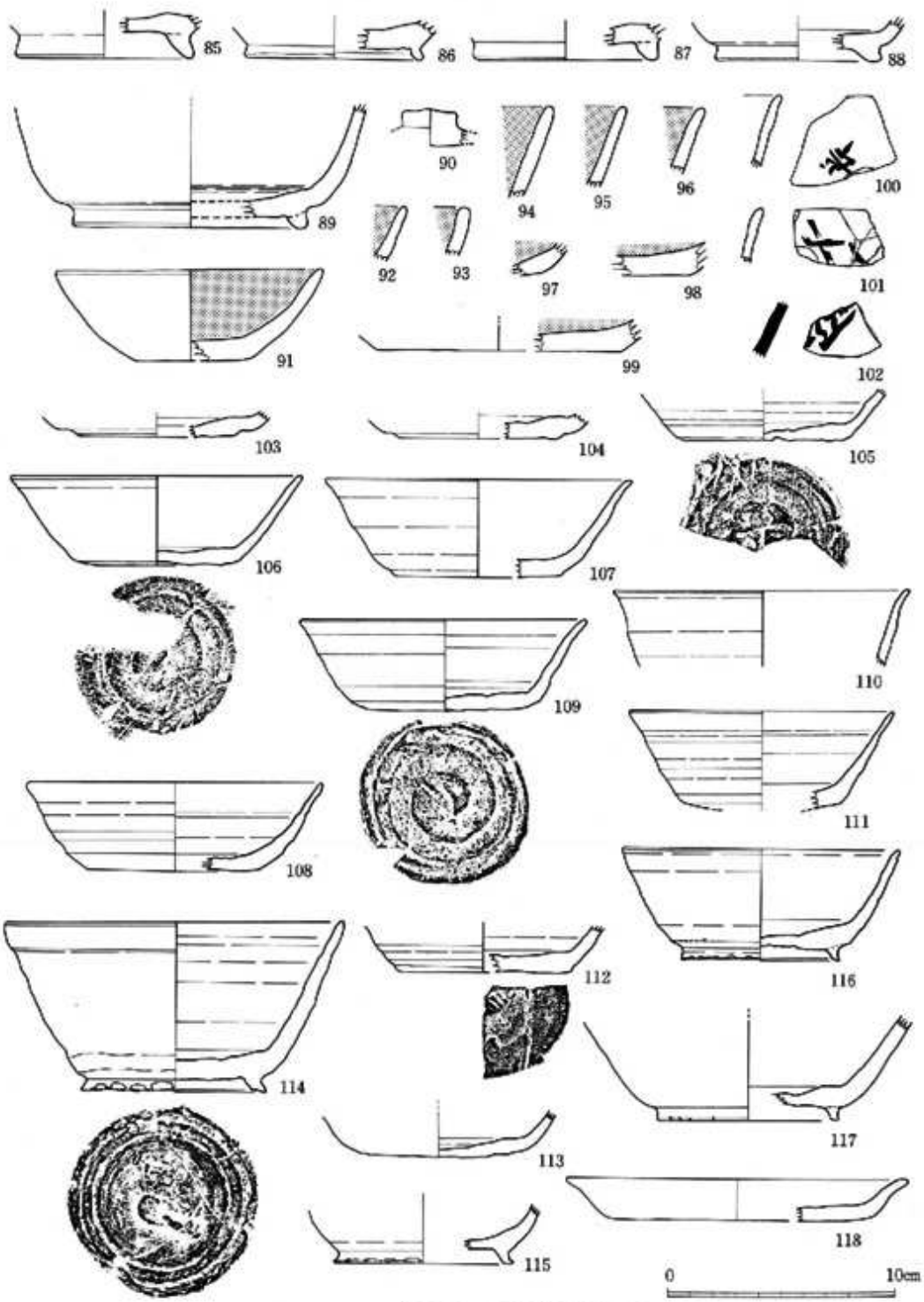
第20図　土師器実測図(2)



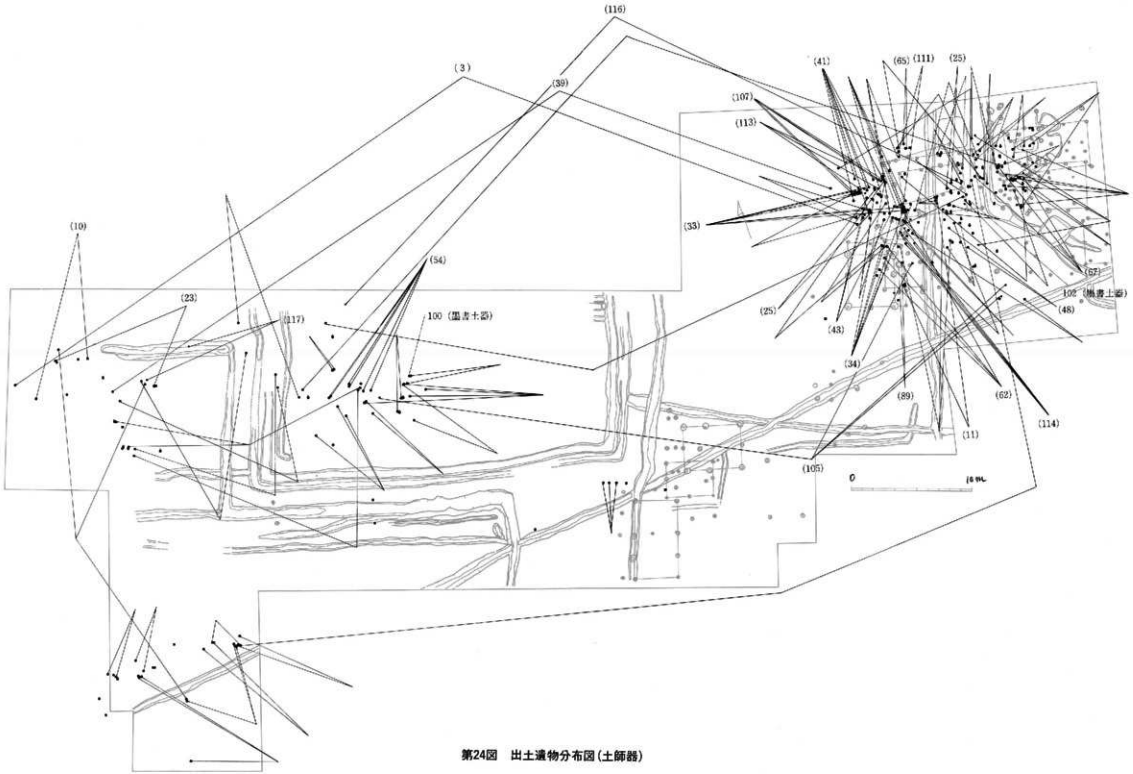
第21図　土師器実測図(3)



第22図　土師器実測図(4)



第23図　土師器実測図(5)



第24図　出土遺物分布図(土師器)

のも小片が多いため1点のみであった。口縁部はやや厚手で内湾しながら延びるもの（91～93）と、直線的に外方に開くもの（94～97）とに分かれる。底部は平底で高台付のものはみられず、底径の大きいもの（98・99）、小さいもの（91）とがある。ヘラミガキは内外面および底部に施されているが、ミガキの方向や大きさについては確認できない。

墨書土器（第23図100～102）

墨書土器は3点出土したがいずれも小片であった。100は土師器杯の外面に行書体で「長」と墨書される。101も土師器杯で口縁外面上半に墨書を確認できるが判読は困難である。I－6グリッド出土。102はD－4グリッド出土で、須恵器杯の体部外面に墨書されている。「辶」は確認できるが字体は判読できない。複数の文字が書かれていたと考えられる。

(2) 須恵質土師器（第23図104～118）

焼成は良好で硬質で須恵器に類似するが、器形および調整の状態から土師器として捉えた。しかし、胎土は土師器、須恵器とも異なり、特定の生産地が考えられる。多くはA群から出土していない。須恵質土師器には回転ヘラ切りされ板目を残すものもある。器種には坏と高台付碗がある。法量としては114以外は口径11.4～13.3cm、底径5.6～7.1cm、器高3.9～4.9cm内に収まる。形態も底部から稜をもたず、もっても緩やかなもので立ち上がる。体部にはロクロ調整痕を残しながら直線的に開き、口縁部は外反する。内底面はていねいなナデ調整が行われるが、凹凸を残し、土師器坏で主体的な形態と類似している。しかし、高台は土師器のものに比べシャープで短く、外に開く。また、焼成前あるいは焼成後、端部に連続した抉りや刻みが入るのが特徴となっている。114はほぼ完形で出土し、他のものに比較して口径が広く、器高も高い。体部は直線的に開き、口縁部は若干玉縁状を呈する。高台端部には幅広の抉りが入る。皿は底部にていねいなナデ調整が行われ、口縁部は強く外反する。坏や高台付碗とは胎土が異なる。

~~また~~、高台端部には幅広の抉りが入る。皿は底部にていねいなナデ調整が行われ、口縁部は強く外反する。杯や高台付碗とは胎土が異なる。

(3) 須恵器（第25～27・29図）

遺物はA・B・D群にみられC群からは2点のみである。A群では杯や蓋・皿などが多いが甕は少なく、特に甕Ⅱ類は出土していない。A群はさらに東と西に細分でき、接合関係も西側（52・54）、東側（49・56・57）とその中間（53・59・60）に分かれる。これは掘立柱建物跡もいくつか重複していることからすると時期差とも考えられる。B群は杯類が出土していないが、甕Ⅱ・Ⅲ類はB群だけに分布している。B群が円地で居住地であるA群から出

土していないことからすれば、発掘区外に甕Ⅱ・Ⅲ類を主体とする居住地が存在する可能性がある。また、甕14はA群のものといくつか接合関係をもち東西間の距離は約81mである。D群は甕Ⅰ類のほか甕Ⅳ・Ⅵ類が1点づつ出土している。C群では杯と甕Ⅰ類がそれぞれ1点と少ない。

甕

総数で約80点出土しているが口縁部が3点、それ以外はすべて胴部片で、その内45点を図示した。

口縁部（第25図1～3）

1は大きく開く大型甕の口縁で外面に2条、内面に1条の突帯が導き出されている。外面には突帯下にヘラ状工具による2条の波状文が施される。2・3は同一個体であるが接合できない。口頸部は上方に立ち上がり、口縁部は外反する。

胴部

胴部片は胎土や調整によっていくつかに分類できる。

Ⅰ類（第25図6～21）

同一個体か同じタイプのものと考えられる。外面には横方向の擬格子目タタキの後、斜めの擬格子目タタキが部分的に施される。内面は頸部付近が溝の深い同心円タタキ、その後胴部は格子目タタキ調整である。同心円文と格子目文の重なる箇所には一部幅広の平行線文のタタキが行われる。

Ⅱ類（第26図22～35）

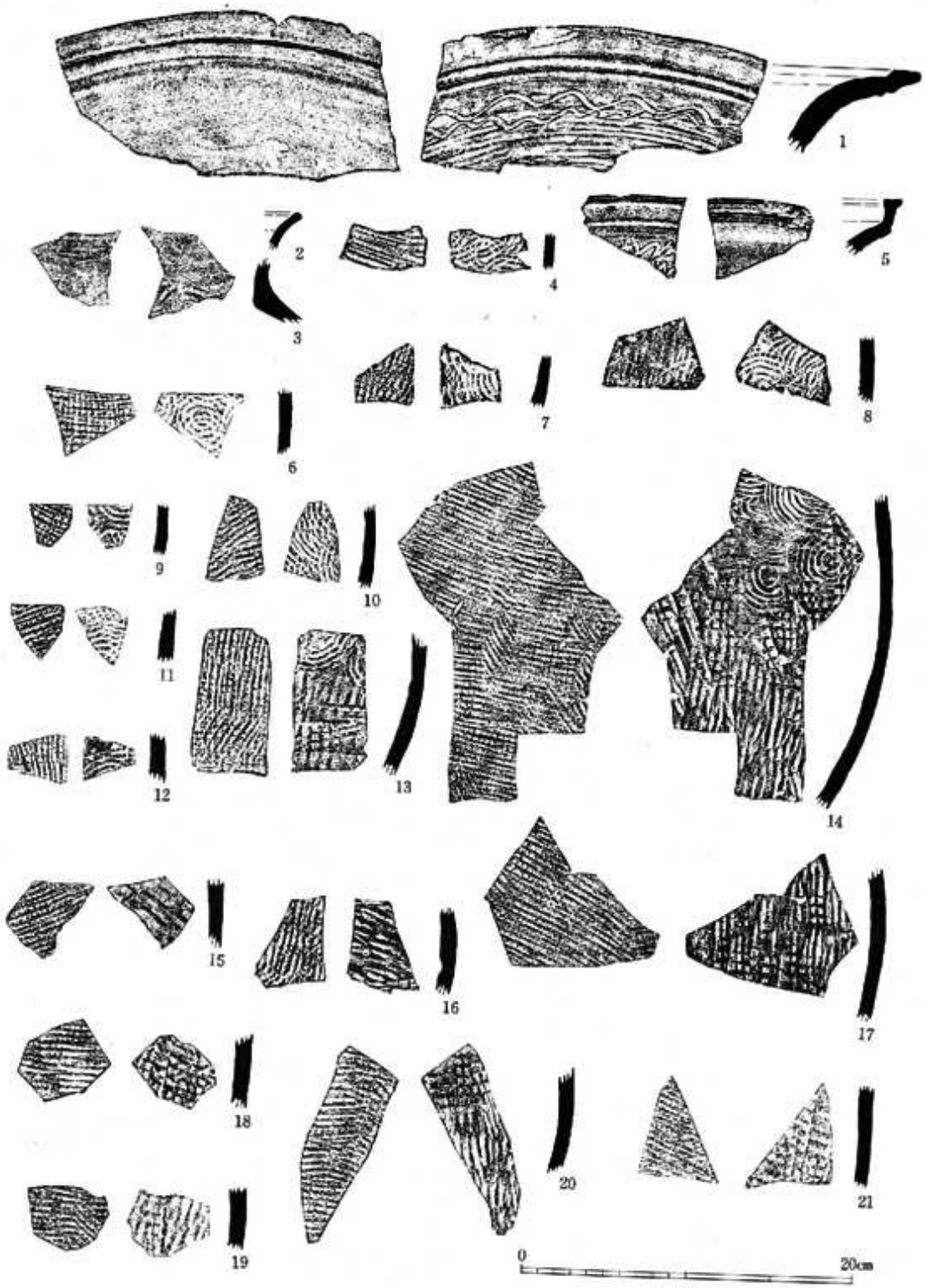
同一個体か同じタイプのものと考えられる。内面の色調が特徴で、にぶい褐色を呈し、胎土は粒子が粗く、Ⅰ類とは異にする。外面は縦方向の格子目タタキ調整である。外面タタキの痕跡から調整具は幅4cm以上、長さ6cm以上の板状のものと考えられる。内面は上半が同心円タタキ、中位が平行線タタキ、下半が同心円タタキが上から順に施されている。出土点数としては最も多い。

Ⅲ類（第27図36）

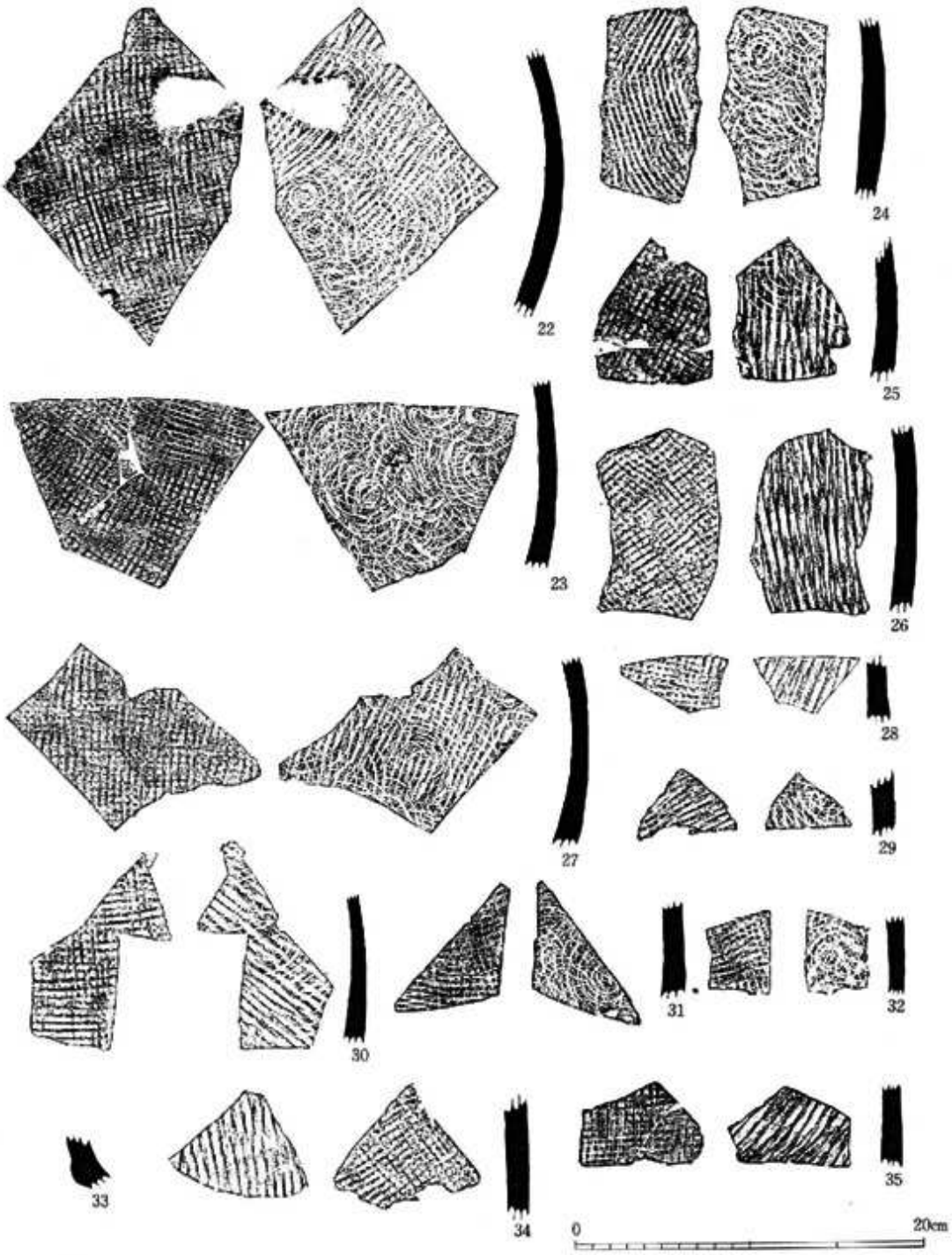
内外面とも灰褐色を呈し、粒子が粗く1～3mmの砂粒を少量含む。外面は平行線タタキ、内面は沈線状で単位が横幅広の平行線タタキ調整である。本遺跡からは1点しか出土していない。

Ⅳ類（第27図37）

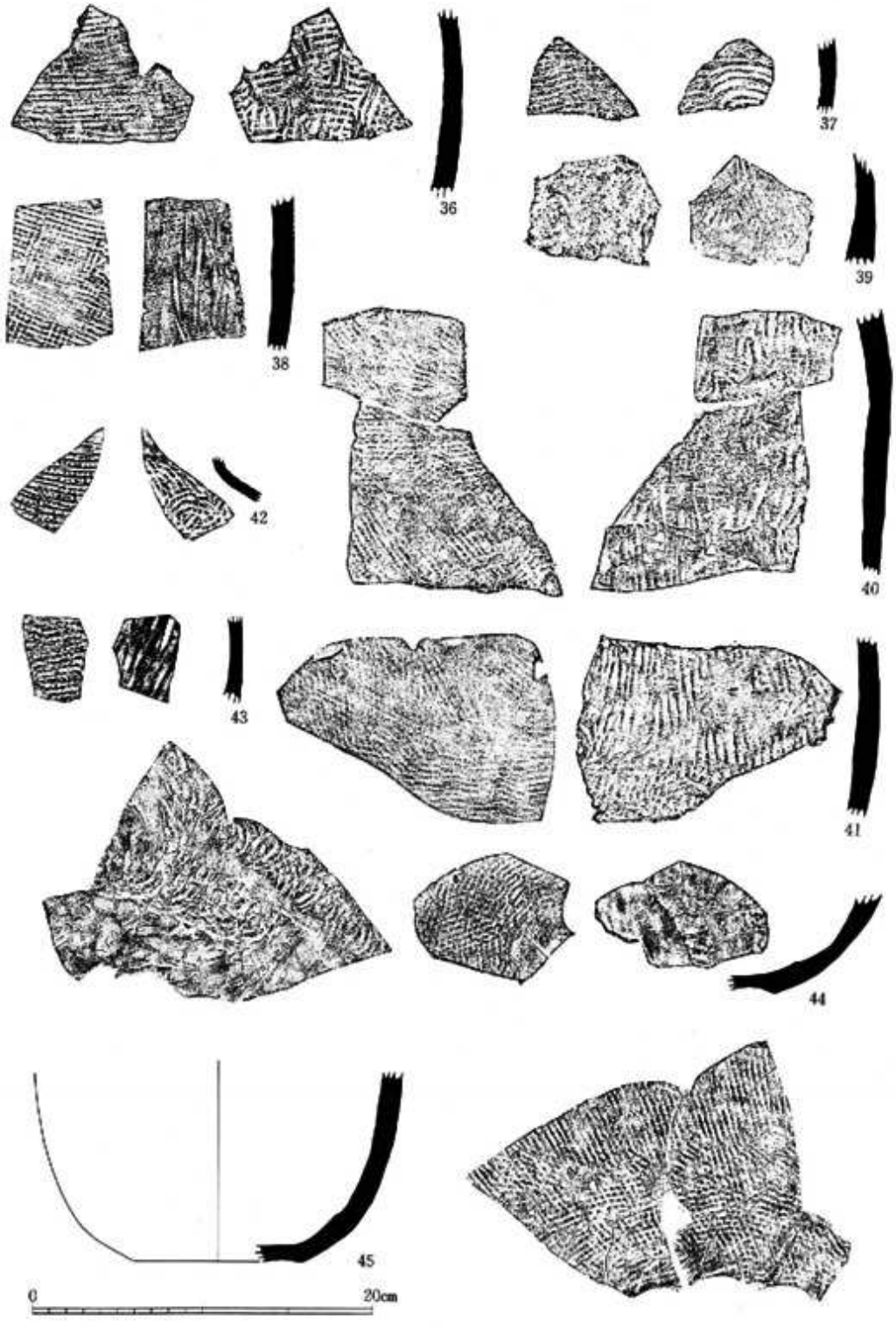
外面は平行線タタキの後、ナデ調整。内面は幅広で深い同心円タタキが施される。本遺跡



第25図　須恵器実測図(1)



第26図　須恵器実測図(2)



第27図　須恵器実測図(3)

からは1点しか出土していない。

V類（第27図38～41）

焼成不良で軟質でにぶい黄橙色を呈する。同一個体か同じタイプのものと考えられる。外面は平行線タタキと思われるが全体的に摩滅している。内面は上方が縦ナデ、中位から下半にかけて平行線タタキや花弁状（車輪文？）タタキがみられる。4点だけ出土した。

VI類（27図42・43）

42は薄手の甕頸部片で、外面は擬格子目タタキ、内面には同心円タタキが施される。II類と同一の可能性あり。

底部（第27図44・45）

同一個体と考えられる。外面は上半は縦方向、下半が斜め方向、底部付近が横方向の擬格子目タタキ調整。内面は同心円タタキの後、ていねいなナデ調整が行われている。焼成は外面部がやや不良となる。

広口瓶（第29図5・46～48）

広口瓶の口縁部で4点出土した。外傾した口縁部から屈曲し上方に延びる。5は口縁端部が平坦で凹線状になる。外面には波状文が施される。内面はていねいなナデ調整。色調や胎土は胴部II類に類似する。

杯・高台付碗（第29図49～56）

杯・高台付碗の出土量は約50点と少なく、完全に復元できるものはない。そのため口縁部だけでは杯・高台付碗の判別はできない。口縁部には直線的・内湾・やや外反するものがあり、高台は高いものと低いものとがある。土師器杯や須恵質土師器に類似資料は見当たらない。55と56は同一個体の可能性がある。

皿（第29図57・58）

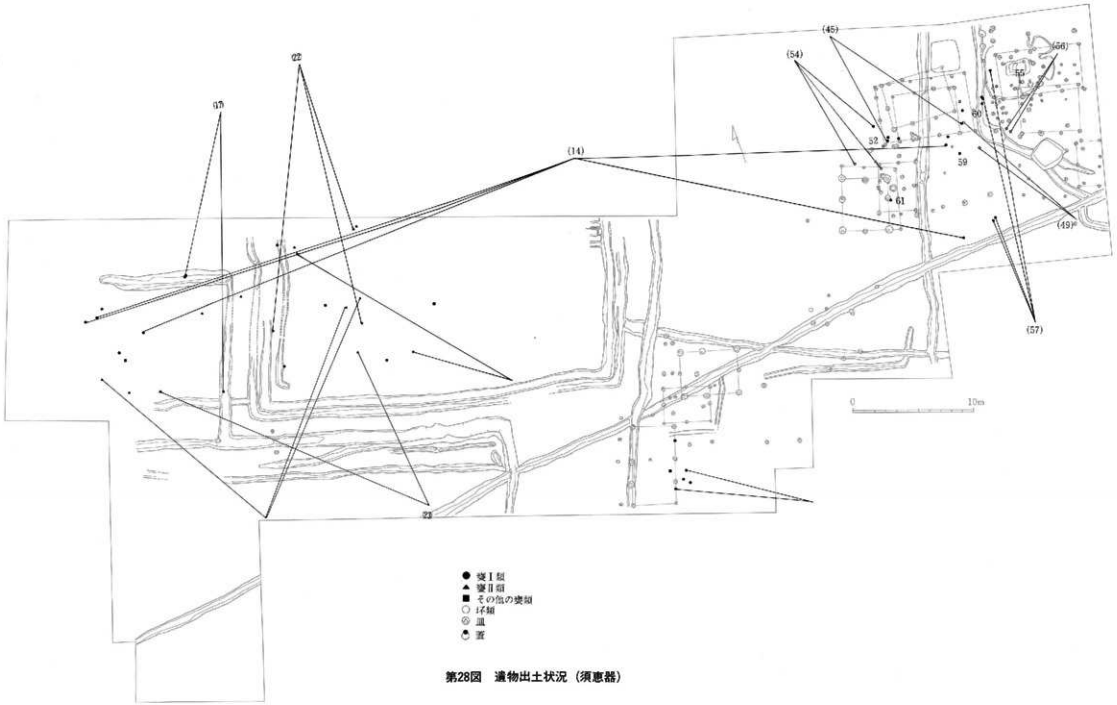
粗いヘラ切りの底部で口縁部はわずかに外反する。58は強く外反する。

蓋（第29図59～61）

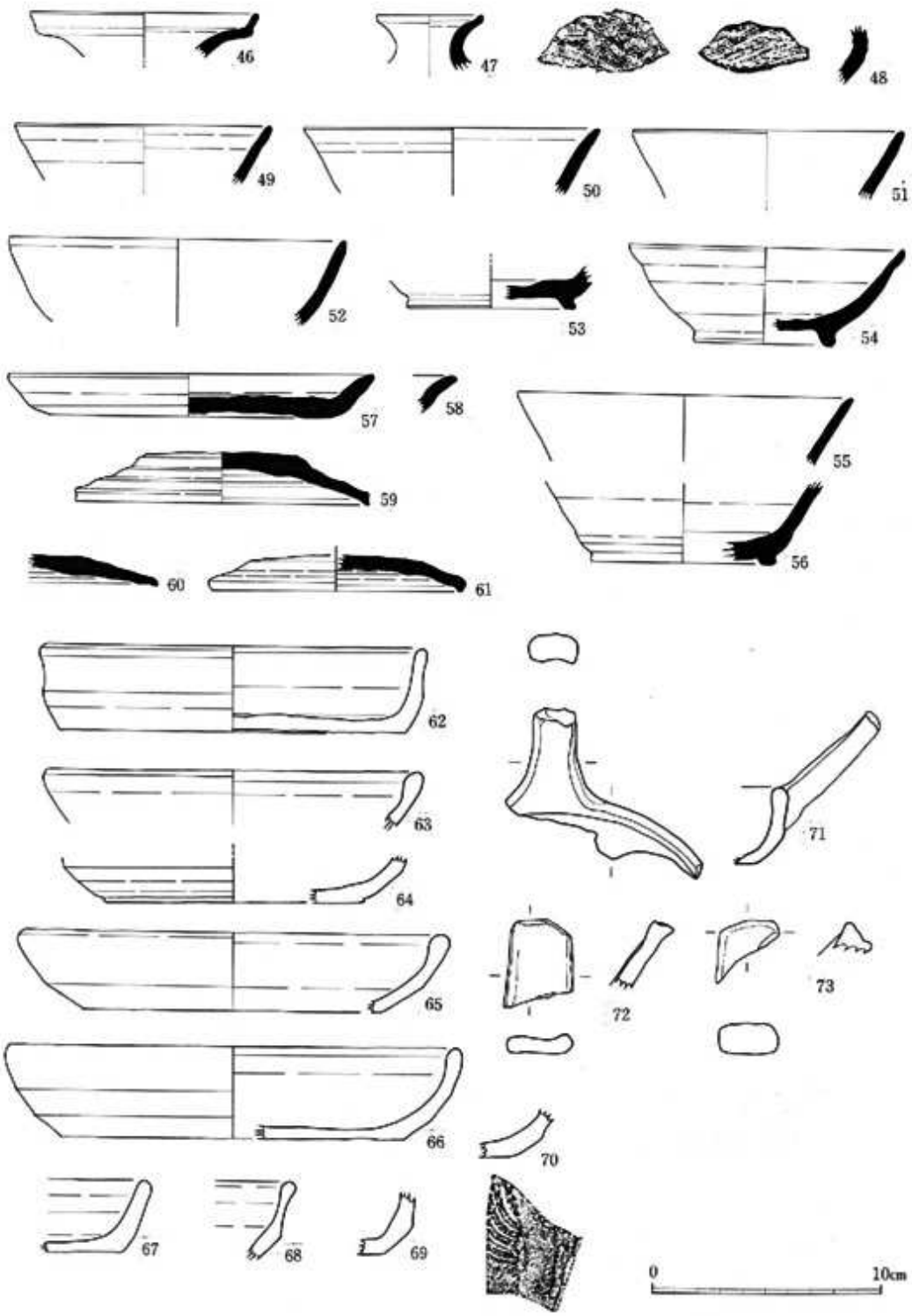
59は口径が広く、器高が高い。口縁端部は下方へつまみだされている。体部は直線的に延び、天井部は平坦になる。60・61は偏平で口径も狭い。

(4) 土師質土器（第29図62～73）

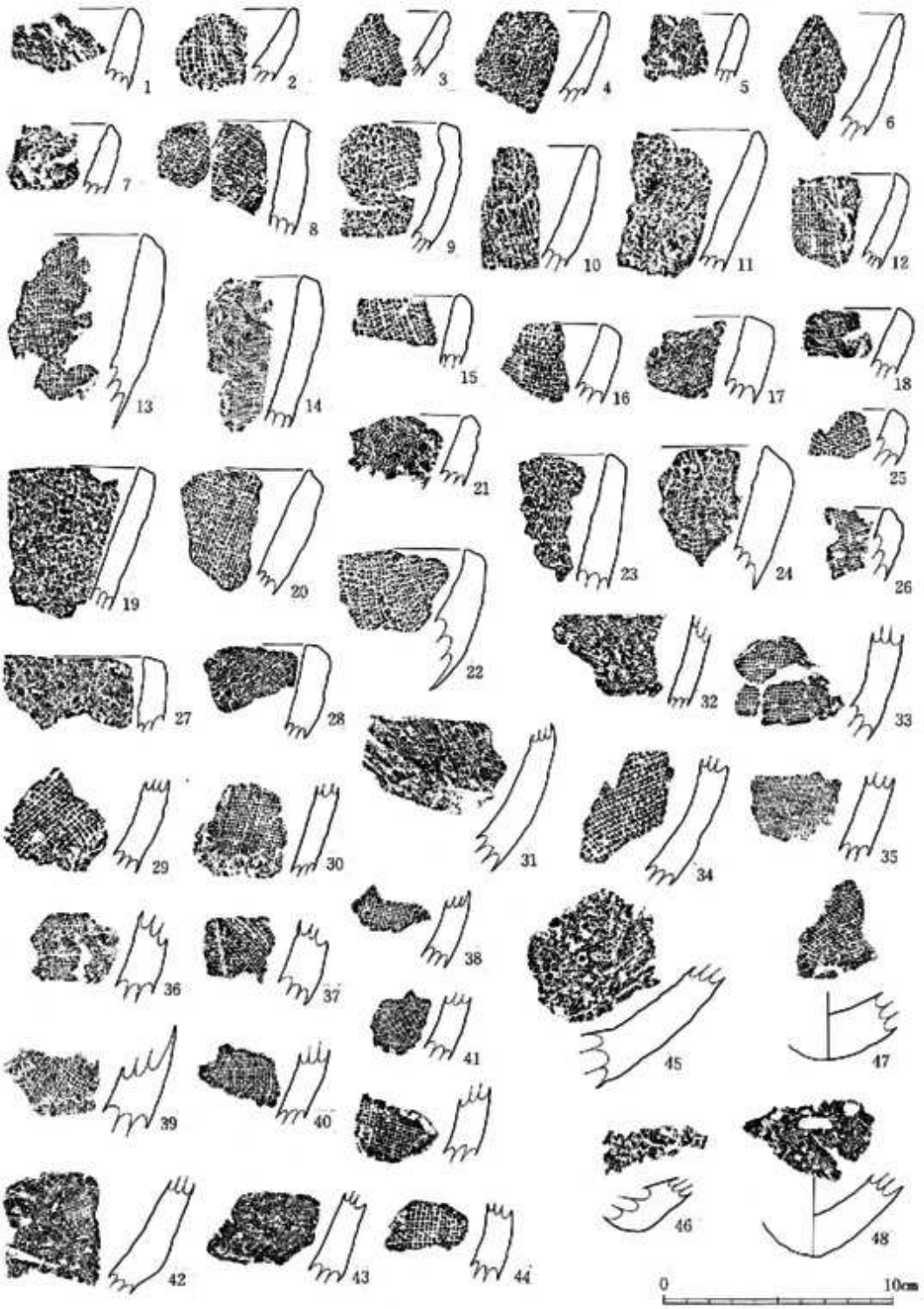
底部は平底をなし、体部は内湾しながらのび1ないし2の稜を有する。口縁部は肥厚し丸く仕上げられる。内底および体部にはていねいなロクロ痕がみられ、底部はていねいなナデが施されている。また、口縁部には斜め方向に長さ約5.5cm、幅約2.5cmの把手が付けられる。



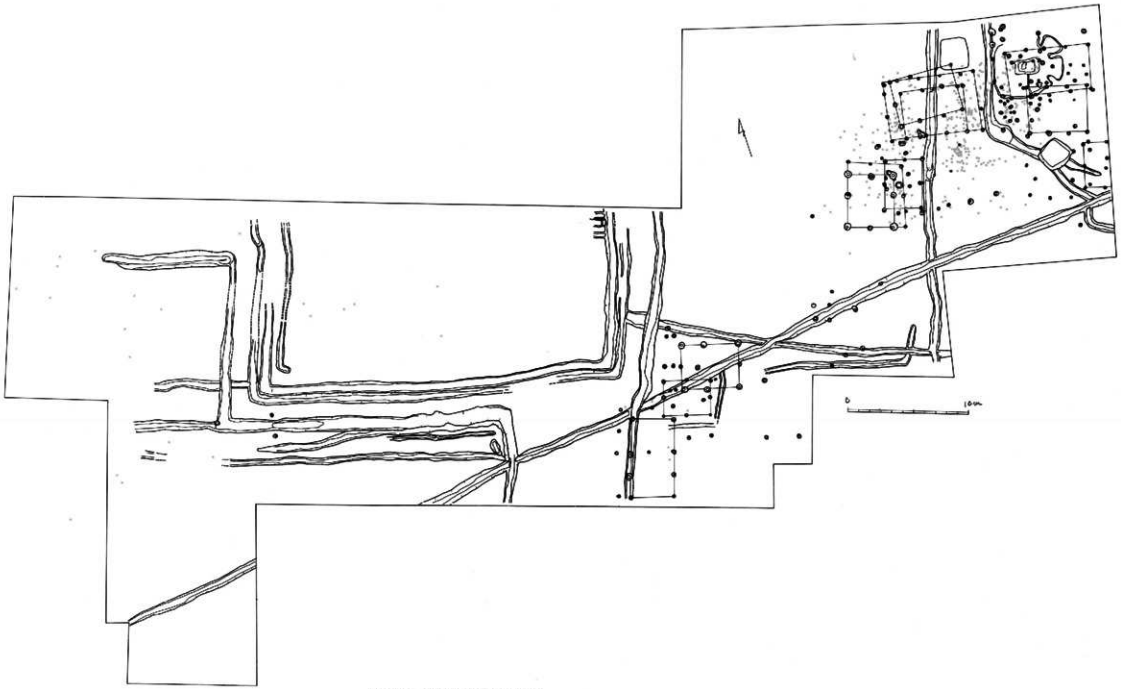
第28図　遺物出土状況（須恵器）



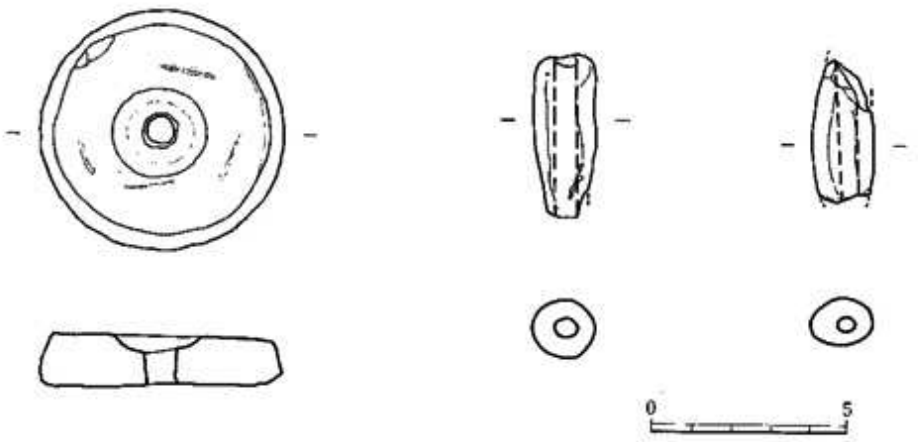
第29図　須恵器・土師質土器実測図



第30図　布痕土器実測図



第31図　遺物分布図(布痕土器)



第32図　紡錘車・土錘実測図

底部や体部外面にはススが付着する。

(5)　布痕土器（第31図）

胎土は粗く、４～５㎜程度の砂粒を含み非常にもろい土器である。このため土器は多量に出土しているが破片が多く、磨耗も激しいため完全に復元できたものはない。型作りによる技法のため口縁部は外方へそぎ落とされ、底部は尖底をなし、全体としてややふくらんだ円錐形をなす。県内で出土した布痕土器の形態はほぼ同形態で大きさも一定している。このことから完形に復元できた他の遺跡の出土例から一個体の重さが平均600g前後であることから、永田原遺跡出土の総重量は約14.5kgで、約24個体分出土したことになる。出土状況は全体の遺物分布状況に比例するが、ＳＢ６・７周辺に特に集中している以外は数点と少ない。

(6)　紡錘車（第32図１）

土製の紡錘車で台形状をなし、上径5.5cm、下径6.2cm、厚さ1.8cm、孔径７cm、重さ56.1gである。上面中央は径2.4cmの幅で皿状に窪む。焼成は良好で、灰白色を呈す。Ｅ－４グリッド出土。

(7)　土錘（第32図２・３）

２点出土し土師質で筒状をしている。２は7.7g。Ｊ－６グリッド出土。３は5.8gである。Ｄ－４グリッド出土。

(6)　陶磁器（第33～39図）

青磁（第33図１～３）

総数、破片で８点しか出土していない。１は口縁部が端反りし、見込みには目跡が残り、

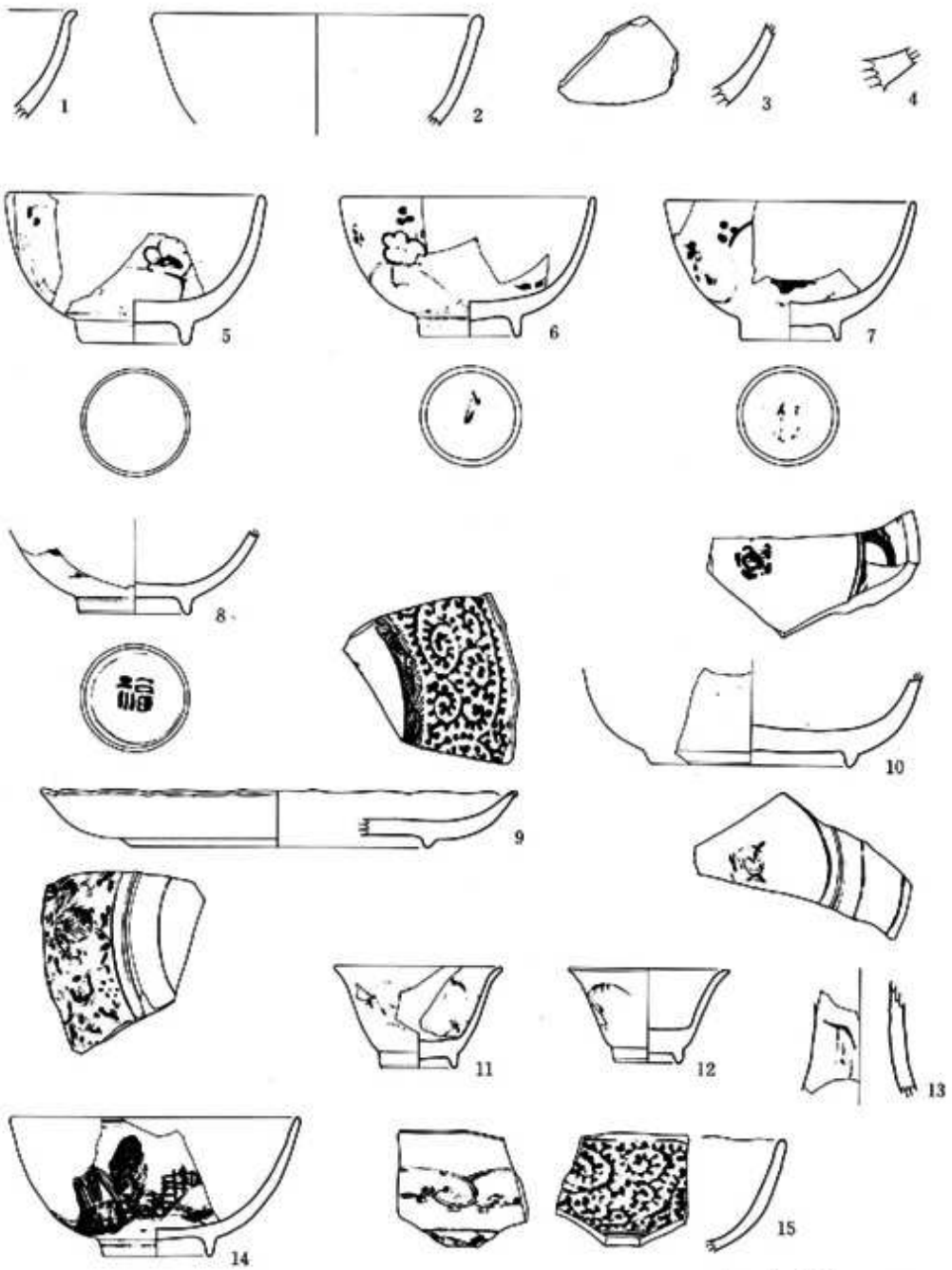
越州窯の可能性がある。D－4、I－6グリッド出土。2～4は龍泉窯系の青磁碗である。2・3はSE3出土。

磁器（第33～34図5～27）

磁器類は染付がほとんどでSE4の集積部分や包含層などから出土している。器種としては碗、皿、小杯、瓶の順に多い。ほかには、国産の青磁・白磁なども少量みられる。染付碗は、碗形が大部分を占め、井戸形、筒形なども僅かではあるが存在する。文様としては草花文、梅花唐草文、雪持笹文やコンニャク印判によるものなどあり、高台内に簡略化された「大明年製」の銘が施されるものもみられる。皿は型付整形され、口縁部は輪花を呈す。主文様には蛸唐草文、裏文様には松竹梅文や梅花唐草文が描かれている。小杯はいずれも同形態で、外面に雪持笹文が施される。染付は肥前系のものが主で、17世紀後半から18世紀代の年代が与えられる。そのほか明治時代に入るものも少量出土している。

陶器（第34～39図28～101）

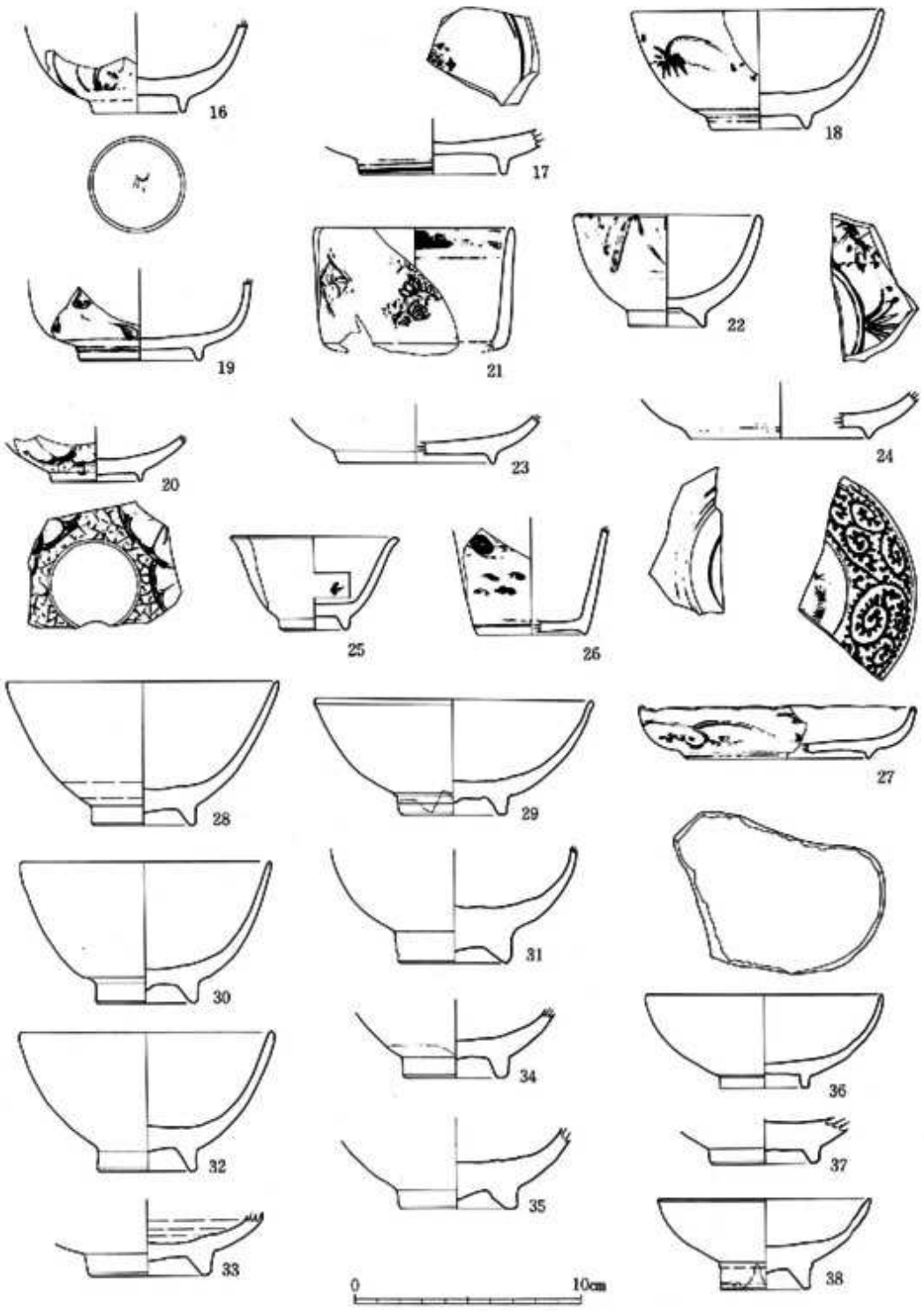
出土した陶器のほとんどは薩摩焼である。器種は碗、甕、摺鉢、茶家、鉢、花器など日常雑器がSE4の集積部分や包含層などから大量に出土した。碗の形態は体部は内湾しながら延び、高台はきれいに面取りされ外方に開く。兄込みは蛇ノ目に釉剝ぎされている。器高の高さによって大・中・小形に分けられる。また、釉調にも飴色、灰緑色、白ものなどいくつかの種類がある。さらに、胎土も飴色のものと灰緑色のものとは異なり、量としては前者の方が多く生産地の違いが考えられる。甕の口縁部や底部、摺鉢には貝目が確認できるものが少量ではあるがみられる。今回出土した薩摩焼の傾向として、特に碗や摺鉢など日常生活に使用された痕跡つまり、内面が磨耗した状態のものがほとんどみられなかったことから、未使用のまま廃棄された可能性もある。そのほかに、備前焼の摺鉢が1点出土した。



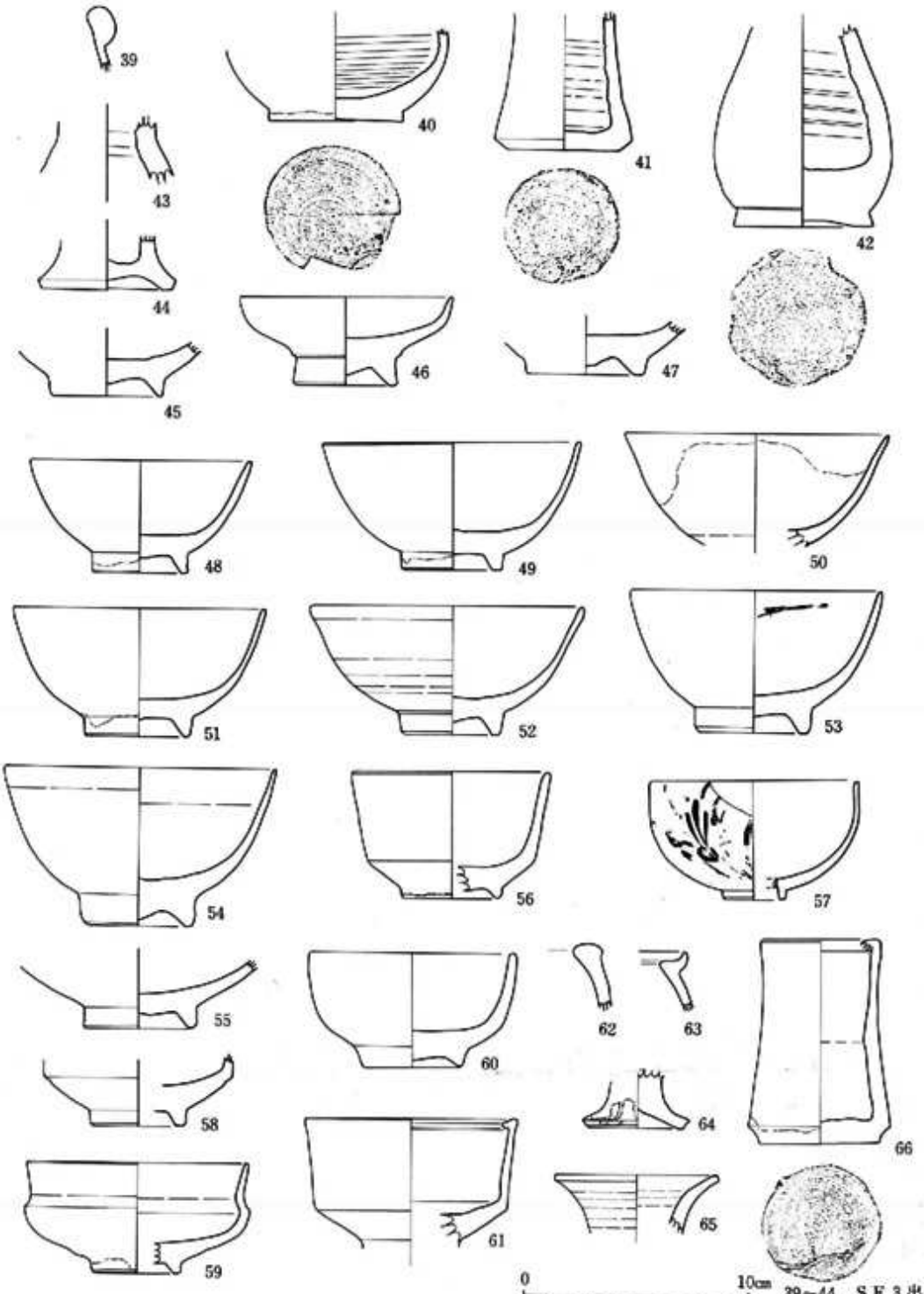
1～4　青磁
5～13　ＳＥ３出土
14・15　ＳＥ６出土

0　10cm

第33図　磁器実測図(1)

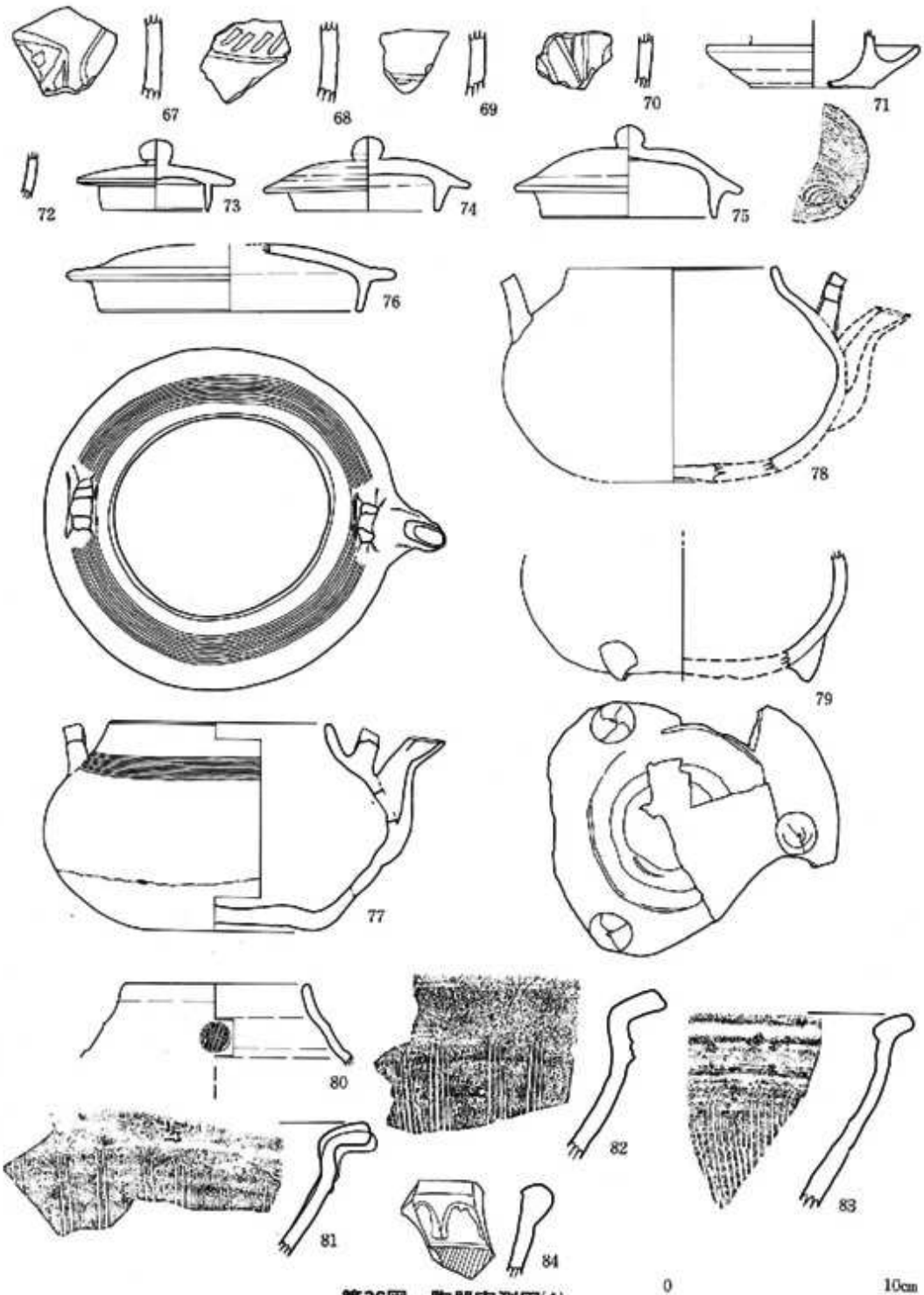


第34図　陶磁器実測図(2)

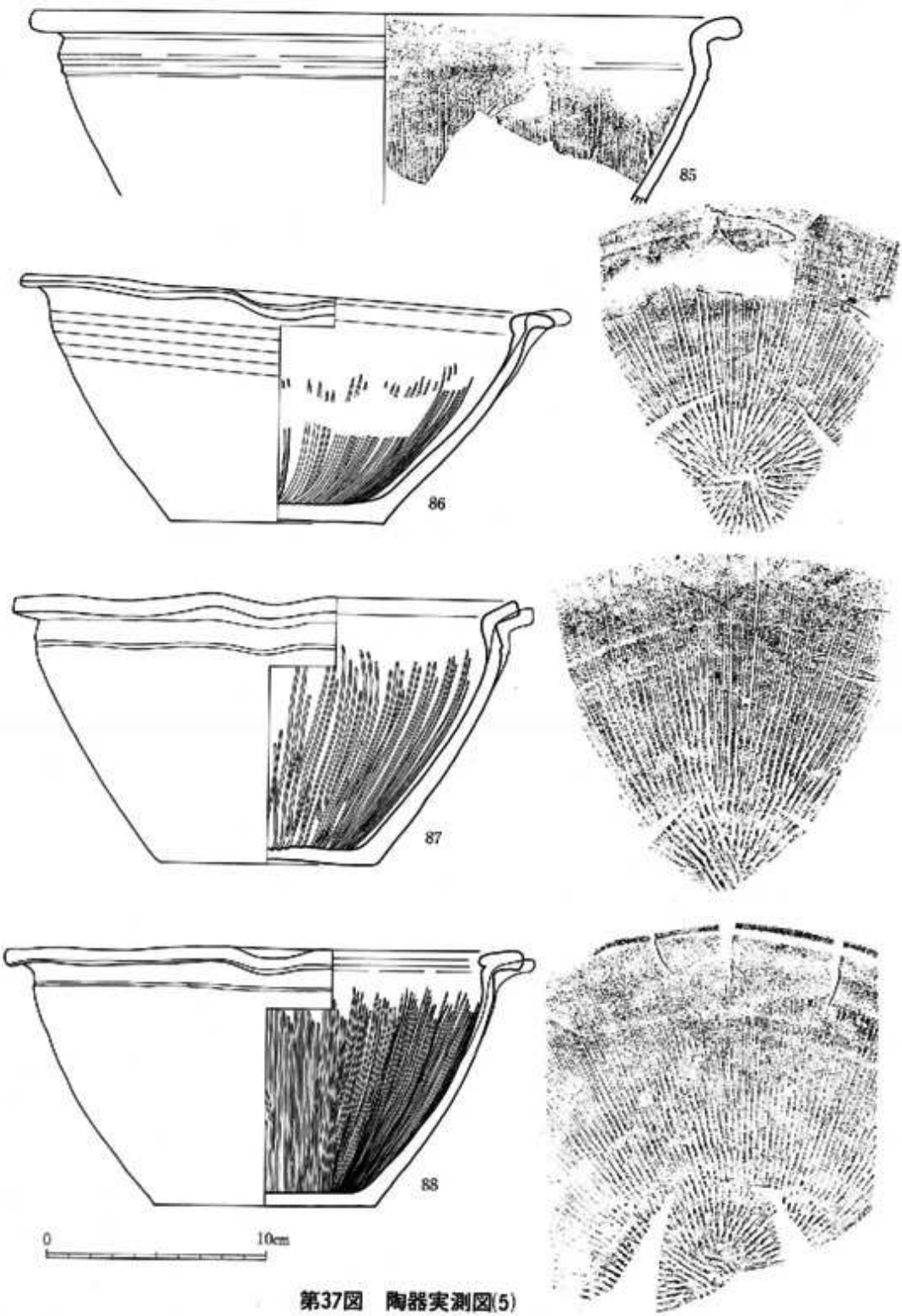


39～44　ＳＥ３出土
45　ＳＥ２出土
46・47　ＳＥ４出土
48　ＳＥ６出土

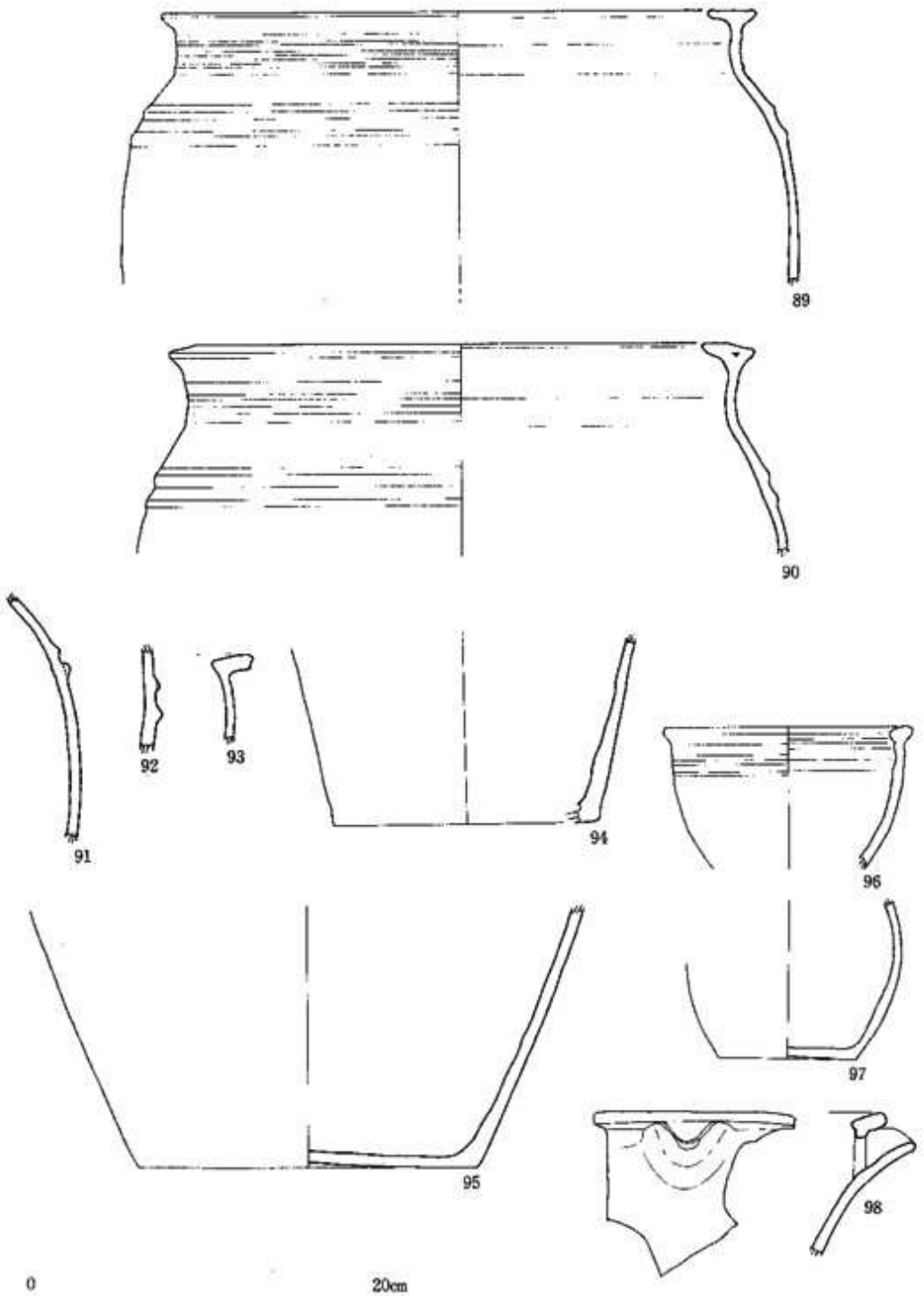
第35図　陶器実測図(3)



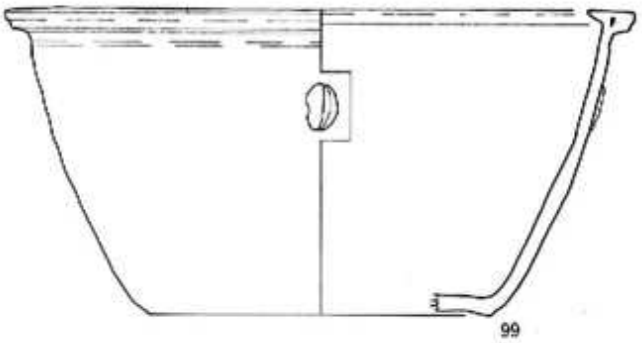
第36図　陶器実測図(4)



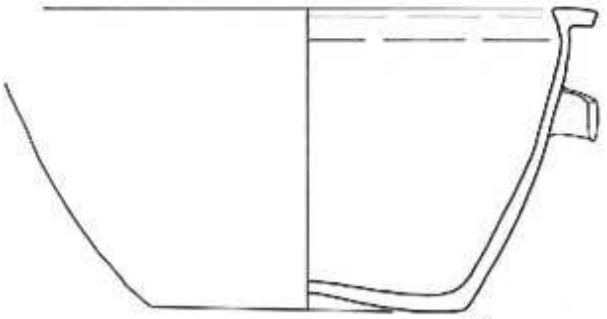
第37図　陶器実測図(5)



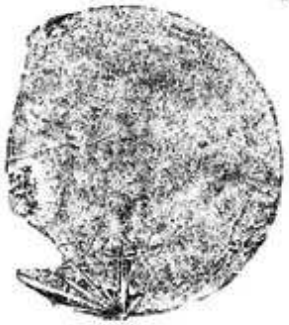
第38図　陶器実測図(6)



99



100



101

0 20cm

第39図　陶器実測図(7)

Ⅳ. まとめ

永田原遺跡の調査は、えびの市において昭和47年に九州縦貫自動車道の調査[1]が行われて以来、久々の発掘調査となった。調査前は、古墳時代集落の検出など期待も大きかったが試掘調査の結果、包含層の残りの悪さや表土下すぐに砂礫層が露出するなど期待薄となった。しかし、結果は弥生時代の住居や古代～近世の建物群や溝状遺構を検出するにいたり、特に、古代の遺構・遺物は、これからの研究において重要な資料になると考えられる。また、古墳時代集落の予想に反したことは、逆にこの地域で未だ発見されていない古墳時代集落の立地について候補地が一つ消法されたことになり、ある意味では調査による一つの成果といえる。

ここでは、永田原遺跡の中心となる歴史時代の遺構・遺物について考えてみたい。

(1) 遺構について

永田原遺跡では掘立柱建物跡10棟、溝状遺構17条が検出された。掘立柱建物跡は、柱穴の規模、埋土の状態や出土遺物から大きく二時期に分けることができる。ひとつはＳＢ１、３、４のグループで柱穴の大きさが径約45cm、深さが約80cmと大きく、埋土は暗褐色を呈している。建物の時期としては、ＳＢ３の北東隅の柱穴底面から完形の肥前系磁器の小杯が出土していることから18～19Cに比定でき、もうひとつのグループは残りのＳＢ２、５～10の７棟であるが、掘立柱建物の重複からみれば少なくとも２時期～４時期の時期幅が考えられる。重複関係をみてみるとＳＢ６とＳＢ７、ＳＢ８とＳＢ９とがそれぞれ重複し、建物の規模についても類似していることからそれぞれ建替えが行われたとみられる。また、ＳＢ２、４、10はＳＢ６～９に比べ桁行、梁行とも短く、建物の規模としては小型で、館以外の機能が想定される。

溝状遺構は、切り合い関係からＳＥ１→ＳＥ２→ＳＥ５、ＳＥ14、ＳＥ17→ＳＥ４の順番が確認できるが、ＳＥ４以外の時期比定は難しい。ＳＥ１はＳＢ４～９に伴うかそれ以前につくられた可能性がある。ＳＥ４は、出土した陶磁器類からＳＢ１などで構成される建物群に伴い、陶磁器類を出土したＳＥ６もこの時期に含まれよう。ＳＥ３、ＳＥ17で構成される区画溝は一辺（東西方向）約35mあり北に延びている。区画内に建物などの遺構は確認できなかったが、この区画溝は切り合い関係や凹地の埋没時期との関連からＳＥ１、ＳＥ２や凹地出土の遺物(主にＢ群)より以後に造られ、ある時期主要な位置を占めていたと考えられる。溝状遺構と掘立柱建物跡との関係は、溝状遺構が比較的広範囲におよぶことや発掘面積が少なかったことなどからうまく捉えることができなかった。

(2) 遺物について

出土遺物は、弥生時代、古代、中世、近世のものに分けられる。その中で最も多いのが古代の遺物で、割合は不明だが多い順に土師器（甕・杯）、布痕土器、須恵器（甕・杯・高台付碗・蓋・皿）、黒色土器、土師器（高台付杯・蓋・皿）、墨書土器、土錘、甑、紡錘車、越州窯青磁となり、日常生活に必要な容器類が主体をなす。

土師器は杯・甕とも県内の同時期のものと同様な形態・法量の変化を示している。当遺跡出土の土師器杯は胎土や焼成のちがいによって８類に分類したが、形態的には一部を除いて類似しているため、時期差より複数の供給源となる生産地が存在していると考えられる。これに対し須恵質土師器杯は口径に比べ器高が低く、体部はやや薄手で口縁部はやや外反し鋭い。この胎土の土器は杯と高台付碗に限られ、特に高台外面に付けられた刻みは特徴的で特定の産地が想定される。

須恵器は窯跡などの調査が進み、ある程度の年代および生産地は確定できるようになってきた。永田原遺跡周辺では、球磨窯跡群[2]があり福岡県や鹿児島県までその流通範囲が確認されているが、永田原遺跡出土の須恵器甕の中にも胎土分析の結果、球磨窯の数値と類似した資料がみられ[3]、流通圏内であったことが窺える。

年代をある程度比定できるものとしては、須恵器の蓋や杯、高台付碗などに限られ、永田原遺跡出土のものについては９世紀前半から10世紀代の時期幅が考えられる。土師器杯は、小皿がまだ供伴していないこと、底部と体部の境が丸みをもつことや周辺の法光寺跡などから出土している10世紀前半によくみられる厚手の底部を有する器高の高いタイプの杯がみられないことなどから９世紀代の要素が強く、須恵質土師器として分類したものは10世紀代に比定されよう。また、須恵器甕口縁の１は大型で口縁に櫛描の波状文が施れ、７～８世紀まで遡る可能性がある。

近世陶磁器は、ＳＥ４で薩摩焼と肥前系磁器の良好な一括資料を得ることができた。特に、薩摩焼では、碗、鉢、摺鉢、甕、壺、茶家、仏器など日常容器のセット関係を捉えることが可能で、肥前系磁器類から17世紀末から18世紀代に比定される。しかし、薩摩焼には、竪野や苗代川など多くの窯跡が知られ[4]、今後、産地の同定や流通範囲、唐津焼との関係など解決しなければならない問題点も多い[5]。また、土師質土器とした把手付きの土器は、高崎町様屋敷遺跡[6]や都城市松原地区遺跡[7]から出土しており、近世陶磁器と供伴するものと思われる。

(3) 布痕土器について

布痕土器は、用途として北部九州の製塩遺跡からの出土例が増加し、焼塩壺として考えら

れているが[8]、県内では製塩遺跡や明確な製塩土器は確認されていない。布痕土器の年代の上限は8世紀の遺跡が見つかっていないことなどから確定は出来ないが、ほぼ9世紀中～後半に位置付けできる。下限は、糸切り底の土師器杯や皿とは供伴していないことからそれ以前として12世紀代と考えられる[9]。

出度量を総重量で比較してみると発掘面積にもよるが、平畑遺跡[10]で50.5kg（約85個体分）、前原南遺跡[11]8.5kg（約14個体分）、陣ノ内遺跡[12]約7.5kg（約13個体分）、永田原遺跡では14.5kg（約24個体分）と比較的多い。また、10世紀前後の竪穴住居から出土した布痕土器は大体2～3個体で、これが1住居が保有する（塩の）量と考えると、永田原遺跡の出土量はかなり多くの人間の存在（あるいは長期にわたる居住）を裏付けているのではなかろうか。県内の布痕土器出土地分布からみれば、海岸線に限らず内陸にもかなりおよび、以前考えられていた官道沿い以外にも多数発見され、日常的生活の必需品であったようである。ただ、「駅」などがあったとされる地域には、特に多量に出土する傾向は感知される。

また、土器の形、大きさなどが一定で、隣県の鹿児島県や大分県、熊本県などからの出土量が少ない[14]ことからすれば、律令制のもと宮崎県（日向国）内において同一の生産地あるいは塩の流通の中で統一された規格であったことが窺える。焼塩壺とされる布痕土器は、祭祀的なものと考えられているが、宮崎県内では、供伴遺物や付随する建物に特殊性は認められず、一遺跡から多量に出土していることからすれば、日常的な保存用として使用されていたと考えられる。また、供伴遺物の年代から9世紀には焼塩壺が出現し、10世紀に最盛期を迎え、一般に浸透し、中世（現在のところ13世紀代）には消滅する。これは、10世紀には西日本で土器製塩が衰退していく[15]のとは対象的な傾向を示しており、このことは古墳時代には注目されていた「日向」が律令体制下におかれたことにより、古代になってそれほど重要性を持たなくなったことを表し、黒色土器が10世紀になっても瓦器に変化せずそのまま継続されていくことも何らかの関係があると思われる。

(4) 遺物の分布状況

遺物の分布状況は前述したように4箇所（A～D群）に集中している。A群が最も出土量が多く、ほとんど全器種の土器類がみられる。遺物は建物内部より梁（東西）方向の外側に多く出土する傾向がみられ、SB6～9で使用した土器類を捨てたものと考えられる。B群は方形区画周囲および凹地から出土した遺物で、出土量は少ないがA群の土器組成に類似している。遺物の大部分は流れ込みであるが、A群でみられない須恵器甕Ⅱ類が出土していることから時期差が認められ、A群に付随する建物以外に建物が存在していた可能性を示して

いる。C・D群は土器の出土量および器種構成は少ない。

遺物の出土量および分布状況と遺構の配置を合わせて当時の生活空間利用を考えた場合、A群が主要な日常生活の場であったと思われる。B群も建物など検出されていないが、A群と同様な土器組成をしていることや方形区画溝が造られていることからなんらかの生活空間があったと考えられる。これに対しD群のSB2やA群のSB5・10付近は遺物の出土量が非常に少なく、建物の規模も小さいことから館跡以外の用途が考えられ、「倉庫」、「作業小屋」、「馬屋」なども可能性としてあげられる。また、少量ではあるが龍泉窯青磁や備前焼、回転糸切り底の土師器皿など小片が出土していることから、15～16世紀にかけてなんらかの生活が行われていたと考えられる。

近世陶磁器類は、SE4、6のほか、D群（SB1、3周辺）から多く出土している。これらの遺物はSB1の柱穴から出土した小杯とほぼ同時期で、SB1、3、4の建物とSE4、6の溝状遺構は供伴すると考えられる。そのほかA群でも薩摩焼などの陶器類が出土している。B・C群ではほとんど出土していない。近世の集落としては、SE4など大係りな溝状遺構もつくられ、陶磁器類も多量に出土していることから、比較的大きなもので、居住地はSE4より東に位置していたと考えられる。

(5) 遺跡の性格

永田原遺跡の中で主体をなすのは9世紀前半から10世紀にかけて形成された建物群である。出土した土器の組成は墨書土器や黒色土器、多量の布痕土器など、球麻駅が位置していたと考えられる宮崎学園都市遺跡群と同様な土器組成をしていることや周辺には法光寺[19]や香取神社[17]などが知られ、この地域が川内川左岸において重要な地域であったことを示している。そして、「長」という墨書土器からすれば地域の首長的役割をもった「郷長」などの居館が存在していた可能性も指摘できる。

以後、空白期があって15～16世紀にかけて何らかの生活区域があったと想定されるが、出土遺物が少ないことや一段高い段丘面に中世の集落が確認されていること、永田原遺跡近くにいくつか島津氏と伊藤氏の古戦場などあり、居住地にはあまり適していなかったのではないだろうか。その後、また、断絶した期間があり、18世紀になって集落がつくられる。

このように、永田原遺跡では集落が散漫な状況で弥生時代から断続的に形成されるが、これは、宮崎県における集落形成の一つの傾向として捉えられる。

註

(1) 『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書』(3) 宮崎県教育委員会 1979

(2) 「球磨窯跡群」『生産遺跡基本調査報告書』Ⅱ　熊本県教育委員会　1980

(3) 奈良教育大　三辻利一氏の分析結果による。分析結果は本書掲載。

(4) 佐藤雅彦「薩摩」『世界陶磁全集』7　小学館　1980

「竪野（冷水）窯址」『南風病院女子寮建設に伴う埋蔵文化財発堀調査報告書』社団法人　鹿児島共済会南風病院　1978

(5) 鹿児島県黎明館の山下氏は、永田原遺跡出土のものは、使用の痕跡がほとんどみられず、鹿児島県の薩摩焼に比べて、胎土や器形などやや異なることなどから付近に窯の存在を指摘された。

(6) 「様屋敷第１・２遺跡」『高崎町文化財調査報告書』第２集　高崎町教育委員会　1990

(7) 「松原地区第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ遺跡」『都城市文化財調査報告書』第７集　都城市教育委員会　1989

(8) 森田　勉「焼塩壺考」『大宰府古文化論叢』下巻　吉川弘文館　1983

(9) 宮崎学園都市遺跡群の調査をもとに考えた。

(10) 「平畑遺跡」『宮崎学園都市遺跡発堀調査報告書』第２集　宮崎県教育委員会　1985

(11) 「前原南遺跡」『宮崎学園都市遺跡発堀調査報告書』第４集　宮崎県教育委員会　1988

(12) 「陣ノ内遺跡」『宮崎学園都市遺跡発堀調査報告書』第４集　宮崎県教育委員会　1988

(13) 平畑遺跡や前原南遺跡、陣ノ内遺跡、下田畑遺跡検出の住居を参考とした。

「下田畑遺跡」『宮崎学園都市遺跡発堀調査報告書』第３集　宮崎県教育委員会　1985

(14) 『海の生産用具』埋蔵文化財研究会　1986

(15) 「海の中道遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第87条　福岡市教育委員会　1982

近藤義郎『土器製塩の研究』　青木書店　1984

(16) 「えびの市遺跡詳細分布調査報告書」『えびの市埋蔵文化財調査報告書』第１集　えびの市教育委員会　1985

(17) 「日向地誌」に白鳳二年創建という記載がみられる。

平部嶠南『日向地誌』　1929

土器観察表（土師器甕）

図面番号	遺物番号	出土位置	器種	器形	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 高	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	調整 内面	調整 外面	備考
19	1	D－4	土師器甕	口縁部				にぶい橙	橙	7mm前後の石粒及び白、灰、茶、透明、半透明の砂粒を含む	良好	よこナデ たてのヘラ削り（下から上）	よこナデ	
〃	2	D－4	〃	〃				浅黄橙	浅黄橙 にぶい黄橙	4mm位の灰色の石粒1コ、2.5mm以下の石英のような砂粒、黒く光る細砂粒を少量含む	良好	よこナデ	ナデ よこナデ	
〃	3	M－6 E－4	〃	〃	30.2			橙	にぶい橙 橙	5mm程の薄茶の粒、2mm程の灰色の粒、1mm以下の白・黒・茶・灰・透明・光る黒色の砂粒及び微粒を含む	良好	よこナデ ↖方向の削り	よこナデ ハケ目	
〃	4		〃	〃				にぶい橙	橙	黒く光る細砂粒、1mm位の白い砂粒、透明で光る砂粒を含む	良好	よこナデ	よこナデ、↗方向にヘラ状工具の跡あり	
〃	5	D－4	〃	〃				にぶい赤褐	橙 にぶい褐	2mm以下の灰、茶、褐色の砂粒を含む	良好	よこナデ ↖方向のナデ	ナデ よこナデ	
〃	6	L－7	〃	〃				にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の茶・白・白透明の粒、1mm以下の灰・黒・茶透明の砂粒を含む	良好	よこナデ	よこナデ	
〃	7	C－4	〃	〃				浅黄	明黄褐	1mm以下の褐、灰の細砂粒を含む	良好	よこナデ 風化の為調整不能	ナデ よこナデ	
〃	8	L－5	〃	〃				淡黄 浅黄橙	橙 淡黄	2mm以下の茶・赤茶黒・透明・光る茶・光る黒・白色の砂粒を含む	良好	よこ方向のハケ目 ↔方向の削り	よこナデ よこ方向のハケ目	
〃	9	E－4	〃	〃				にぶい橙	にぶい赤褐	1mm～2.5mm程度の透明の砂粒、2mm前後の黒い砂粒、1mm～1.5mmの黒く光る砂粒を含む	良好	よこナデ	よこナデ	内面にスス付着？
〃	10	L－6 M－6	〃	〃				にぶい黄橙 浅黄橙	淡黄	2.5mm～3mm位の茶の石粒数個、3.5mmの石英のような砂粒に0.5mm以下の茶灰・褐色の細砂粒を含む	良好	よこ方向のあらいハケ目、風化の為調整不能	ナデ、斜方向のあらいハケ目、よこナデ、たて方向のあらいハケ目	
〃	11	E－3	〃	〃	15.6			橙 灰褐	明黄褐	3mm前後の茶・白色の粒、2mm以下の透明・茶・黒・白・光る黒色の粒及び光る微粒を含む	良好	よこナデ、↖及び↔方向のハケ目、↖方向の削り	よこナデ	
〃	12	D－4	〃	〃				明赤褐 にぶい褐	にぶい赤褐 明赤褐	5mm前後の茶色の粒、2mm以下の赤茶・茶・灰・黒・透明・光る黒色の砂粒を含む	良好	よこナデ ナデ	よこナデ	
〃	13	D－4	〃	〃				にぶい黄橙 灰黄褐	にぶい橙 にぶい褐	3.5mmの褐色の石粒1コ、4mm位の灰色の石粒1コ、3mm位の茶の石粒1コ、ガラス質の透明の光る細砂粒、黒く光るガラス質の細砂粒、白・灰色の細砂粒を含む	良好	よこナデ たてナデ	ナデ よこナデ	

土器観察表

図面番号	遺物番号	出土位置	器種	器形	法量(cm) 口径	底径	高	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	調整 内面	調整 外面	備考
19	14	K－8	土師器甕	口縁部				にぶい黄橙	浅黄橙	黒く光る細砂粒、透明で光る細砂粒、2mm～3mmの乳白色の砂粒を含む	良好	よこナデ	よこナデ よこハケ目	内面にスス付着か？
〃	15	SA1	〃	〃				にぶい黄橙	橙	2mm以下の灰・黒・白・透明・光る黒色の砂粒を含む	良好	よこ方向のハケ目 ↘方向のハケ目	よこナデ	
〃	16	E－4	〃	〃				にぶい褐	灰褐	1mm位の黒く光る砂粒、白い砂粒、半透明で光る砂粒を含む	良好	よこナデ	よこナデ	
〃	17	K－8	〃	〃				橙	橙	径1mm以下の黄色、透明で光る砂粒、黒く光る砂粒を含む	良好	よこナデ 丁寧なナデ	よこナデ	外面に粘土のたるみあり
〃	18	E－4	〃	〃	24.6			明赤褐 褐 灰 黄 灰	にぶい赤褐	4mm程度の灰色の粒、3mm程度の赤茶・茶色の粒、2mm以下の白・黒・赤茶・光る黒透明の砂粒、及び光る微粒を含む	良好	よこナデ よこ方向のハケ目の上をよこナデ？	よこナデ タテ方向のハケ目の上をよこナデ？	内面にスス付着
〃	19	D－4	〃	〃				にぶい黄橙	橙	1mm～2mmの半透明で光る砂粒、1mm位の白・灰の砂粒を含む	良好	よこナデ	よこナデ	
〃	20		〃	〃				明赤褐 暗赤褐	赤 褐	7mm程の茶色の粒、2mm以下の白・茶・透明・黒く光る砂粒、及び光る微粒を含む	良好	よこなで ↘方向の削り	よこナデ タテ方向のハケ目の上をよこナデ	
〃	21	K－8	〃	〃				橙	にぶい橙	2mm～3mmの灰・茶の砂粒を多く含む	良好	摩耗していて調整不明	摩耗していて調整不明	
〃	22	E－5	〃	〃				にぶい褐	にぶい黄橙	黒の細砂粒を含む	良好	よこナデ	よこナデ	
〃	23	L－6	〃	〃	27.8			明赤褐	橙	白（2mm径程度）、茶（1.5mm径）、黒（1mm径）の砂粒を含む	良好	↔方向のハケ目 ↘方向の削り	よこナデ ↔方向のハケ目	外面にスス付着
20	24	G－7	〃	〃	27.2			明赤褐	橙	茶・灰色の石粒及び白・茶・灰・黒色の砂粒を含む	やや不良	よこナデ 削り	よこナデ 口縁部（指で一周なでている）	
〃	25	E－4	〃	〃	17.7			にぶい褐	にぶい褐 橙	5mm位の茶色の粒1コ、2mm以下の褐・灰白の砂粒、1mm以下の石英のような半透明の砂粒を含む	良好	よこナデ ナデ	ナデ、よこナデ、よこの平行線タタキ（？）の上をよこナデ	
〃	26	I－8	〃	〃	19.3			明赤褐 橙	にぶい褐	2mm位の透明で光る砂粒、1mm～2mmの黒い砂粒、1mm位の赤い砂粒、黒く光る細砂粒を含む	良好	よこナデ ナデ	よこナデ	
〃	27	E－5	〃	〃	20.7			褐	橙	1mm位の透明で光る砂粒、1mm～2mm位の灰色の砂粒、黒い細砂粒を含む	良好	↘方向のナデ	よこナデ	

図面番号	遺物番号	出土位置	器種	器形	法量(cm) 口径	底径	高	色調 内面	外面	胎土	焼成	調整 内面	外面	備考
20	28	L－8	土師器甕	口縁部				橙	明赤褐	1mm前位の半透明で光る砂粒、1mm位の白・黒の砂粒、白く光る細砂粒を含む	良好	よこハケ目 ↘方向のナデ	よこナデ よこハケ目	
〃	29	E－4	〃	〃				にぶい褐 にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の褐・灰色の細粒を含む	良好	よこ方向のあらいハケ目、よこナデ	ナデ よこナデ	
〃	30	L－8 K－7	〃	〃				にぶい黄橙	にぶい橙	4mm程度の灰茶色の粒、5mm程度の灰白・灰茶色の粒、3mm程度の灰茶の粒、2mm前後一般都の黒・茶・白・灰・透明・白透明・光る黒色の砂粒及び光る微粒を含む	良好	よこナデ ↑方向の荒いナデ	よこナデ	
〃	31	D－4	〃	胴部				にぶい黄橙	暗褐	白い微細粒、黒く光るガラス質の細砂粒、褐色の細砂粒を含む	良好	ナデ	たて方向のタタキの上をよこ方向のハケ目、一部は斜方向のハケ目	
〃	32		〃	〃				にぶい黄橙	暗褐	2mm位の白い砂粒、1mm以下の灰褐・黒く光るガラス質の細砂粒を含む	良好	ナデ	たて方向のタタキの上をよこ方向にハケ目	
〃	33	E－4	〃	〃				にぶい赤褐	明赤褐 灰褐	径2～3mmの茶の粒子、透明で光る細砂粒、黒くて光る細砂粒を含む	良好	よこナデ 板状工具による強いナデ	よこナデ →・↘タタキ	
〃	34	E－4 E－5	〃	〃				黒褐	赤褐	2～4mm程度の黄褐色の粒、透明で光る粒子を含む	良好	↑方向の削り	タタキ	内面にスス付着
〃	35	E－4	〃	〃				浅黄橙	橙	5mm前後のうす茶、茶の粒、3mm以下のうす茶・白・茶・黒・赤茶・透明の砂粒及び光る微粒を含む	良好	指ナデ	タタキ ナデ	
〃	36	D－4	〃	甕胴部				橙 にぶい黄橙	橙 明赤褐	2mm以下の茶・白・黒・赤茶・透明・光る黒色の砂粒及び光る微粒を含む	良好	風化して調整不明	よこナデ	
〃	37	D－5	〃	甕取手				にぶい黄橙	明褐	3mm程度の白色の粒、2mm程度の赤茶の砂粒、1mm以下の灰・白・黒・透明の砂粒及び光る微粒を含む	良好	ヨコナデ	ナデ	

土器観察表（土師器坏・高台付埦、須恵器坏・高台付埦、墨書土器、土師質土器）

図面番号	遺物番号	出土位置	器形	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調 (外/内)	調整 切り離し ヘラ	切り離し 糸	外底	内底	焼成	備考
21	38	D－4 E－4	坏	13.0	7.8	4.3	1mm以下の褐色・灰色の細砂粒を含む	浅黄橙 浅黄橙	○		b	b′	良好	E類
〃	39	L－6 E－4	坏 底部		7.1		1mm以下の赤茶・茶・黒の砂粒を含む	にぶい橙 浅黄橙	○		c	a	良好	E類
〃	40	D－4	〃		6.4		灰色・うす茶と透明で光る細砂粒を含む	にぶい橙 にぶい橙	○		a	a	良好	
〃	41	E－4	坏	12.15	7.5	4.0 ～ 4.4	黒・茶・褐色の1mm位の砂粒を含む	にぶい黄橙 にぶい黄橙	○		b	a	良好	E類
〃	42	D 4	坏 底部		7.0		2mm位の灰色の砂粒、黒白の砂粒を含む	明黄褐 にぶい橙	○		b	a	良好	B類
〃	43	E－4	〃		7.4		1mm以下の灰色・褐色・クリーム色の細砂粒を含む	にぶい橙・浅黄 にぶい橙	○		b	a	良好	
〃	44	L－7	〃		7.0		褐色・灰色・クリーム色の細砂粒を含む	にぶい橙 にぶい橙	○		b	a′	良好	
〃	45		〃		7.0		1mm位の白い砂粒、2mm位の茶・黒の砂粒を含む	にぶい黄橙 浅黄橙	○		b	a	良好	E類
〃	46	G－6	〃		7.2		褐・黒の細砂粒を含む	にぶい黄橙 にぶい黄橙	○		a		良好	
〃	47	L－6	〃		6.5		4mm以下の茶色い石粒を含む	浅黄橙 浅黄橙	○		b	b	良好	C類
〃	48	SE6 E 4	坏	12.0	8.0	3.8	灰色・褐色・クリーム色と透明で光る細砂粒を含む（数ヶ所2mm位の褐色の砂粒を含む）	浅黄橙 浅黄橙	○		c	b	良好	B類
〃	49		〃	12.7	7.3	4.5	黒色・褐色の細砂粒を含む	にぶい橙 にぶい橙	○		b	a	良好	B類
〃	50	J－6 L－6	坏 底部		6.4		1mm以下の褐・白の不透明の砂粒を含む	橙 橙	○		a	a	良好	B類

図面番号	遺物番号	出土位置	器形	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調 (外/内)	調整 切り離し ヘラ	糸	外底	内底	焼成	備考
21	51	E－4	坏	4.2	12.1	7.0	1mm位の黒く光る砂粒、白く光る細砂粒を含む	灰白・淡黄 灰白	○		a	a'	良好	
〃	52	D－5	坏底部				1mm以下の黒・茶・灰色の細砂粒を含む	浅黄橙 浅黄橙	○		a'	b	良好	F類
〃	53		坏	12.2	7.2	5.0	灰色・うす茶・クリーム色の細砂粒と所々に2mm位の砂粒を含む	浅黄橙 浅黄橙	○		c	a'	良好	C類
〃	54	J－6	坏底部				1mm以下の黒色・褐色・灰色と透明で光る細砂粒を含む	にぶい橙 にぶい橙	○		a		良好	
〃	55	G－7	坏	12	7.4	4.8	白色石粒及び白・黒・茶・灰色の砂粒を含む	黄橙 黄橙	○		a	a	良好	A類
〃	56	D－4	〃	12.6	7.3	4.4	光る粒及び白・黒・灰・茶色の砂粒	浅黄橙 浅黄橙	○		c	d	やや不良	C類
〃	57		坏底部		6.4		白の細砂粒を含む	橙 橙	○		b	a	良好	A類
〃	58	SA1	坏	12.4	6.5	4.15	2mm～3mm位の茶・黒の砂粒 白色の光る細砂粒を含む	黄橙 黄橙			a	a	良好	A類
〃	59	SA1	坏底部		7.5		1mm位の黒い灰の細砂粒 3mm位の灰の砂粒を含む	淡黄 淡黄			c	b	良好	C類
〃	60	SA1 E－4	〃		6.9		黒い細砂粒を少量含む	黄橙 黄橙	○		a	a'	良好	A類
〃	61	D－4	〃		6.8		2.5mm位の白の粒、白の細砂粒、1mm位の灰の砂粒を含む	浅黄橙 黄橙				a'	良好	
22	62	E－4 E－5	坏	13.0	7.4	5.4	黒色・灰色の細砂粒を含む	にぶい橙 にぶい橙	○		a	b	良好	
〃	63	J 6	坏底部		8.0		1mm以下の黒・灰・クリーム色・透明で光る細砂粒を含む	橙 橙	○		b	a	良好	B類
〃	64	F－6	〃		6.4		1mm以下の灰色・褐色と透明で光る細砂粒を含む (2ヶ所2mm位のうす茶の砂粒を含む)	にぶい橙 にぶい橙	○		a	b	良好	

図面番号	遺物番号	出土位置	器形	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	調整 切り離し ヘラ	糸	外底	内底	焼成	備考
22	65	E－4	坏	13.5	5.25	4.2 | 4.5	白・黒・灰・茶の砂粒を含む	浅黄橙 浅黄橙	○		b	b	良好	B類
〃	66	E－5	坏底部		6.0		黒色・褐色・クリーム色の細砂粒を含む	浅黄橙 浅黄橙	○		d	b	良好	
〃	67	D－4	〃		長7.4 短7.1		うす茶・灰色と透明で光る細砂粒を含む	橙 橙					良好	
〃	68	L－6	〃				2.5mm以下の白い細砂粒 0.5mm以下の褐色の細砂粒を含む	浅黄橙 浅黄橙				a	良好	
〃	69	D－4	〃		5.4		褐・黒色の細砂粒を少量含む	淡黄 淡黄	○		a	b	良好	
〃	70	D－4	〃		6.7		4mmの灰色の石粒、1mm以下の褐色の細砂粒を含む	橙 橙	○		a	a	良好	
〃	71	E－5	〃		7.2		4mm以下の褐色、1.5mm以下の灰色不透明の石粒を含む	橙 橙			b	a′	良好	A類
〃	72	SA1	〃		7.0		黒色と透明で光る細砂粒を含む (1ヶ所、1mm大の白い砂粒を含む)	淡黄 淡黄	○		a	b	良好	
〃	73	D－4	〃		6.8		4mm以下の白い不透明の石粒、灰色の砂粒を含む	浅黄橙 浅黄橙	○		b	a′	良好	B類
〃	74		〃		7.7		灰色・褐色と黒・透明で光る細砂粒を含む	浅黄橙 浅黄橙			e	b′	良好	F類
〃	75	K－6	〃		6.8		1mm位の黒・赤茶の細砂粒を含む	灰白 灰白	○		b	a″	良好	C類
〃	76		坏	16.5			3.5mm以下の褐色の石粒、2.5mm以下の白の砂粒、3.5mm以下の灰色の砂粒を含む	黄橙・暗灰黄 橙・にぶい黄橙					良好	A類
〃	77		坏底部		6.9		1mm以下の褐色・灰色と透明で光る砂粒を含む	浅黄橙 淡黄	○		b	a	良好	E類
〃	78	SE-6	〃				1mm位の赤・茶・白の砂粒、白く光る細砂粒を含む	淡黄 淡黄			d		良好	

図面番号	遺物番号	出土位置	器形	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調 (外/内)	調整 切り離し ヘラ	糸	外底	内底	焼成	備考
22	79	D－10	坏底部		8.3		乳白色・灰の細砂粒を含む	にぶい橙 橙		○	a	a′	良好	
〃	80	I－7	〃				褐色・灰色と透明で光る細砂粒を含む	浅黄橙 にぶい黄橙		○	a	a′	良好	B類
〃	81		皿底部	10.9	9.2	2.0	1mm位の白・茶・黒の細砂粒を含む	にぶい黄橙 にぶい黄橙		○			良好	
〃	82		坏底部	5.7	3.3	1.65	乳白色・茶・黒の細砂粒を含む	浅黄橙 浅黄橙		○			良好	
〃	83	E－4	〃				灰色の細砂粒を含む	にぶい黄橙 灰　白	○		a	a″	良好	
〃	84	L－8	〃				1mm以下の褐の細砂粒を含む	にぶい橙 にぶい橙			b		良好	
23	85		高台付椀底部		7.4		2mm以下の灰・褐・クリーム色の砂粒と黒・透明で光る砂粒を多く含む（砂粒がざらざらしている）	浅黄橙 浅黄橙					良好	A類
〃	86		〃		7.6		黒・褐色・透明で光る細砂粒を含む （1ヶ所、4mm大のうす茶の砂粒を含む）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	○				良好	
〃	87		〃		7.6		1mm内外のうす茶・灰色・半透明と透明・黒で光る砂粒などを多く含む	浅黄橙 浅黄橙					良好	A類
〃	88	H－7	〃		7.3		黒色・褐色・クリーム色の細砂粒を含む	灰　白 灰　黄					良好	
〃	89	E－4 E－5	〃		10.0		灰色・褐色の細砂粒を含む （1ヶ所、5mm大の白っぽい灰色の砂粒を含む）	浅黄橙 浅黄橙	○		a	d	良好	C類
〃	90	D－5	坏蓋				0.5mmの白い砂粒、1mm～0.5mmの茶色の砂粒を含む	浅黄橙 浅黄橙					良好	宝珠つまみ
〃	91	L－6 D－4	坏底部		4.8	4.0	茶・灰等、1mm以下の砂粒を含む	橙 黒					良好	内黒土器
〃	92	D－4	坏口縁部				灰・茶等の細砂粒を含む	明黄褐 黒					良好	内黒土器

図面番号	遺物番号	出土位置	器形	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調 (外/内)	調整 切り離し ヘラ	切り離し 糸	外底	内底	焼成	備考
23	93	SE6	坏 口縁部				茶・灰等の細砂粒を含む	にぶい橙 黒					良好	内黒土器
〃	94	D－5	〃				細砂粒を含む	にぶい黄橙 黒					良好	内黒土器
〃	95	D－4	〃				茶・灰等の細砂粒を含む	明黄褐 黒　褐					良好	内黒土器
〃	96	L－6	〃				細砂粒を含む	黄　灰 黒					良好	内黒土器
〃	97	J－5	坏 底部				細砂粒を含む	黄　灰 黒					良好	内黒土器
〃	98	L－6	〃				茶・灰の1mm以下の砂粒を多く含む						良好	内黒土器
〃	99	D－4	〃		10.6		2mm以下の茶・肌色等の砂粒、透明に光る粒を含む	明赤褐 黒					良好	内黒土器
〃	100		墨書土器 坏口縁部				白・褐色の砂粒を含む	橙					良好	体部外面に墨書
〃	101	I－6	〃				赤・茶・黒・白く光る細砂粒を含む	灰黄褐・浅黄橙 橙					良好	体部外面に墨書
〃	102	D－4	墨書土器 坏体部				細砂粒を含む	にぶい褐					良好	須恵器 体部外面に墨書
〃	103	E　5	坏 底部		7.0		白・黒・灰の細砂粒を含む	にぶい黄橙 にぶい黄橙	○		a	a	良好	須恵質
〃	104	E－4	〃		7.1		1.5mm前後の白色透明の砂粒、黒い細砂粒を含む	にぶい黄橙 淡　黄	○		a	a	良好	須恵質
〃	105	D－5 E－5 J－6	〃		7.0		1mm径以下の黒の砂粒を含む	橙 橙	○		a	a′	良好	須恵質
〃	106	D－4 D－5	坏	12.5	5.6	3.95	黒と白の砂粒を含む	橙・灰白（一部口縁部） 灰　黄	○		a	a′	良好	須恵質

図面番号	遺物番号	出土位置	器形	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調 (外/内)	調整 切り離し ヘラ	糸	外底	内底	焼成	備考
23	107	E－4	坏	13.3	7.0	4.3	茶と白の砂粒を含む	褐・にぶい赤褐(一部口唇部) にぶい褐・橙(一部口縁部)	○		a	a	良好	須恵質
〃	108	P－17 D－4	坏底部				0.5mm～2mm位の乳白色の砂粒、1mm位の黒い砂粒を含む	にぶい褐 にぶい褐			a	b	良好	須恵質
〃	109	D－4	坏	12.4	7.1	4.0	白・こげ茶色の砂粒を含む	橙・褐灰（一部口縁部） にぶい橙	○		a	a	良好	須恵質
〃	110		坏口縁部	13.0			黒の細砂粒を含む	橙・黄灰 橙・にぶい橙					良好	須恵質
〃	111	D－4 E－4	〃	11.4	6.8	4.4	黒の細砂粒を含む	淡黄・にぶい黄橙 淡黄					良好	須恵質
〃	112	SE6	坏底部		7.5		1mm以下の灰色の砂粒、黒・白の細砂粒を含む	灰　黄 灰　黄	○		b	a′	良好	須恵質
〃	113	E－4	〃		6.8		1mm位の乳白色の砂粒、2mm位の灰色の砂粒を含む	にぶい橙 橙	○		b	a′	良好	須恵質
〃	114	K－4 E－5	高台付椀底部	14.7	8.0	7.5	うす茶・灰色・黒の砂粒、1～2mmの石粒含む	にぶい黄橙 にぶい黄橙	○		a	b	良好	須恵質
〃	115	E－4	〃		7.8		1.5mm位の黒の砂粒、1mm位の白の砂粒、黒の細砂粒を含む	灰　黄 浅　黄					良好	須恵質
〃	116	D－4 J－5	〃	12.0	7.0	4.9	白・灰色の砂粒を含む	にぶい橙 灰　褐	○		a	a′	良好	須恵質
〃	117	K－5 L－6	〃		7.8		灰・黒の細砂粒、4mmの灰の砂粒を含む	灰黄・橙 灰黄・橙	○		a	a	良好	須恵質
〃	118	SE5	皿口縁部				1mm以下の白い砂粒と褐色の砂粒を多く含む	にぶい橙 灰　褐	○		b	a′	良好	須恵質
							須　恵　器							
29	46	D－4	壺口縁部	10			白・茶・黒の細砂粒を含む	黄　灰 明灰黄					良好	一部に施釉

図版番号	遺物番号	出土位置	器形	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調 (外/内)	調整 切り離し ヘラ	切り離し 糸	外底	内底	焼成	備考
29	47		壺 口縁部	4.6			黒・白・茶の細砂粒を含む	黄灰 灰白					良好	一部に施釉
〃	48		〃 胴部				白・黒等の細砂粒を含む	灰・灰オリーブ 灰					良好	一部に施釉
〃	49	D－4	坏 口縁部	11.4			黒の細粒子を含む	浅黄・黄灰（口縁部のみ） 黄灰					良好	
〃	50	K－7	〃	12.6			黒と黄褐色の砂粒を含む	黄灰 褐灰					良好	
〃	51	SA1	〃	11.8			1mm位の白い砂粒、白・黒・こげ茶の細砂粒を含む	灰白 灰					良好	
〃	52	E－4	〃	14.8			3mm位の黄色の粒子、白色の砂粒、黒の砂粒を含む	灰・オリーブ黒(自然釉の色) 黄灰					良好	
〃	53	D－4	高台坏 底部		7.3		白・茶・黒の細砂粒を含む	灰 灰	○				良好	
〃	54	E－4	高台坏 口縁部～底部	12.0	6.0	4.25	1mm位の茶の砂粒をわずかに含む	灰赤・灰白 明黄褐					良好	
〃	55	D－4	高台坏 口縁部	14.6			黒の砂粒を含む	灰黄 浅黄					良好	56と同一個体
〃	56	D－4	高台坏 底部			8.0	1.5mm以下の黄褐色、白・黒色の細粒子を含む	灰白・褐灰 褐灰					良好	55と同一個体 一部に自然釉がかかる
〃	57	D－4 D－5	皿	15.8	12.6	1.9	白・灰色の砂粒、3～4mmの石粒を含む	灰 灰	○				良好	
〃	58	F－6	鉢 口縁部				白・黒の細砂粒を含む	黄灰・灰黄 灰白					良好	
〃	59	D－4	蓋	12.8		2.2	白・黒の細砂粒、1.5mm位の灰の砂粒を含む	灰黄 灰黄	○				良好	
〃	60	D－4	〃				黒と灰白色の砂粒を含む	灰白・浅黄 灰白・浅黄					良好	

図面番号	遺物番号	出土位置	器形	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土	色調 (外/内)	調整 切り離し ヘラ	糸	外底	内底	焼成	備考
29	61	E 5	甕	10.8		1.6	1.5mm位の黒の砂粒と淡黄の細砂粒を含む	褐灰・明褐 褐灰・灰白					良好	
							土師質土器							
29	62	D－4	口縁部 底部	16.4	15.2	3.75	黒と透明で光る砂粒を含む（1mm以下）	にぶい橙 浅黄橙・橙				c	良好	
〃	63	D－4	口縁部		16.3		1mm程度の灰色の粒、黒・白・茶・透明の細粒、及び光る微粒を含む	にぶい黄褐・にぶい黄橙 浅黄橙					良好	
〃	64	D－4	底部		11.4		1.5mm以下の褐の砂粒を少量含む	にぶい黄橙・褐灰 にぶい黄橙			b	c	良好	
〃	65	D－5	口縁部				透明で光る細砂粒、黒の細砂粒を含む	浅黄橙・灰黄褐・黄褐 灰白・灰黄褐			b	c	良好	
〃	66	G－7	口縁部 底部	19.6	15.2	4.1	黒と透明で光る細砂粒を含む（1mm以下）	にぶい橙 にぶい橙				c		
〃	67		〃				透明で光る細砂粒、黒（2mm以下）と白の砂粒を含む	灰白・灰褐 浅橙			b	c	良好	
〃	68	G 7	口縁部				透明で光る細砂粒と黒の細砂粒を含む	灰白・褐灰 淡黄					良好	
〃	69	E 5	胴部				灰色の細砂粒を少量含む	灰白・黒褐 浅黄橙			b	c	良好	
〃	70		〃				ガラス質の光る細砂粒、褐色の細砂粒を含む	にぶい黄橙・黒 にぶい黄橙					良好	
〃	71	I 7	把手				黒色・褐色と透明で光る細砂粒を含む	灰白 灰白・灰褐					良好	
〃	72	E－5	〃				灰色の細砂粒を含む	にぶい黄褐 にぶい黄褐					良好	
〃	73	D－4	把角				灰色と透明・黒色の光る細砂粒を含む	にぶい橙 にぶい橙					良好	

土器観察表（布痕土器）

図面番号	遺物番号	出土位置	器部	文様および調整		胎土	色調		焼成	備考
				外面	内面		外面	内面		
30	1	E－4	口縁部	風化のため調整不明	布目	2mm程度の灰茶・赤色の砂粒、微細な白、灰色の砂粒及び光る微粒を含む	橙	橙	良好	
〃	2	D－4	口縁部	風化のため調整不明	布目	1～5mm位の灰の粒、白黒の細砂粒、白く光る・黒く光る細砂粒を含む	橙	橙	良好	
〃	3	D－5	口縁部	風化のため調整不明	布目	2mm位の灰の砂粒、灰・白・黒の細砂粒、黒く光る細砂粒を含む	橙	橙	良好	
〃	4	E－5	口縁部	ナデ（口唇部） 風化のため調整不明	布目	2mm位の茶・灰の砂粒、黒の細砂粒、白く光る細砂粒を含む	橙	橙	良好	
〃	5	E－5	口縁部	風化のため調整不明	布目	1～3mmの灰の粒、2mm位の乳白色の砂粒、白の細砂粒、1mm位の透明で光る砂粒	橙	橙	良好	
〃	6	D－4	口縁部	風化のため調整不明	布目	黒・白の細砂粒、3～5mmの灰色の粒、白く光る細砂粒を含む	橙	橙	良好	
〃	7	D－4	口縁部	風化のため調整不明	布目	1～2mmの灰の砂粒、5mm位の灰の粒、1～3mmの茶の砂粒、白・黒の細砂粒を含む	橙	橙	良好	
〃	8	D－4	口縁部	そぎ落とし（口唇部） 指押え	布目	黒い3mm大の石粒 白い細砂粒を含む	にぶい橙	橙	良好	
〃	9	E－5	口縁部	ナデ（口唇部） 風化のため調整不明	布目	白・黒の細砂粒 2mm位の灰の砂粒を含む	浅黄橙	橙	良好	
〃	10	E－4	口縁部	風化のため調整不明	布目	1～3mmの灰の砂粒、2mm位の白の砂粒、黒白の細砂粒、1mm位の透明で光る砂粒を含む	橙	橙	良好	
〃	11	D－4	口縁部	風化のため調整不明	風化 （部分的に布目残る）	11mm程度の赤茶の混じった茶色の粒、9mm～1mm程度の橙色の粒、4mm～1mm程度の灰色の粒及び光る微粒を含む	橙	橙	良好	
〃	12	D－4	口縁部	風化のため調整不明	布目	2mm程度の茶色の砂粒、微細な白・黒・透明の砂粒及び光る微粒を含む	浅黄橙	橙	良好	
〃	13	E－4	口縁部	ナデ	布目	8mm～1mm前後の赤茶の粒、5mm～1mm前後の橙色の粒、1mm～微細の白・黒・灰・黒く光る砂粒及び光る微粒を含む	橙	橙	良好	

図面番号	遺物番号	出土位置	器部	文様および調整 外面	文様および調整 内面	胎土	色調 外面	色調 内面	焼成	備考
30	14	SA1	口縁部	ナデ	布目	2mm前後の茶・白色の砂粒、微細な赤茶・白・黒・透明の砂粒及び光る微粒を含む	橙	橙	良好	
〃	15	E－4	口縁部	風化のため調整不明	布目	2mm程度の灰茶色の砂粒、微細な白黒茶・光る黒・灰色の砂粒及び光る微粒を含む	橙	橙	良好	
〃	16	E－4	口縁部	ナデ	布目	3mm程度の赤茶の粒、2mm前後の灰色の粒、微細な白・透明の砂粒及び光る微粒を含む	にぶい黄橙 橙	橙	良好	
〃	17	D－5	口縁部	ナデ	布目	1mm以下の茶・白の砂粒及び光る微粒を含む	橙	橙	良好	
〃	18	E－4	口縁部	風化のため調整不明	布目	1mm位の灰の砂粒 白・黒・白く光る細砂粒を含む	橙	黄橙	良好	
〃	19	D－4	口縁部	ナデ（口脊部） 指押え	布目	灰色の6mm～3mm大の石粒、5mm大の茶色の砂粒を含む	橙	橙	良好	
〃	20		口縁部	そぎ落とし（口脊部） 指押えの後ナデ	布目	白・灰色の砂粒を含む	橙	橙	良好	
〃	21	D－4	口縁部	風化のため調整不明	布目	14mm程度の赤茶の粒、4mm～1mm程度の灰・茶・橙色の粒、微細な灰・白・光る黒色の砂粒及び光る微粒を含む	橙	橙	良好	
〃	22	D－4	口縁部	そぎ落とし（口脊部） 指押え後ナデ	布目	土器質と同じ6mm～1mm大、他1mm大の茶色の砂粒を含む	浅黄橙	橙	良好	
〃	23	D－4	口縁部	そぎ落とし（口脊部） ナデ	布目	5mm程度の橙色の粒、2mm前後の透明の粒、1mm以下～微細の灰・白・茶透明の砂粒及び光る微粒を含む	橙	黄橙	良好	
〃	24	E－4	口縁部	風化のため調整不明	布目	3～9mmの茶の粒、白・黒・灰の細砂粒、黒く光る・白く光る細砂粒を含む	橙	橙	良好	
〃	25	D－4	口縁部	そぎ落とし（口脊部） 白い光沢のある付着物あり	布目	白色の砂粒及び橙色の3mm大の石粒を含む	橙 明緑灰（一部口縁部）	にぶい橙	良好	
〃	26	D－4	口縁部	風化のため調整不明	布目	1mm以下の白・赤茶透明・茶色の砂粒及び光る微粒を含む	橙	橙	良好	
〃	27	D－5	口縁部	そぎ落とし（口脊部） ナデ（風化）	布目	白・灰色の砂粒を含む	橙	橙	良好	

図面番号	遺物番号	出土位置	器部	文様および調整		胎土	色調		焼成	備考
				外面	内面		外面	内面		
30	28	D－5	胴部	摩耗により調整不明	布目	6mm位の茶の粒、黒白の細砂粒、光る細砂粒を含む	明黄褐	浅黄橙	良好	
〃	29	D－4	胴部	摩耗により調整不明	布目	黒・白の細砂粒、1mm位の茶の砂粒、2mm位の灰の砂粒を含む	橙	橙	良好	
〃	30	D－4	胴部	ナデ	布目	8mm程度の灰色の粒、6～1mm程度の灰・赤茶色の粒、微細な黒・灰・茶色の砂粒及び光る微粒を含む	にぶい褐	橙	良好	
〃	31	D－5	胴部	摩耗により調整不明	布目	1～6mm位の茶の粒、2mm位の灰の粒、白・黒の細砂粒を含む	橙	橙	良好	
〃	32	E－4	胴部	風化のため調整不明 自然釉	布目	白・黒の細砂粒、1.5mmの透明で光る砂粒、白く光る細砂粒を含む	橙	にぶい橙	良好	
〃	33	E－4	胴部	風化のため調整不明	布目	2mm位の灰の砂粒、白・黒の細砂粒を含む	浅黄橙	橙	良好	
〃	34	E－4	胴部	摩耗により調整不明	布目	2mm位の茶の砂粒、白黒の細砂粒、光る細砂粒を含む	橙	橙	良好	
〃	35		胴部	摩耗により調整不明	布目	黒く光る細砂粒、白く光る細砂粒、透明で光る細砂粒、1mm位の白・乳白色・灰の砂粒、5mm位の茶の粒を含む	橙	橙	良好	
〃	36	P－18	胴部	ナデ？	布目	3mm程度の茶色の粒及び光る微粒を含む	橙	橙	良好	
〃	37	J－5	胴部	ナデ？ 風化	布目	微細な白・赤茶・光る黒色の砂粒及び光る微粒を含む	橙	橙	良好	
〃	38	SE6	胴部	摩耗により調整不明	布目	3mm位の灰・茶の粒、白黒の細砂粒を含む	橙	橙	良好	
〃	39	D－4	胴部	摩耗により調整不明	布目	2mm位の赤茶の砂粒、白・黒の細砂粒、光る細砂粒を含む	浅黄橙	橙	良好	
〃	40		胴部	摩耗により調整不明	布目	黒・白の細砂粒、白く光る細砂粒、7mm位の茶の粒を1つ含む	橙	橙	良好	
〃	41	D－4	胴部	摩耗により調整不明	布目	白・黒・白く光る細砂粒を含む	浅黄橙	浅黄橙	良好	

深図番号	遺物番号	出土位置	器部	文様および調整 外面	文様および調整 内面	胎土	色調 外面	色調 内面	焼成	備考
30	42	SE6	胴部	摩耗により調整不明	布目	1mm位の赤茶の砂粒、白・黒の細砂粒を含む	浅黄橙	浅黄橙	良好	
〃	43	SA1	胴部	ナデ	布目	1mm程度の白色の砂粒、微細な赤茶・白色の砂粒及び光る微粒を含む	橙	橙	良好	
〃	44	D−4	胴部	風化のため調整不明	布目	1〜4.5mmの灰の砂粒、白・白く光る細砂粒を含む	黄橙	黄橙	良好	
〃	45		胴部	ナデ 風化	風化	6mm前後〜微細な灰・橙色の粒、1mm前後の砂粒及び光る微粒を含む	橙	橙	良好	
〃	46		底部	ナデ?	風化	1mm以下の白・赤茶・灰・黒・白透明・透明光る黒色の砂粒及び光る微粒を含む	橙	橙	良好	
〃	47	SE5	底部	風化	布目	3mm程度の橙色の粒、微細な赤茶・白黒の砂粒及び光る微粒を含む	橙	橙	良好	
〃	48	D−4	底部	ナデ? 風化	布目	14mm程度の橙色の粒、6mm程度の褐色の粒、2mm前後の灰色の粒、1mm以下の赤白・赤茶の砂粒及び光る微粒を含む	橙	橙	良好	
〃	49	D−5	口縁部	風化のため調整不明	布目	1mm位の灰の砂粒、白・黒の細砂粒、5mm位の灰の粒を1つ含む	橙	橙	良好	

土器観察表（陶磁器）

図面番号	遺物番号	出土位置	器種	部位	法量(cm)	色調	形態・成形技法の特徴	備考
33	1	I－6 D－4	青磁	口縁部	——	外－灰黄 内－灰黄	口縁端部が強く外反する。内底に目跡あり。	越州窯の可能性あり
〃	2	SE3	青磁	口縁部	口径(推定) 13.0	釉－明オリーブ灰	直口縁、厚手である。	
〃	3	SE3	青磁	胴部 (底部付近)	——	釉－明緑灰 胎土－灰白	外面に細線の蓮弁文がほどこされる。	
〃	4		青磁器	胴部 (底部付近)	——	釉－オリーブ灰 胎土－灰白	見込みに画花文？	
〃	5	SE4	磁器 碗	口縁部 ＼ 底部	口径(推定) 10.3 高台径 4.3 器高 6.1	釉 外－明緑白 内－灰白 胎土－灰白	厚手の碗で外面には、草花文が描かれる。高台内は、くずれた「大明年製」銘がみられる。外面全体に貫入がみられる。	肥前系
〃	6	SE4	磁器 碗	口縁部 ＼ 底部	口径(推定) 10.2 高台径(推定) 3.9 器高 5.7	釉－明緑灰 胎土－灰白	外面には草花文、高台内には銘が施される。畳付は露胎	肥前系
〃	7	SE4	磁器 碗	口縁部 ＼ 底部	口径(推定) 10.0 高台径(推定) 3.8 器高 5.7	釉－明緑白 胎土－灰白	体部外面には、簡略化された梅花唐草文が描かれる。見込みに砂が付着する。また、高台内には「大明年製」銘のくずれた形態のものがみられる。	
〃	8	SE4	磁器 碗	胴部 ＼ 底部	高台径(推定) 4.45	釉－明緑白 胎土－灰白	見込み部が全体に盛り上がる。畳付は露胎、全体に細かい貫入が入る。外面には唐草文？高台内には「福」の銘が施される。	
〃	9	SE4	磁器 皿	口縁部 ＼ 底部	口径(推定) 19.3 高台径(推定) 12.0 器高 2.3	釉－明緑白 胎土－灰白	型打整形の皿で口縁部は輪花を呈す。畳付は露胎、主文様は蛸唐草文、裏文様は梅花唐草文が描かれる。見込みには五弁花文が施されると思われる。	肥前系
〃	10	SE4	白磁 皿	底部	高台径(推定) 8.0	釉－明緑白 胎土－灰白	内面の主文様は不明、裏文様は唐草文と考えられる。見込みにはコンニャク判による五弁花文が施され、高台内には渦福銘が配される。	肥前系
〃	11	SE4	磁器 小皿	口縁部 ＼ 底部	口径(推定) 6.7 高台径(推定) 3.0 器高 4.15	釉－明緑白 胎土－灰白	体部は薄手で口縁は端反りとなる。底部は厚手で高台内中央はやや凸状になる。見込みに砂付着、外面に雲持ち笹文。	肥前系
〃	12	SE4	磁器 小皿	口縁部 ＼ 底部	口径(推定) 6.6 高台径(推定) 2.7 器高 3.85	釉－明緑白 胎土－灰白	体部はやや薄手で口縁は端反りとなる。底部は厚手で中央部が内外ともやや突出する。外面に雲持ち笹文。	肥前系
〃	13	SE4	磁器 碗	胴部	……	外－釉－明緑白 内－無釉－にぶい褐 胎土－灰白	内面は露胎で粘土のつなぎ目及びロクロ痕がみられる。外面には櫛描文が描かれる。	肥前系

図版番号	遺物番号	出土位置	器種	部位	法量(cm)	色調	形態・成形技法の特徴	備考
33	14	SE6	磁器碗	口縁部～底部	口径(推定) 11.6 高台径(推定) 4.35 器高 5.7	釉ー明緑白 胎土ー灰白	やや口径の広い碗で外面には山水画？が描かれる。畳付は露胎、見込み及び高台内中央がやや凸状になる。	
〃	15	SE6	磁器碗	口縁部	——	釉ー明緑白 胎土ー灰白	型打製形の皿で口縁部は輪花を呈す。主文様は蛸唐草で、裏文様には梅花唐草文が描かれる。	肥前系
34	16		磁器碗	胴部～底部	高台径(推定) 3.9	釉ー明緑白 胎土ー灰白	見込みがやや座布団状に隆起する。高台内には「大明年製」銘の簡略化されたものが施される。	
〃	17		磁器小鉢	底部	高台径(推定) 6.2	釉ー明緑白 胎土ー灰白	見込みに手描き五弁花が施される。	肥前系
〃	18	D－4	磁器碗	口縁部～底部	口径(推定) 10.7 高台径(推定) 4.0 器高 5.2	釉ー明緑白 胎土ー灰白	見込みは蛇ノ目釉はぎされる。畳付は露胎、体部外面には雷特唐文が描かれる。	肥前系
〃	19		磁器蓋物	身	高台径(推定) 5.2	釉ー明緑白 胎土ー灰白	蓋物の身の底部と考えられる。底部からほぼ垂直に立ち上がる。外面には唐草文？が描かれる。	肥前系
〃	20	H－7	磁器碗	底部	高台径(推定) 3.8	釉ー明緑白 胎土ー灰白	薄手で低く小さな高台を有す。畳付は露胎、外面に菊花文が描かれる。	肥前系
〃	21		磁器碗	口縁部～胴部	口径(推定) 8.6	釉ー明緑灰 胎土ー灰白	筒形碗で外面にコンニャク印判が施される。	肥前系
〃	22	J－5	磁器碗	口縁部～底部	口径(推定) 7.8 高台径(推定) 3.2 器高 4.9	釉ー灰白 露胎ー灰白 胎土ー灰白	厚手の青磁染付碗である。体部はやや内湾しながらのびる。淡いオリーブ色の釉が施され、口径外面には呉須による三角文が描かれている。高台内は蛇ノ目状を呈し露胎である。	
〃	23		白磁皿	底部	高台径(推定) 6.8	釉ー灰白 胎土ー灰白	全体に透明釉がかかる。畳付は露胎、見込みに砂が少量付着する。	
〃	24	G－6	磁器皿	底部	高台径(推定) 7.7	釉ー明緑白 胎土ー灰白	主文様は山水文、裏文様は不明、畳付は露胎となる。	肥前系
〃	25	G 7	磁器小皿	口縁部～底部	口径 7.0 高台径 2.7 器高 4.0～4.2	釉ー明緑白 胎土ー灰白	口縁部は端反で体部にロクロ痕をのこす。灰白色釉が厚く施される。畳付は露胎。	肥前系
〃	26	D－4	磁器猪口	口縁部～底部	底径(推定) 4.75	釉ー灰白 胎土ー灰白	体部は筒状にのび内・外面とも透明釉を施す。外面、松枝が呉須によって描かれる。	
〃	27	G－7	磁器皿	口縁部～底部	口径(推定) 11.7 高台径(推定) 7.8 器高 2.2	釉ー明緑白 胎土ー灰白	型打製形の皿で口縁部は輪花を呈す。底部は蛇ノ目凹型高台を呈し、露胎となる。主文様は蛸唐草文で見込みには松竹梅文が描かれる。裏文様は唐草文が施される。	肥前系

図面番号	遺物番号	出土位置	器種	部位	法量(cm)	色調	形態・成形技法の特徴	備考
34	28	SE4 J－5	碗	口縁部 ＼ 底部	口径 11.9 底径 4.0 器高 6.3	釉－内－灰白・にぶい橙(釉ハギ) 外－灰白 胎土 灰白	高台はやや薄手で、体部は若干内湾したのち外方に伸びる。外面共灰色の釉がかかる。畳付は露胎。	
〃	29	SE4 H－7	鉢	口縁部 ＼ 底部	口径(推定) 12.0 底径(推定) 4.0 器高 5.1	外－淡黄・暗オリーブ・赤褐 内－赤褐・暗オリーブ・灰オリーブ・暗赤褐	薄手で器高に比べ口径が広い。内面及び体部外面には暗オリーブ釉がかかるが、そのほとんどは淡黄色に変色している。見込みは蛇目にかきとられるが他に比べ軸はせまい。高台は露胎。	二次的焼成の可能性有り
〃	30	SE4	碗	口縁部 ＼ 底部	口径 11.0 底径 4.2 器高 5.2	外－灰白 内－灰白	体部下半にはケズリ痕が残る。内面及び体部下半まで白土がぬられ、全体に透明釉が施される。見込みは蛇目に釉がかきとられる。	
〃	31	SE4	碗	胴部 ＼ 底部	底径 4.6	外－赤黒・灰赤・赤 内－赤黒・赤・灰赤	底部及び高台は部厚いが、体部は薄く内湾しながら伸びる。黒褐色の釉が全体にかかる。見込みは蛇目にかきとられる。畳付きは露胎。	
〃	32	SE4	碗	口縁部 ＼ 底部	口径 11.0 底径 3.6 器高 5.1	外－灰白・灰オリーブ・にぶい橙 内－灰白	高台は小さく体部はやや厚手で内湾しながら伸びる。内面及び体部下半まで白土がぬられ全体に透明釉が施される。見込みは蛇目に釉がかきとられる。畳付きは露胎。	
〃	33	SE4	碗	底部	底径 5.2	釉－黒 外－灰褐 内－灰褐 底－灰赤 胎土－赤灰	体部下半及び高台はていねいにけずられている。体部は下半から底立気味に伸びると考えられる。体部下半より上位に黒褐色の釉がかかり、それ以外は露胎。内底には砂が付着する。	焼成堅緻
〃	34	SE4	碗	底部	底径 4.4	外－灰白・灰・にぶい赤褐 内－灰白・褐	内面及び体部下半まで白土がぬられ上に透明釉を施す。体部下半の1部及び高台は露胎。見込みは蛇目に釉がかきとられる。	
〃	35	SE4	碗	底部	底径 4.8	外－黒褐・赤 内－黒褐・灰黄・オリーブ褐 赤褐・赤	高台は他に比べ低くていねいに面取りされている。内外面共薄い黒褐色の釉がかかる。見込みは蛇目に釉がかきとられる。高台は露胎。	
〃	36	SE4	碗	口縁部 ＼ 底部	口径 5.1 底径 3.2 器高 4.1	内－淡黄 外－淡黄 胎土 淡黄	高台は薄く短く直立し、ていねいに面取りされている。体部は内湾しながら伸びる。口唇に比べ器高が低い。内面及び体部下半に浅黄色の釉がかかる。全体に貫入がみられる。見込みに「寿」の文字が彫りこまれている。体部下半及び高台は露胎。	
〃	37	SE4	碗	底部	底径(推定) 4.45	内－灰黄褐 外－灰黄褐 底－灰白 胎土－褐灰	高台はていねいに面取りされ、台形状を呈する。見込みには二ヵ所の目跡あり、全体露胎。	
〃	38	SE4 I－6	盃	口縁部 ＼ 底部	口径 7.0 底径 3.3 器高 3.95	内－赤黒 外－赤黒 胎土－にぶい赤褐	小型の盃である。内外面に赤黒の釉がかかる。見込みは蛇目に釉がかきとられる。高台の1部、高台内は露胎。	焼成は堅緻
35	39	SE4	鉢	口縁部	——	内－浅黄 外－浅黄・明褐 胎土－浅黄橙	口縁部は玉縁を呈す。内外面に浅黄色の釉がかかる。	
〃	40	SE4 D 4	瓶	胴部 ＼ 底部	底径 5.8	内－灰白 外－灰白	薄い脚台を持ち、体部は内湾しながら上方に伸びる。内面にはロクロ目が強く残る。内外面共灰白色の釉がかかる。脚台は露胎、底部は糸切底。	胎土は磁器に近い
〃	41	SE4	茶入れ	胴部 ＼ 底部	底径 4.8	釉－外－灰白、内－浅黄 露胎－にぶい黄橙 胎土－褐灰	底部から内傾しながら上方に伸びる。体部内面には明瞭なロクロ痕を残す。底部は糸切底。外面に灰白色の釉が施され、内面及び底部は露胎。	胎土は磁器に近い

図面番号	遺物番号	出土位置	器種	部位	法量(cm)	色調	形態・成形技法の特徴	備考
35	42	SE4	碗	胴部～底部	底径 6.2	内ーオリーブ黒 外ー黒 胎土ー灰	底部は厚手で脚台を呈し糸切底である。内面に明瞭なロクロ痕を残す。黒褐色の釉が内外面共にかかり、脚台部のみ露胎。	
〃	43	SE4	花器	頸部		内 オリーブ黒 外 黒 胎土ー灰	内面に明瞭なロクロ痕を残す。内外面共黒褐色の釉がかかる。	42と同一個体か
〃	44	SE4	花器	底部	——	釉外ー灰白、内ー灰白 無釉ー灰白 胎土ー灰白	上底の底部で面取りされている。内外面とも白色釉がかかり、貫入がみられる。	
〃	45	SE2	碗	底部	底径(推定) 4.7	内ーオリーブ黒(施黒) にぶい赤褐 外ーオリーブ黒	内外面とも暗赤褐色釉がかかるが、畳付は露胎、見込みは蛇目に釉がかきとられる。	
〃	46	SK4	盌	口縁部～底部	——	内ー黒・黒褐 外ー黒 胎土ーにぶい赤褐	小型の碗であるが、底部は厚く高台も高い。口縁は短く直立気味に立つ。内・外面とも黒褐色の釉がかかる。見込みは蛇目に釉がかきとられる。高台は露胎。	
〃	47	SE4	碗	底部	底径(推定) 4.8	内ーオリーブ黒 灰赤 外ーオリーブ黒	内外面とも暗赤褐色釉がかかる。畳付きは面取りされ露胎となる。見込みも蛇目に釉がかきとられる。	
〃	48	SE6	碗	口縁部～底部	口径 9.6 底径 3.6 器高 5.0	内ーオリーブ褐橙(釉ハゲ) 灰白(中心) 外ーにぶい褐・黄褐 胎土ー橙	やや小型の碗で若干厚手である。暗褐色の釉がかかり、高台は露胎。見込みは蛇目に釉がかきとられる。	胎土に白い粒子を含まない
〃	49	D-4 E-4	碗	口縁部～底部	口径 11.2 底径 3.5 器高 5.7	内ー灰褐 外ー灰褐 胎土ー橙	薄手で口縁端部が若干外反する。高台はていねいに面取りされている。内外面に灰褐色の釉がかかる。高台内外共露胎。	焼成は堅緻
〃	50	D-4 E 4	碗	口縁部～胴部	口径 11.6	内 浅黄・褐(光沢部分) 外ー浅黄・褐(光沢部分) 胎土ー橙	薄手で口縁端部が若干外反する。暗褐色の釉が全体に薄くかかる見込みは蛇目に釉がかきとられる。	胎土に白い粒子を含まない
〃	51	K-4 D-4	碗	口縁部～底部	口径 11.6 底径 3.9 器高 5.7	内 黒褐 外ー黒褐 胎土ー橙	薄手で体部下半にケズリ痕がみられる。体部と内面には茶褐色の釉がかかる。見込みは蛇目に釉をかきとる。高台1部と高台外縁及び高台内は露胎。	焼成は堅緻
〃	52	D 4	碗	口縁部～底部	口径 11.4 底径 3.4 器高 5.65	内ー黒・暗赤灰 外ー黒 胎土ー灰赤	薄手で器高に比べ口径が広い。体部下半にケズリ痕がみられる。内外面共黒褐色の釉がかかる。見込みは蛇目にかきとられる。目跡が残る。高台は露胎だが1部に釉が垂れる。	
〃	53	D-4 G-6	碗	口縁部～底部	口径 10.9 底径 4.0 器高 6.25	内ー灰白・灰オリーブ(一部) 外ー灰白・にぶい黄橙 胎土 橙	内面及び体部下半まで化土がぬられ、全体に透明釉を施す。口縁直下には化土がかきとられ素地の灰茶褐色が線状になってみられる。内面は白濁釉で見込みは蛇目にかきとられる。畳付き及び高台内は露胎。	
〃	54	D-4	碗	口縁部～底部	口径 11.9 底径 4.0 器高 6.95	内ー黒、外ー黒 高台 暗灰黄 胎土 赤褐(底部)、赤灰(D線)	高い高台を有し高台内はマントウ心を呈す。内外面は黒褐色の釉がかかる。見込みは蛇ノ目にかきとる。畳付きは露胎。	
〃	55	H-7	碗	底部	底径 4.8	釉ーにぶい黄褐 外 浅黄 内ー浅黄橙 底ー灰白	内外面共ていねいななで調整がおこなわれる。体部上半には茶褐色の釉がかかると思われる。現存部分は大部分が露胎。	

図面番号	遺物番号	出土位置	器種	部位	法量(cm)	色調	形態・成形技法の特徴	備考
35	56	G－7	碗	口縁部 ＼ 底部	口径(推定) 8.4 底径(推定) 4.2 器高 5.6	釉－灰オリーブ・オリーブ黒 灰白・オリーブ黒	筒形を呈する厚手の碗、内外面共厚味のあるオリーブ黒の釉がかかる。畳付のみ露胎。	
〃	57		碗	口縁部 ＼ 底部	口径 9.0 底径 2.3 器高 5.3	内－灰白 外－灰白 胎土－灰白	体部は中位からほぼ垂直に立ち上がる。	
〃	58	G－7	碗	口縁部 ＼ 底部	口径(推定) 9.6 底径(推定) 3.3 器高 4.9	内－灰白 外－灰・オリーブ・オリーブ黒 胎土－にぶい黄橙	筒形を呈し直立する。胎土は磁器にちかい。内面と体部下半及び高台は露胎。	61と同一個体
〃	59	G－7	碗	胴部 ＼ 底部	口径 9.6 底径(推定) 4.0 器高 4.9	釉－灰白・灰オリーブ 内－にぶい黄褐 外－にぶい黄褐 胎土－灰白	緩やな体部はほぼ中央でくびれ、口縁は直立する。内外面共暗灰白色の釉がかかる。高台は露胎。	
〃	60	D－4	碗	口縁部 ＼ 底部	口径 8.8 底径 4.4 器高 約5.1	内－黒 外－黒 底－黄灰 高台－にぶい赤褐 胎土 オリーブ黒	筒形の碗で黒色の釉が全体にかかる。畳付きは露胎。	
〃	61	D－4	香炉	口縁部 ＼ 胴部	口径(推定) 9.1	釉－灰白・灰オリーブ 内－灰黄褐 外－にぶい黄褐 胎土－黄灰	筒形を呈し直立する。口縁上端はやや内傾し内へ若干張り出す。口縁上端から体部下半までオリーブ灰色の釉がかかる。内面は露胎。胎土は磁器に近い。底部は高台と考えられる。	58と同一個体
〃	62		鉢	口縁部	——	内－灰白・グリーン 外－グリーン 胎土 灰褐	内湾しながら開く鉢で小さな玉縁状の口縁をなす。外面は銅緑色の釉がかかり、1部に暗い紫色の釉が縞状に入る。内面は灰白の釉がかかる。	
〃	63	K－6 L－6	鉢	口縁部	——	釉－淡黄 胎土－灰白	口縁部はほぼ直に立ち上り、明瞭な受け部を有す。受け部のみ露胎で、他は淡黄色の釉がかかる。	水指？
〃	64	D 5	花器	底部	底径 4.0	釉－オリーブ褐 無釉－灰白 胎土－灰白	底部は上底状をなし、全体にていねいなロクロ痕がみられる。外面には、部分的に暗茶褐色の釉がかかる。	
〃	65		瓶	口縁部	口径 7.0	内－黒褐 外－黒褐 胎土－灰黄	口縁部はしまりのある頸部から外方に大きく広がる。内・外面にロクロ目が残る。全体に暗い青緑釉がかかる。	
〃	66	K－7	花器	口縁部 ＼ 底部	口径 4.2 底径 5.3 器高 9.0	内－オリーブ黒 外－黒 胎土－灰（口縁）、暗赤褐（底部）	筒形を呈しやや内傾する。口縁部は内側に屈曲する。底部は露胎で糸切り底を呈す。内外面に暗赤褐色釉がかかる。	
36	67		壺	胴部	——	内－黒褐 外－黒褐・暗赤褐 胎土－にぶい赤褐	白土による象嵌を行ったものである。内外面には暗赤褐色釉が施される。	
〃	68	D－4 D－5 C－4	壺	胴部	——	内－黒褐 外－黒褐・暗赤褐 胎土－にぶい赤褐	白土による象嵌を行ったものである。 内外面には暗赤褐色釉が施される。	
〃	69		壺	胴部		内－黒褐 外－黒褐・暗赤褐 胎土－にぶい赤褐	白土による象嵌を行ったものである。 内外面には暗赤褐色釉が施される。	

図版番号	遺物番号	出土位置	器種	部位	法量(cm)	色調	形態・成形技法の特徴	備考
36	70		甕	胴部	----	内 黒褐 外一黒褐・暗赤褐 胎土一にぶい赤褐	白土による象嵌を行ったものである。 内外面には暗赤褐色釉が施される。	
〃	71	D－4	燭台	底部	口縁径 9.2 底径 5.3	内一暗赤褐・にぶい黄褐 外一灰黄褐（口縁）・橙（底） 胎土一橙	皿状の土台に円筒状のものが付くと考えられる。底部は糸切底、 内面にはにぶい黄褐の釉がかかる。外面は露胎。	
〃	72	G－7	瓶	胴部		内一灰緑 外一灰緑 胎土一にぶい黄橙	内外面に銅緑釉がかかる。胎土はにぶい黄橙色を呈す。	
〃	73	J－5 J－6	茶家	蓋	径 4.7 底径 7.0 器高 3.15	釉一褐 無釉一赤褐 胎土一赤褐	小型の蓋でなだらかに口縁部にいたる。 上面のみ茶褐色の釉を施す。つまみ径1.6cm。	
〃	74	SE4	茶家	蓋	径 6.3 底径 9.0 器高 3.3	釉 オリーブ黒 無釉一オリーブ褐 胎土一褐灰	口縁部を貼り付けて底をつくり出している。口縁部手前で段を有す。上面のみ黒褐色の釉を施す。内面に重ね焼きの跡が残る。つまみ径1.4cm。	焼成は良好
〃	75	G－7	茶家	蓋	径 7.8 底径 10.1 器高 4.1	釉 オリーブ黒 無釉一にぶい褐・明赤褐 胎土一褐灰	平坦な天井部からなだらかに下り口縁部にいたる。 上面のみ暗茶褐色。	
〃	76		茶家	蓋	径 11.4 底径 14.5	内一灰赤 外一黒褐・灰赤	大型の蓋で口縁部手前で2段の沈線を有す。 上面のみ茶褐色の釉を施す。つまみ径1.3cm。	
〃	77	SE4 G－7	茶家	身	口径 9.5 底径 7.8 器高 9.0	釉一外一灰オリーブ 内一灰オリーブ 底部一にぶい赤褐 胎土一褐灰	口縁部は内部気味に立ち上がる。胴部は隆帯状を呈し、胴部最大径のところに注口部を貼りつける。注口部は曲線状をなす。底部は上底であるが三足はつかない。注口上部とその対面に取手がつけられる。内面及び外面胴部中位まで茶褐色の釉を施す。	胴部下半にスス付着
〃	78	G－7 H－7	茶家	身	口径 9.2 器高 9.5	内 釉一褐灰・灰褐 無釉一にぶい赤褐 外一釉一オリーブ黒・オリーブ黄 無釉一にぶい赤褐・暗赤灰	77と同様な形態と考えられる。外面は胴部上半には浅いカキ目がみられる。胴部内面にはロクロ目が強く残る。外面胴部下半は露胎。	胴部下半にスス付着
〃	79	D－4	茶家	胴部		釉一内一黒褐 外 外灰オリーブ 無釉一にぶい赤褐 胎土一にぶい橙	底部に3足をもつもので、底部はヘラケズリが施される。 底部及び胴部下半のみ露胎、それ以外は茶褐色の釉がみられる。	
〃	80	G－7	茶家	口縁 ↓ 胴部	口径 8.0	内一暗オリーブ 外一オリーブ灰	口縁部はやや上方に立ち上がる。胴部には浅いカキ目がみられ「○」の印がスタンプされている。内外面とも茶褐色の釉を施す。	
〃	81	SE4	すり鉢	口縁部		内一釉一灰黄褐 無釉 にぶい赤褐 外 灰黄褐・黒褐 胎土一灰褐・にぶい橙	口縁部は「く」の字状を呈し、口縁直下に2条の三角突帯がめぐる。内面には5条単位の櫛目状溝が施される。口縁部上部のみ露胎で、それ以外には暗茶褐色の釉を施す。	
〃	82	SE4 D－4	すり鉢	口縁部	——	釉一内一にぶい赤褐・明赤褐 外一オリーブ黒 無釉一	口縁部は「く」の字状を呈し、口縁直下に一条の三角突帯がめぐる。口縁部上部には、貝目跡が残る。内面は5条単位の櫛目状溝が施される。口縁部上部のみ露胎で、それ以外には暗茶褐色の釉を施す。	
〃	83	G－7	すり鉢	口縁部	——	内一釉 灰黄褐 無釉一灰 外 灰黄褐 胎土一赤褐	口縁部は短く外反し、丸味をおびる。外面にはカキ目がみられ、内面には7条単位の櫛目状溝が左回りに施される。口縁部上部のみ露胎で、それ以外には茶褐色の釉を施す。	

図面番号	遺物番号	出土位置	器種	部位	法量(cm)	色調	形態・成形技法の特徴	備考
36	84	J－5 J－6	すり鉢	口縁部		内－にぶい赤褐 外－にぶい赤褐 胎土－灰黄	玉縁状の口縁を呈す。内面には口縁下約2.5cmのところから全体に櫛目状溝が施される。	近代のものの可能性あり
37	85	SE4 H－7	壺 鉢	口縁部	口 径(推定) 31.0	釉－オリーブ黒 無釉－にぶい赤褐	口縁部は「く」の字状を呈し、端部は丸い。口径直下に2条の低い突帯を有す。口縁部上面が露胎で、それ以外は茶褐色の釉を施す。	
＊	86	SE4	すり鉢	口縁部 ＼ 底 部	口 径 23.9 底 径 9.8 器 高 11.2	内－黒褐・暗赤褐（無釉） 外－黒褐・灰オリーブ・暗赤褐 胎土－褐灰	片口の揺鉢で、逆「L」字状の薄い口縁部を有す。外底には浅いカキ目がみられる。内面には4条単位の櫛目状溝が左回りに施される。口縁部上面には重ね焼き目跡が残る。口縁部上面のみ露胎で、それ以外には暗茶褐色の釉を施す。	
＊	87	I－5 I－6	すり鉢	口縁部 ＼ 底 部	口 径 22.8 底 径 約9.5 器 高 12.8	内 釉－暗オリーブ褐・褐 無釉－にぶい赤褐 外－暗オリーブ褐・オリーブ黒・黄褐 ・にぶい赤褐 胎土－明赤褐	片口の揺鉢で、口縁部は逆「L」字状を呈す。胴部はやや内湾しながら立ちあがる。底部は上底気味。内面には3条単位の櫛目状溝を左回りで全体に施す。口縁部内面以外は、暗茶褐色の釉が厚くかかる。	
＊	88	K－6 K－7	揺 鉢	口縁部 ＼ 底 部	口 径 23.4 底 径 10.0 器 高 16.8	釉－外－オリーブ 内 暗オリーブ 無釉－赤褐 胎土－明赤褐	片口の揺鉢で、口縁部は逆「L」字状を呈する。胴部はやや内湾しながら立ちあがる。底部は平底。内面には、6条単位の櫛目状溝を左回りで全体に施す。口縁部平坦面と底部は露胎で、それ以外は茶褐色の釉が施される。	
38	89	SE4	壺	口縁部 ＼ 肩 部	口 径 33.9	釉－内－暗灰黄 外－黒褐 無釉－暗赤褐 胎土－明赤褐	やや肩が張り、頸部は直立気味にのび、口縁部は内側に折り返すことによって平坦面をつくっている。肩部には2条の三角突帯がつく。口縁部の平坦面は露胎で共日跡が残る。外面に暗緑色の釉を施すが白けている内面は灰白粒がまじる茶褐色の釉がかかる。	
＊	90	SE4	壺	口縁部 ＼ 胴 部	口 径 27.6	釉－内 黒褐 外 黒褐 無釉－にぶい赤褐 胎土－にぶい赤褐	やや肩が張り、頸部は直立気味にのびる。口縁部は外面に台形状突帯、内面に小さい三角突帯を貼りつけ平坦面をつくっている。肩部には2条の三角突帯がめぐる。口縁部の平坦面に露胎で、重ね焼の跡が残る。暗茶褐色の釉を施す。	
＊	91	K－6	壺	胴 部	——	釉－内－オリーブ黒 外－黒褐・灰 胎土－灰褐	胴部上位に2条の突帯をめぐらす。上は三角突帯で、下は刻み目突帯である。上方の割れ口部からすぐ口縁になると思われる、暗緑色の釉を施す。	
＊	92	SE4	壺	胴 部	——	釉－内－黒褐 外－黒褐 胎土－黒褐	胴部上位に2条の突帯をめぐる。上は二角突帯で下は綾縄突帯である。内外面にていねいなロクロ成形痕がみられる。茶褐色釉を施す。	
＊	93	SE4	鉢	口縁部	—	釉－内－黒褐 外－黒褐 無釉－暗赤褐 胎土－にぶい赤褐	口縁部に台形状の突帯を貼りつけている。口縁部の平坦面は露胎で、それ以外は茶褐色の釉がかかる。	
＊	94	SE4 SE6	鉢	胴 部 ＼ 底 部	底 径 14.8	釉－内－暗褐の上に紫黄発色 外－黄灰・オリーブ灰・オリーブ黄 胎土－褐灰	胴部はやや外傾しながら開く、底部にはワラ圧痕や重ね焼の目跡が、外面は暗緑色釉、内面は灰白色、桜に多く変化した茶褐色釉がかかる。	
＊	95	SA1	鉢	胴 部 ＼ 底 部	底 径 19.2	釉－内－黒褐 外－黒褐 無釉－にぶい赤褐 胎土－にぶい赤褐	胴部はやや内湾しながら立ちあがる。底部は上底。 全体に茶褐色の釉がかかる。	
＊	96	J－5 J－6	鉢	口縁部 ＼ 胴 部	口 径 13.8	釉－内－黒褐 外－黒褐 無釉－内－にぶい赤褐 胎土－赤	口縁部は短く「く」の字状を呈し、丸くおさめられている。口縁直下には低い突帯が2条めぐる。外面に浅いカキ目がみられる。茶褐色を施す。口縁部上面はかきとられる。	
＊	97	G－7 D 4	瓶	胴 部 ＼ 底 部	底 径 7.8	釉－外－黒褐・暗赤褐 無釉－内－灰 胎土－灰黄	最大径は胴中央部に有す。底部はやや上底である。外面にはカキ目みられる。内面は露胎で、外面には茶褐色の釉がかかる。	

図版番号	遺物番号	出土位置	器種	部位	法量(cm)	色調	形態・成形技法の特徴	備考
33	98	SK6	片口鉢	口縁部 ↓ そそぎ口 胴部	――	釉―内 オリーブ黒 外―オリーブ黒 口縁―褐 胎土 灰	口縁部は「く」の字形を呈し、丸くおさめられている。片口は高い。胴部は張らずに内湾しながら開く。口縁部上部は露胎で窯わ焼きの目跡が残る。それ以外は暗茶褐の釉がかかる。	
38	99	SK4	鉢	口縁部 ↓ 底部	口径 27.4 底径 17.6 器高 15.7	釉―内―灰オリーブ 外―オリーブ黒・オリーブ灰 胎土―明赤褐	口縁部は外面に台形状、内面に小さな三角突帯を貼り付け、平担面をつくっている。胴部は内湾しながら開く。底部は上底。底部内面にはかき目がみられる。	
〃	100	SK4	鉢	口縁部 ↓ 底部	口径(推定) 15.2 底径 16.0 器高 15.6	釉 内 灰オリーブ 外―褐 底―赤褐 胎土―赤褐	口縁部は逆「L」字状をなし、胴部はやや内湾しながら外へ開く底部は上底である。胴部上半に耳がつく。口縁部平担面と底部は露胎で貝目跡がみられる。それ以外は薄く茶褐色の釉が施される	
〃	101	SE4	鉢	口縁部 ↓ 底部	口径 29.4 底径 22.2 器高 9.7	釉 内―黒褐 外―黒褐 輪積―褐 胎土―灰	底部は上底で、胴部はやや内湾しながらのびる。口縁部は直口し口縁端部は内傾し少し内側へ張り出す。口縁下に2本の沈線がめぐる。口縁端部は露胎でそれ以外は暗緑色釉がかかる。	

土器観察表（須恵器甕）

図面番号	遺物番号	出土位置	器種	器形	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	調整 内面	調整 外面	備考
25	1		須恵器甕	口縁部	灰黄	灰黄	白・茶の石粒を含む	良好	よこナデ	よこナデ、2条の突帯沈線の波形文よこの平行線又タタキ	
〃	2	D－4	〃	口縁部	褐灰	褐灰	黒の細砂粒と4mm程の石粒を含む	良好	よこナデ	よこナデ	
〃	3	E－4	〃	頸部	褐灰	褐灰	2～2.5mm程の褐色の粒、黒の細砂粒を含む	良好	よこナデ	よこナデ	
〃	4	SE3	〃	胴部	灰黄 黄褐(一部)	黄褐	白色の細砂粒を多く含む	良好	同心円タタキ	タタキ	
〃	5		〃	口縁部	灰褐	褐灰	精良	良好	よこナデ	よこナデ ヘラ状のもので波形文	
〃	6	K 7	〃	胴部	灰	灰	黒・白色の細砂粒を多く含む	良好	同心円タタキ	格子目タタキ	I類
〃	7	L 7	〃	胴部	褐灰	褐灰	白・黄色の細砂粒を含む	良好	同心円タタキ	格子目タタキ	I類
〃	8		〃	胴部	灰	灰	白・黒等の細砂粒を含む	良好	同心円タタキ	格子目タタキ	I類
〃	9	J－5	〃	胴部	灰	灰	黄・黒・白色の細砂粒も含む	良好	同心円タタキ	格子目タタキ	I類
〃	10	D 4	〃	胴部	灰オリーブ	灰	白・黒等の細砂粒を含む	良好	同心円タタキ	格子目タタキ	I類
〃	11	D－4	〃	胴部	灰オリーブ	灰	白・黒等の細砂粒を含む	良好	同心円タタキ	格子目タタキ	I類
〃	12	G－7	〃	胴部	灰オリーブ	灰	白・黒等の細砂粒を含む	良好	同心円タタキ	格子目タタキ	I類
〃	13		〃	胴部	灰	灰白	白の細砂粒を含む	良好	格子目文叩きの後ナデ 同心円叩きの後ナデ	格子目タタキ	I類

図面番号	遺物番号	出土位置	器種	器形	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	調整 内面	調整 外面	備考
25	14	D－4 D－5 L－6	須恵器 甕	胴部	灰	灰 褐灰	白・黒等の細砂粒を含む	良好	格子目叩きの後同心円文叩き	格子目タタキ	I類
〃	15	G－7	〃	胴部	灰	灰	白・黒等の細砂粒を含む	良好	タタキの後をナデ	格子目タタキ	I類
〃	16	I－6	〃	胴部	灰	灰	白・黒等の細砂粒を含む	良好	平行線タタキ調整時のくぼみ	格子目タタキ	I類
〃	17	K－5 K－6	〃	胴部	灰	褐灰	1mm程度の白の砂粒、0.5mm程度の透明で光る砂粒、黒の細砂粒を含む	良好	格子目タタキ	格子目タタキ	I類
〃	18	G－7	〃	胴部	灰オリーブ	灰	白・黒等の細砂粒を含む	良好	格子目タタキ	格子目タタキ	I類
〃	19		〃	胴部	灰	灰	白・黒等の細砂粒を含む	良好	格子目タタキ	格子目タタキ	I類
〃	20	SE2	〃	胴部	灰白	灰白	透明で光る細砂粒、黒で光る細砂粒、白の細砂粒を含む	良好	平行タタキ	格子目タタキ	I類
〃	21	J－6	〃	胴部	灰	灰	白・黒等の細砂粒を多く含む	良好	格子目タタキ	格子目タタキ	I類
26	22	I－6 J－5 J－6	〃	胴部	褐	灰	1mm程の肌色・茶等の砂粒を多く含む	良好	同心円タタキの上を平行線タタキ	格子目タタキ	II類
〃	23	I－6 K－6	〃	胴部	灰黄褐	灰黄褐	細砂粒を多く含む	良好	同心円タタキ	格子目タタキ	II類
〃	24		〃	胴部	にぶい黄橙	灰白	白・黒の砂粒を含む	良好	平行線タタキの後車輪状放射線タタキ	平行線タタキ	II類
〃	25	I－6 J－5	〃	胴部	にぶい褐	灰	白い砂粒を含む	良好	平行線と同心円が重なる。平行線タタキ	格子目タタキ	II類
〃	26	I－6 J－5	〃	胴部	灰褐	にぶい赤褐	白い粒を含む	良好	平行線タタキ	格子目タタキ	II類
〃	27	K－6	〃	胴部	灰黄褐	にぶい褐	灰・茶等の細砂粒を多く含む	良好	同心円タタキの上を平行線タタキ	格子目タタキ	II類

図面番号	遺物番号	出土位置	器種	器形	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	整 内面	整 外面	備考
26	28	L－7	須恵器甕	胴部	灰褐	にぶい褐	灰・茶等の粗砂粒を含む	良好	平行線タタキ	格子目タタキ	Ⅱ類
〃	29	SE3	〃	胴部	灰褐	黄褐	白色の細砂粒を多く含む	良好	同心円タタキ	平行タタキ	Ⅱ類
〃	30	I－6 J－6 L－6	〃	胴部	褐	にぶい褐	灰・茶等の細砂粒を含む	良好	同心円タタキの上を平行タタキ 平行タタキ	格子目タタキ	Ⅱ類
〃	31	J 5	〃	胴部	にぶい褐	灰黄褐	灰茶等の細砂粒を多く含む	良好	同心円タタキ	格子目タタキ	Ⅱ類
〃	32	K－6	〃	胴部	にぶい褐	褐灰	灰茶等の細砂粒を多く含む	良好	同心円タタキ	格子目タタキ	Ⅱ類
〃	33	K 6	〃	頸部	にぶい赤褐	明褐灰	黒と白の細砂粒を含む	良好	よこナデ	よこナデ	Ⅱ類
〃	34		〃	胴部	にぶい褐	黄灰	灰茶等の砂粒を含む	良好	平行線タタキ	格子目タタキ	Ⅱ類
〃	35		〃	胴部	にぶい褐	褐灰	灰茶等の細砂粒を含む	良好	平行線タタキ	格子目タタキ	Ⅱ類
27	36	I 6	〃	胴部	灰	灰	白・黒の砂粒を含む	良好	平行条線タタキ（タテ、ヨコに切りあっている）	平行条線タタキ	Ⅲ類
〃	37	G－7	〃	胴部	黄灰	灰白	白・うす茶・光る粒を含む	良好	同心円タタキ	格子目タタキ	Ⅳ類
〃	38		〃	底部	にぶい褐	にぶい褐	2mm以下の灰・茶・白等の砂粒を含む	良好	工具によるナデ↑	格子目タタキ	Ⅴ類
〃	39	SE3	〃	底部	灰オリーブ	淡黄	細砂粒を多く含む	良好	平行線タタキが不定に施される	風化	Ⅴ類
〃	40	I－6	〃	底部	にぶい黄橙	淡黄	2mm以下の灰・茶・白等の砂粒を多く含む	良好	タタキ 粗いナデ	格子目タタキ	Ⅴ類
〃	41		〃	胴部	にぶい黄橙	浅黄橙	2mm以下の灰茶等の砂粒を含む	良好	車輪状タタキ	格子目タタキ 平行タタキ	Ⅴ類

図面番号	遺物番号	出土位置	器種	器形	色調		胎土	焼成	調整		備考
					内面	外面			内面	外面	
27	42	K－5	須恵器 甕	頸部	褐灰	浅黄橙	細砂粒を含む	良好	同心円タタキ	擬格子目タタキ	Ⅵ類
〃	43	G－7	〃	胴部	灰オリーブ	灰	細砂粒を含む	良好	平行線タタキ	格子目タタキ	Ⅵ類
〃	44	E－4	〃	底部	褐灰	灰黄褐	黒・白・褐色の細砂粒を含む	良好	ナデ ヨコナデ	タタキ	
〃	45	D－4 E－4	〃	底部	褐灰 明黄褐	にぶい黄褐 橙 灰赤	黒と褐色（2mm以下）の砂粒と極く細かい白の砂粒を含む	良好	タタキ（タタキの上をナデ消し） よこナデ	格子目タタキ	

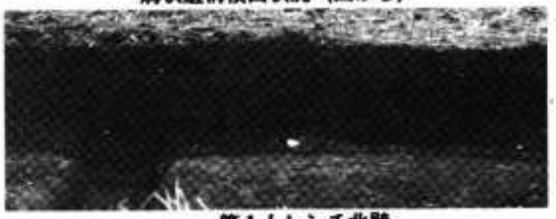
図版一

掘立柱建物検出状況（東から）

凹地検出状況

溝状遺構検出状況（西から）

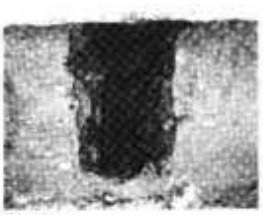
ＳＥ４集積状況



第１トレンチ北壁

ＳＥ３・ＳＥ17

ＳＥ４



柱穴の埋土の状況

検出状況（東から）

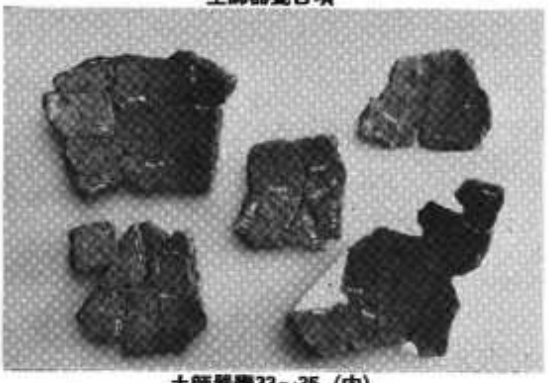
弥生住居跡（北から）

図版三

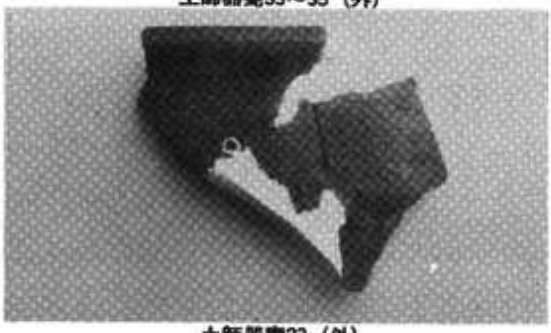
土師器甕A項

土師器甕B項

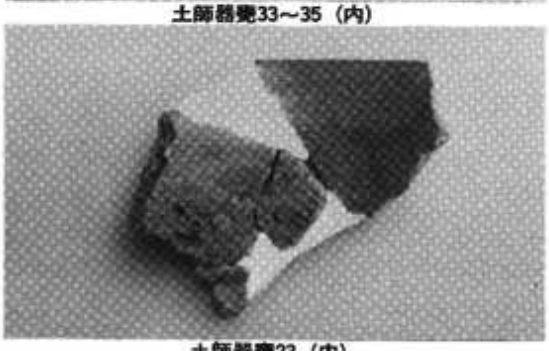
土師器甕33～35（外）



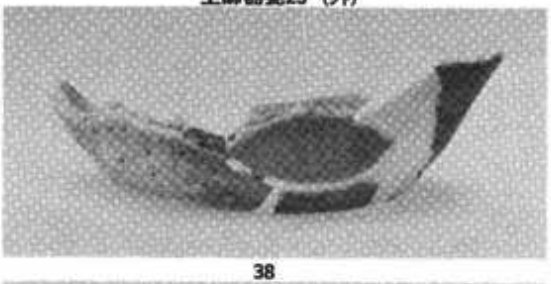
土師器甕33～35（内）



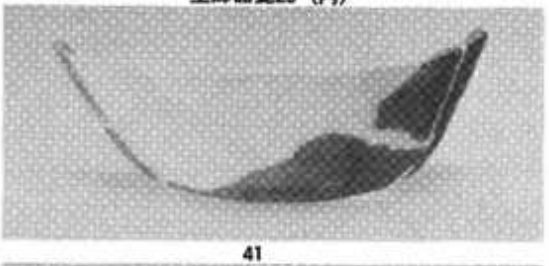
土師器甕23（外）



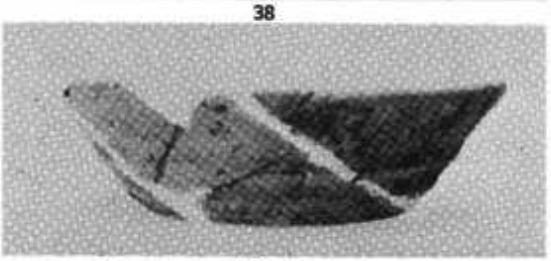
土師器甕23（内）



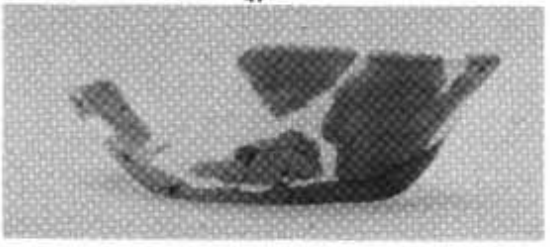
38



41

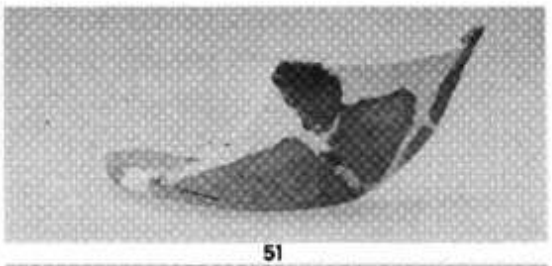


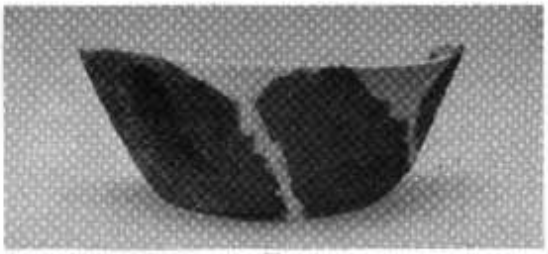
48

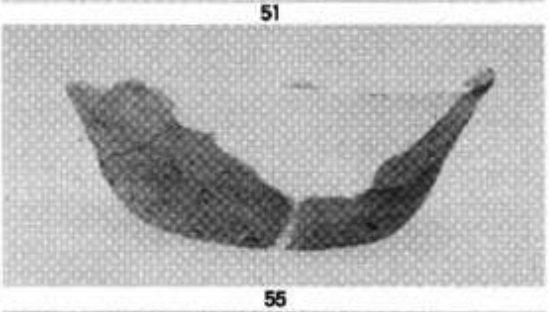


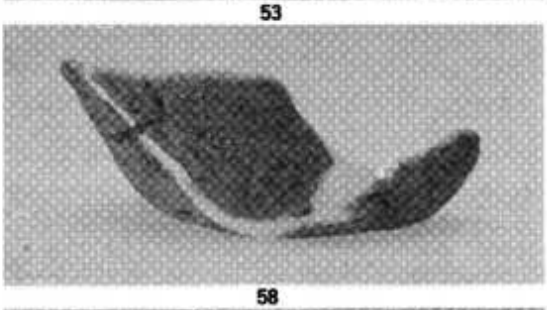
49

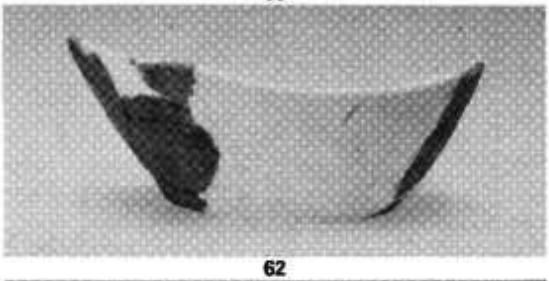
土師器（甕・坏）

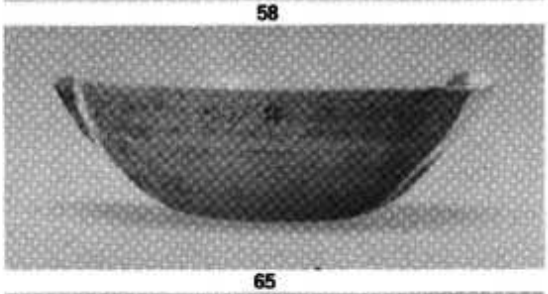

51

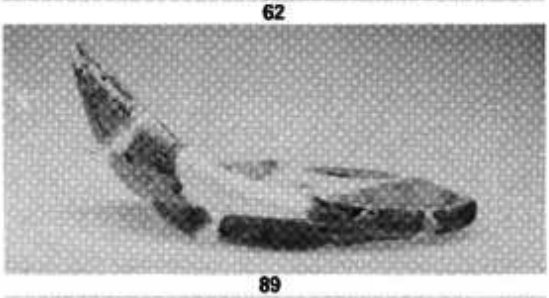

53

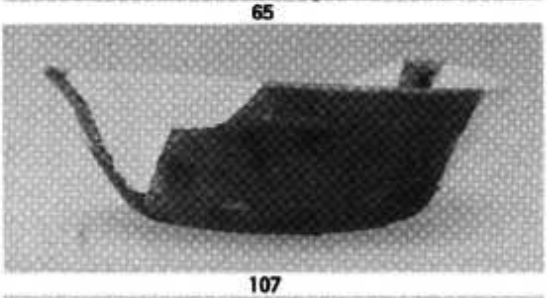

55

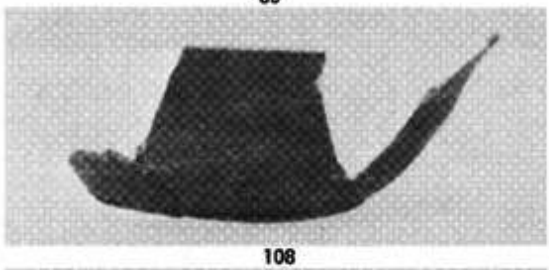

58

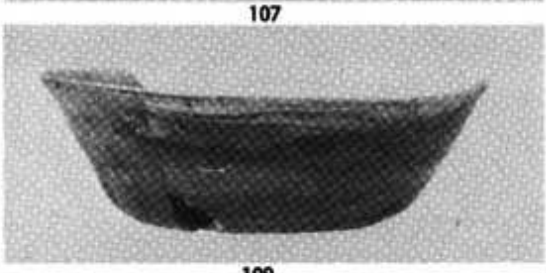

62

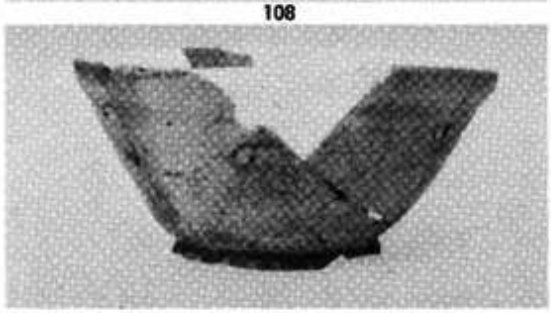

65

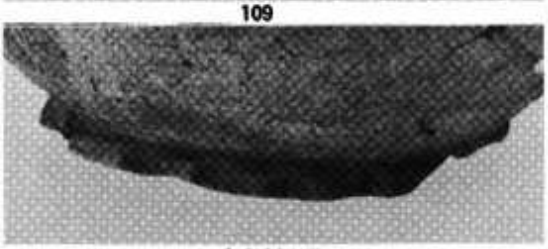

89


107

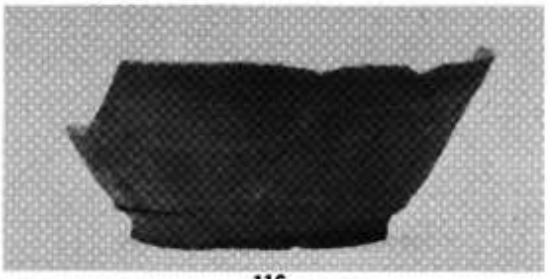

108


109

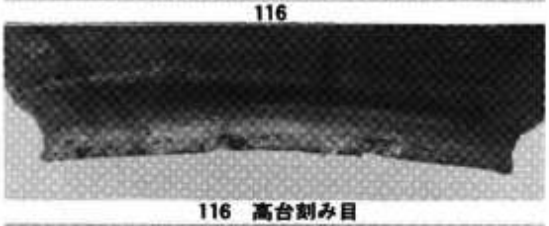

114


114　高台刻み目

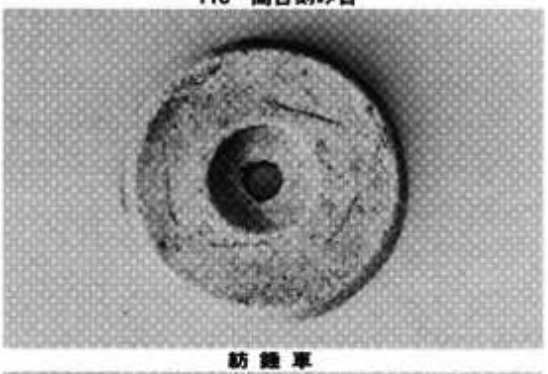
土師器（坏・高台付埦・須恵質）



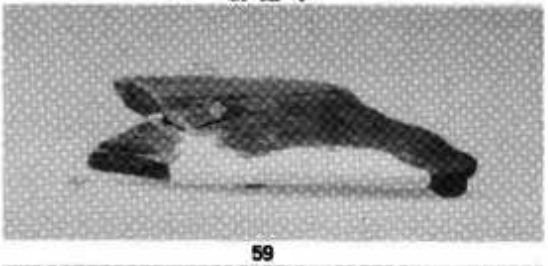
116



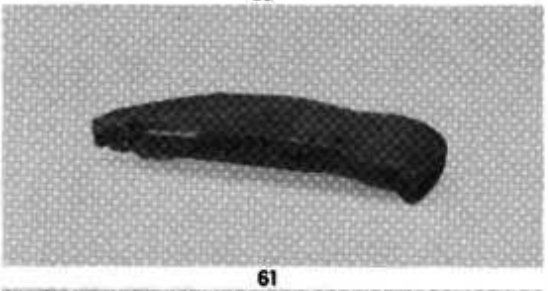
116　高台刻み目



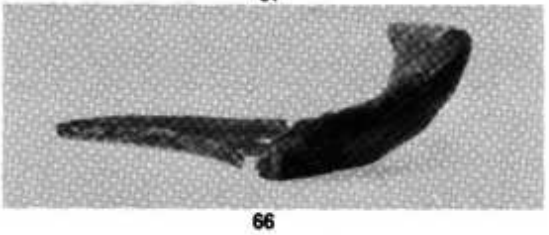
紡錘車



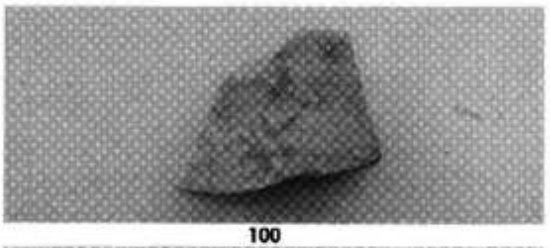
59



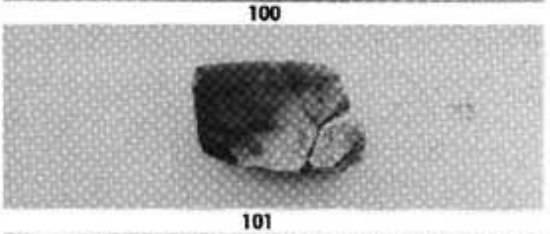
61



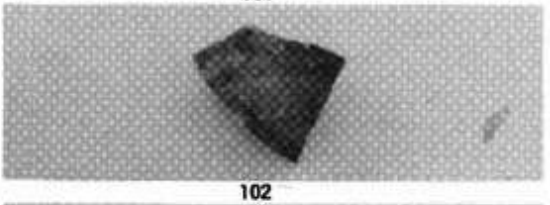
66



100

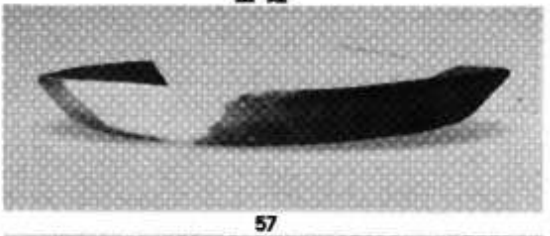


101

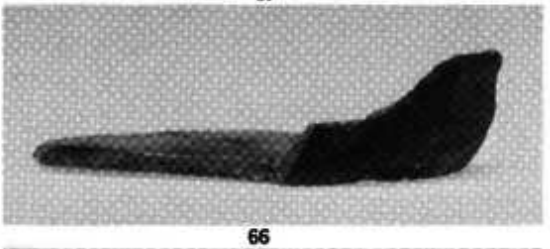


102

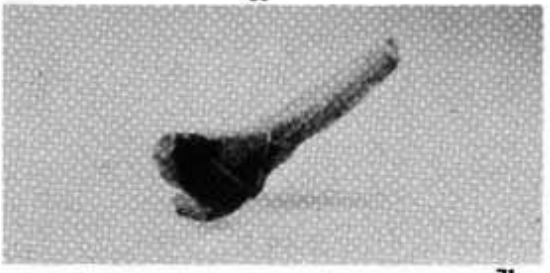
土錘



57



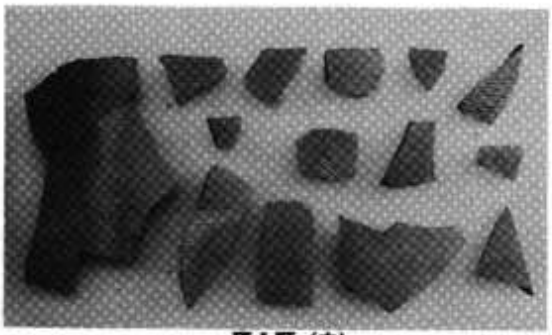
66



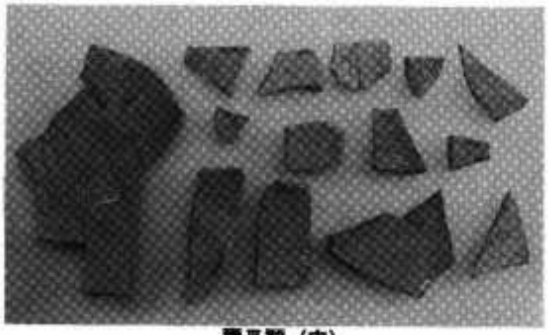
71

須恵質土師器・墨書土器・紡錘車・土錘・須恵器・土師質土器

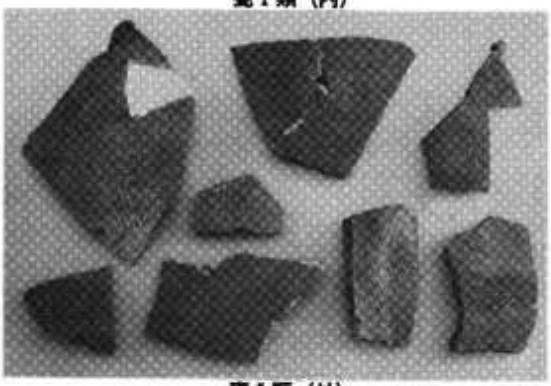
図版六



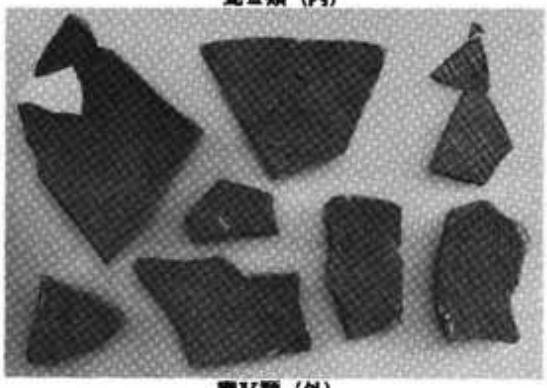
甕Ⅰ類（内）



甕Ⅲ類（内）



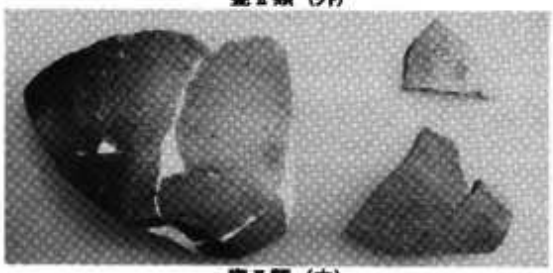
甕Ⅰ類（外）



甕Ⅳ類（外）

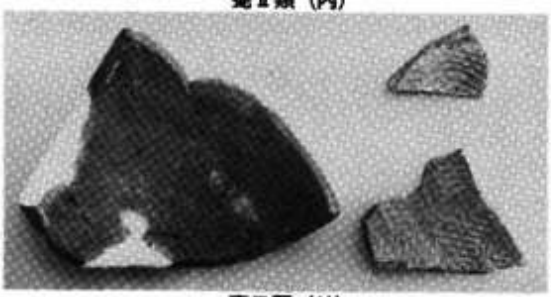
甕Ⅱ類（外）

甕Ⅳ類（内）



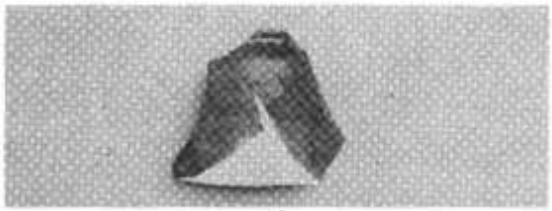
甕Ⅱ類（内）

布痕土器



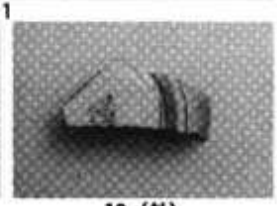
甕Ⅲ類（外）

須恵器甕・布痕土器

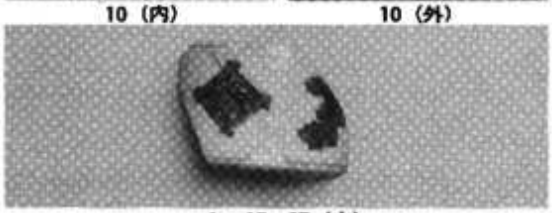


1

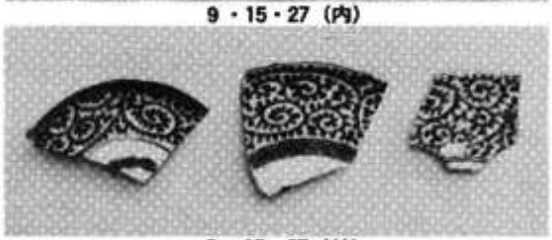
10（内）



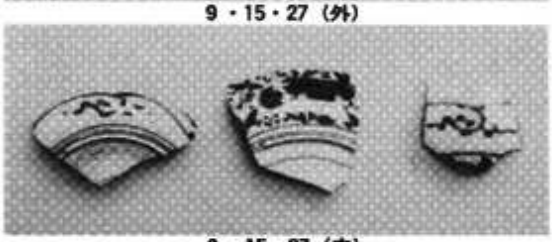
10（外）



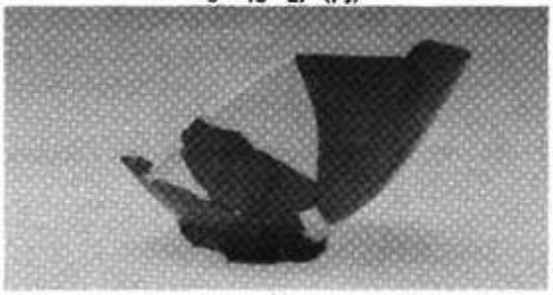
9・15・27（内）



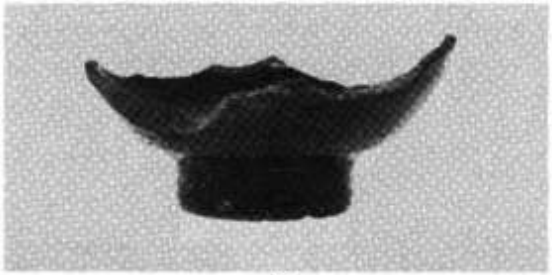
9・15・27（外）



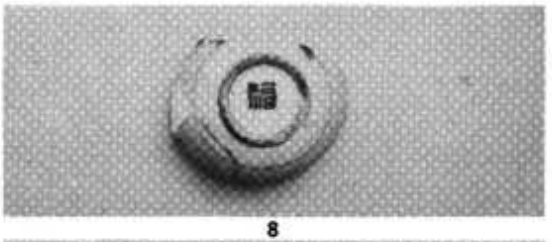
9・15・27（内）



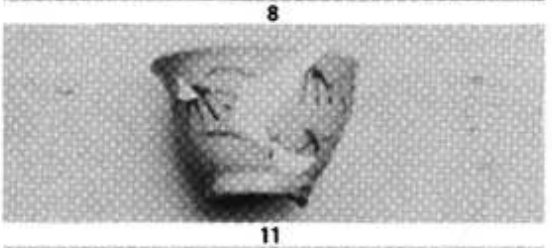
28



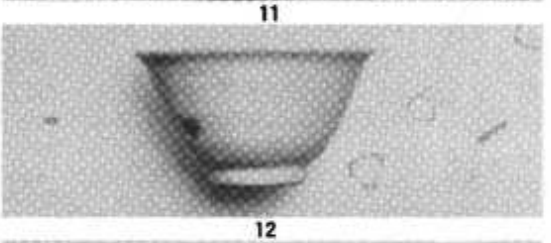
31



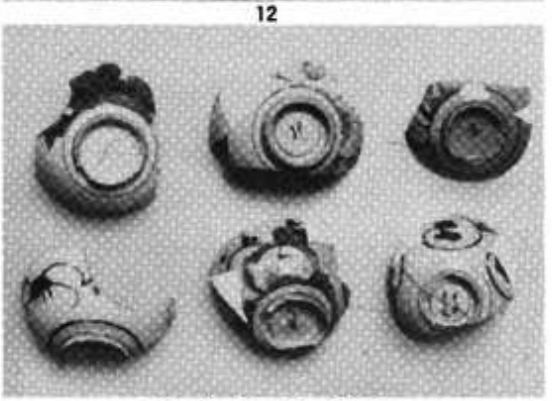
8



11

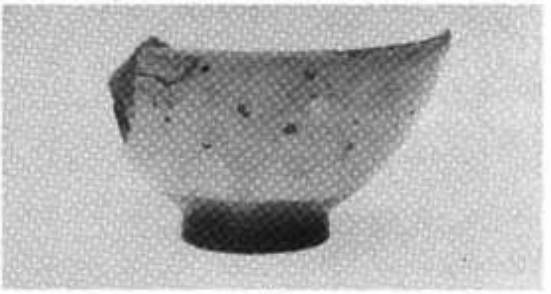


12



5・6・7・14・16・17

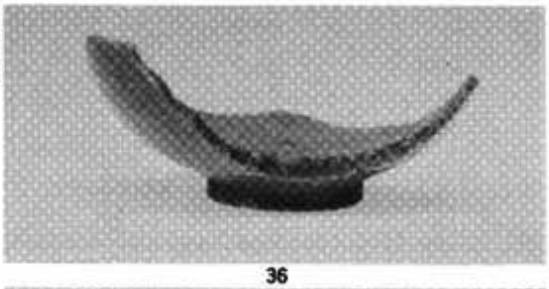
29



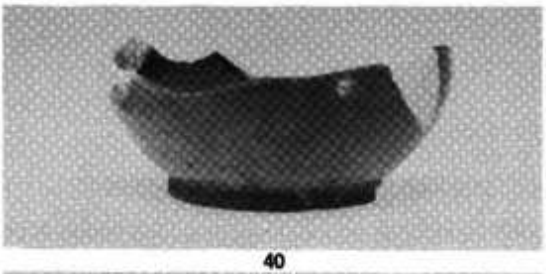
32

陶磁器

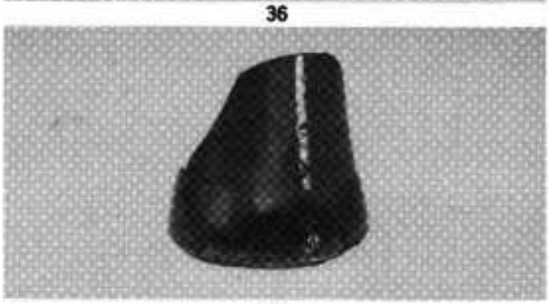
図版八



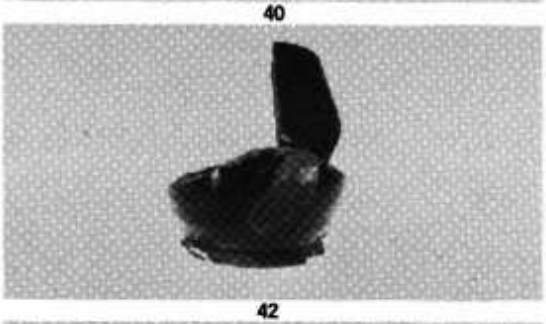
36



40

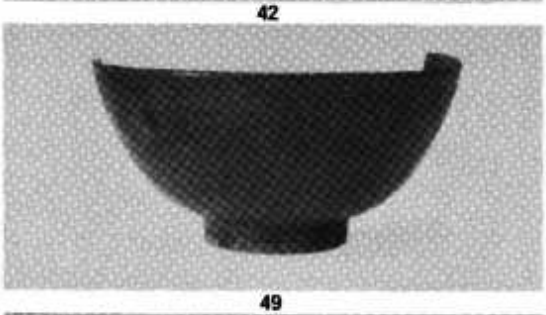


41

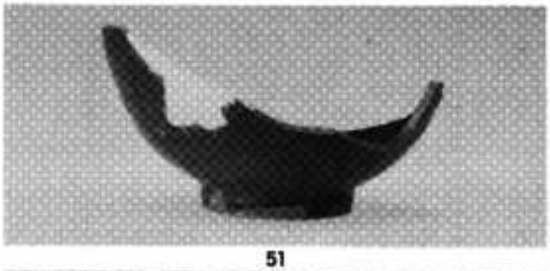


42

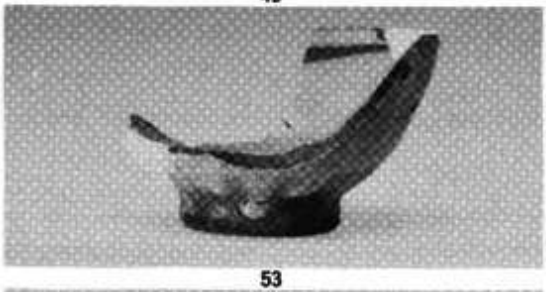
48



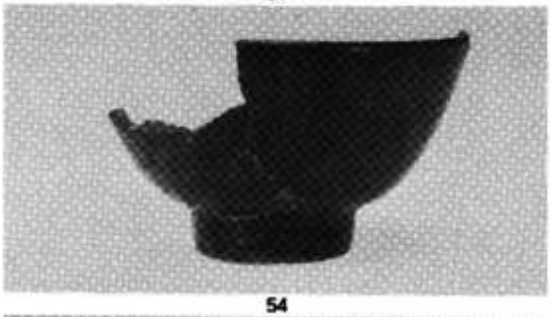
49



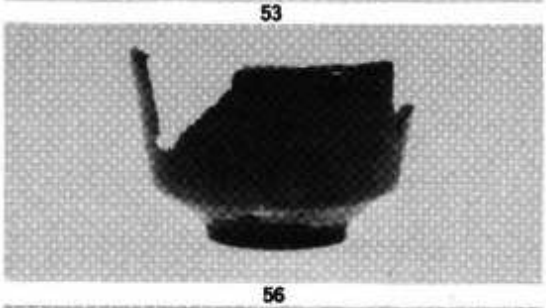
51



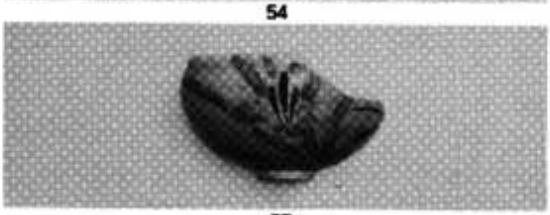
53



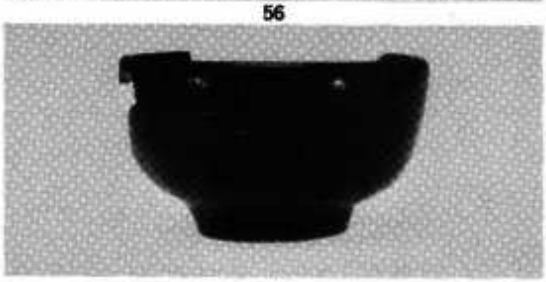
54



56

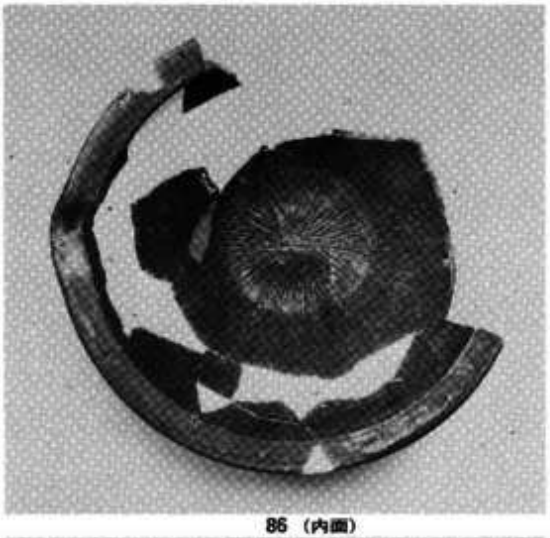


57

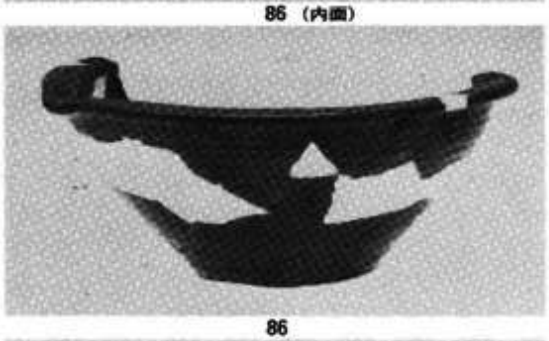


60

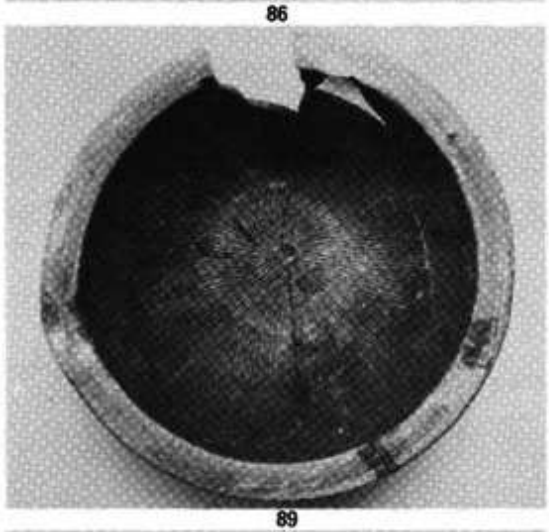
陶　器



86（内面）



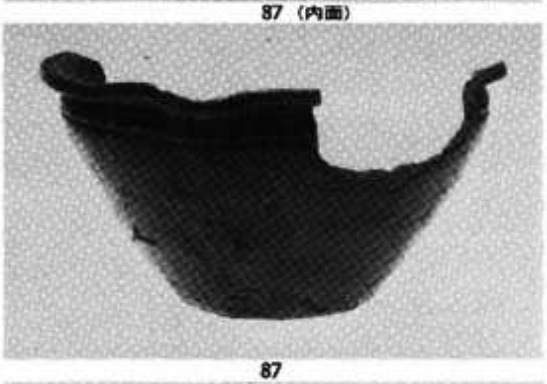
86



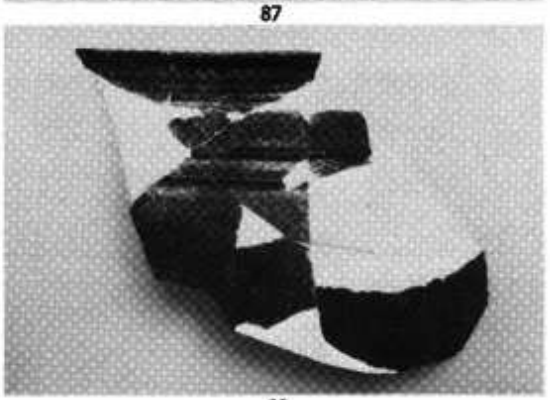
89

88

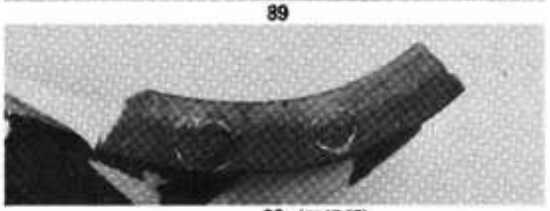
87（内面）



87



89



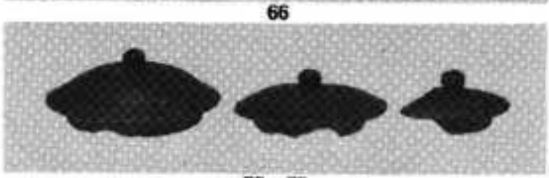
90（口縁部）

90

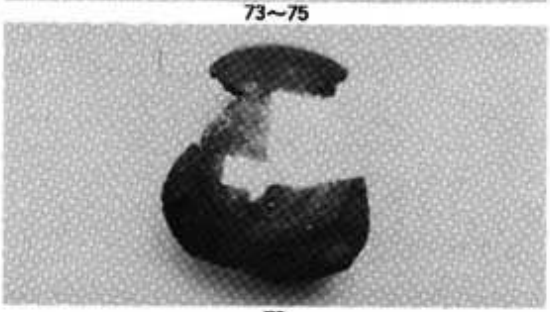
陶　器

図版十

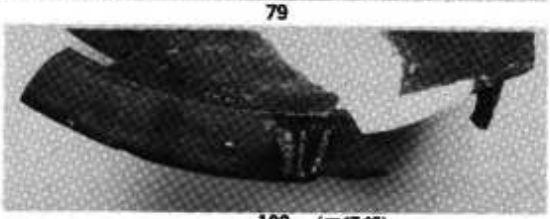
66



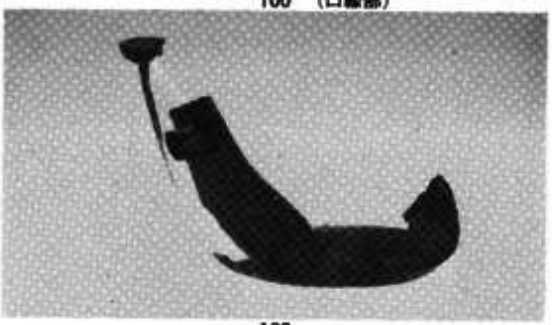
73～75



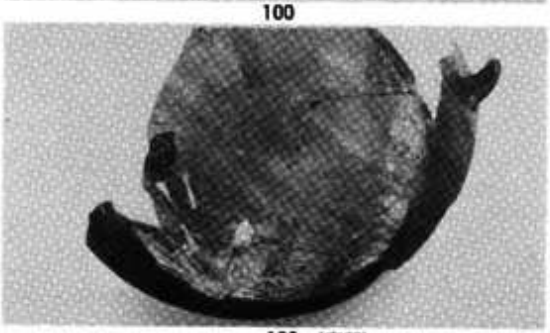
79



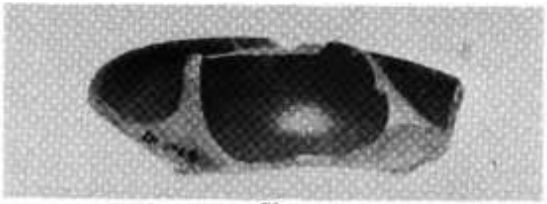
100 (口縁部)



100

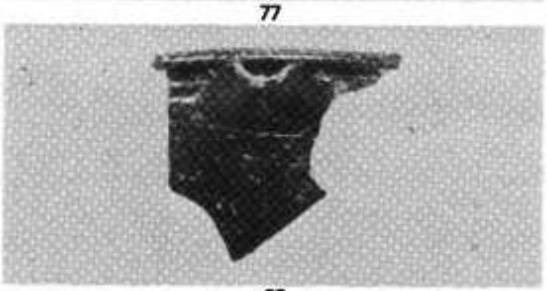


100 (底部)

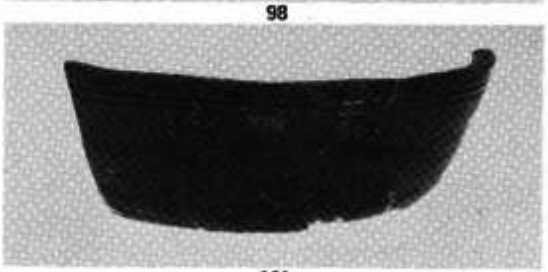


71

77

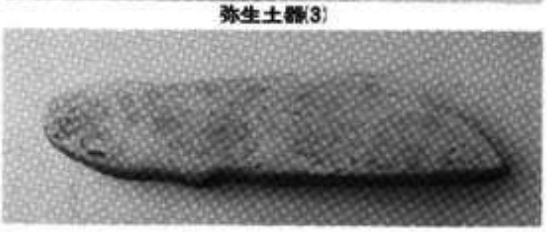


98



101

弥生土器(3)



石斧

陶器・弥生土器・扶入片刃石斧

小木原遺跡群蕨地区
（A・B地区）

例　　言

1．本報告では次のとおり略記号を用いている。

ＳＩ…板石積石室墓、ＳＫ…土壙墓、ＳＴ…地下式横穴墓、ＳＸ…竪穴状遺構

ＳＢ…掘立柱建物跡。

また、板石積石室墓、土壙墓、地下式横穴墓の号数について下記のように区別した。

1～土壙墓、101～板石積石室墓、1001～地下式横穴墓（A地区)、2001～地下式横穴墓（B地区）

2．概要報告で使用した遺構番号(仮番号)については本報告において正式番号に変更した。

なお、正式番号と仮番号の対照については遺構一覧表に記載している。

3．方位は磁化を示す。

本文目次

第1章　発掘調査の概要 …… 123
　第1節　遺跡の概観 …… 123
　第2節　調査の経過 …… 127
第2章　調査の記録 …… 130
　第1節　古墳時代の遺構と遺物 …… 130
　　1．遺構 …… 130
　　(1)　板石積石室墓 …… 136
　　(2)　土壙墓 …… 147
　　(3)　地下式横穴墓 …… 181
　　2．遺物 …… 240
　　(1)　土師器 …… 240
　　(2)　鉄器 …… 249
　　(3)　玉類 …… 253
　　(4)　紡垂車 …… 253
　第2節　歴史時代の遺構と遺物 …… 262
　　1．遺構 …… 262
　　(1)　掘立柱建物跡 …… 262
　　(2)　竪穴状遺構 …… 273
　　(3)　溝状遺構 …… 273
　　2．遺物 …… 273
　　(1)　土器 …… 273
　　(2)　陶磁器 …… 273
　　(3)　石製品 …… 273
第3章　まとめ …… 274

挿図目次

第1図　基本土層図 …… 124
第2図　遺跡周辺地形図 …… 125～126
第3図　調査区内等高線図 …… 128
第4図　グリット配置図 …… 129
第5図　遺構配置図 …… 131～132
第6図　古墳時代遺構分布図 …… 133～134
第7図　A地区北西遺構群分布図 …… 135
第8図　A地区板石積石室墓分布図 …… 137～138
第9図　SI 101 遺構実測図 …… 139
第10図　SI 102 遺構実測図 …… 140
第11図　SI 103 遺構実測図 …… 141
第12図　SI 104 遺構実測図 …… 142
第13図　SI 105 遺構実測図 …… 143
第14図　SI 106 遺構実測図 …… 144
第15図　SI 107 遺構実測図 …… 145
第16図　SI 108 遺構実測図 …… 146
第17図　A地区土壙墓分布図 …… 149～150
第18図　SK 1・SK 2 遺構実測図 …… 152
第19図　SK 3・SK 4 遺構実測図 …… 153
第20図　SK 5・SK 6 遺構実測図 …… 154
第21図　SK 7・SK 8 遺構実測図 …… 155
第22図　SK 9・SK10遺構実測図 …… 156
第23図　SK11・SK12遺構実測図 …… 157
第24図　SK13・SK14遺構実測図 …… 158
第25図　SK15・SK16遺構実測図 …… 159
第26図　SK17・SK18遺構実測図 …… 160

第27図　ＳＫ19・ＳＫ20遺構実測図 …… 161
第28図　ＳＫ21・ＳＫ22遺構実測図 …… 162
第29図　ＳＫ23・ＳＫ24遺構実測図 …… 163
第30図　ＳＫ25・ＳＫ26遺構実測図 …… 164
第31図　ＳＫ27・ＳＫ28遺構実測図 …… 165
第32図　ＳＫ29・ＳＫ30遺構実測図 …… 166
第33図　ＳＫ31・ＳＫ32遺構実測図 …… 167
第34図　ＳＫ33・ＳＫ34遺構実測図 …… 168
第35図　ＳＫ35・ＳＫ36遺構実測図 …… 169
第36図　ＳＫ37・ＳＫ38遺構実測図 …… 170
第37図　ＳＫ39・ＳＫ40遺構実測図 …… 171
第38図　ＳＫ41・ＳＫ42遺構実測図 …… 172
第39図　ＳＫ43・ＳＫ44遺構実測図 …… 173
第40図　ＳＫ45・ＳＫ46遺構実測図 …… 174
第41図　ＳＫ47・ＳＫ48遺構実測図 …… 175
第42図　ＳＫ49・ＳＫ53遺構実測図 …… 176
第43図　ＳＫ50・ＳＫ51・ＳＫ52遺構実測図・177
第44図　ＳＫ54・ＳＫ55・ＳＫ56遺構実測図・178
第45図　ＳＫ57遺構実測図 …… 179
第46図　ＳＫ58遺構実測図 …… 180
第47図　Ａ地区地下式横穴墓分布図 ・183～184
第48図　ＳＴ1001・ＳＴ1002遺構実測図 ‥ 186
第49図　ＳＴ1003・ＳＴ1004遺構実測図 ‥ 187
第50図　ＳＴ1005・ＳＴ1006遺構実測図 ‥ 188
第51図　ＳＴ1007・ＳＴ1008遺構実測図 ‥ 189
第52図　ＳＴ1009遺構実測図 …… 190
第53図　ＳＴ1010遺構実測図 …… 191
第54図　ＳＴ1011遺構実測図 …… 192
第55図　ＳＴ1012遺構実測図 …… 193
第56図　ＳＴ1013遺構実測図 …… 194
第57図　ＳＴ1014遺構実測図 …… 195
第58図　ＳＴ1015遺構実測図 …… 196
第59図　ＳＴ1016遺構実測図 …… 197
第60図　ＳＴ1017遺構実測図 …… 198
第61図　ＳＴ1018遺構実測図 …… 199
第62図　ＳＴ1019遺構実測図 …… 200
第63図　ＳＴ1020遺構実測図 …… 201
第64図　ＳＴ1021遺構実測図 …… 202
第65図　ＳＴ1022遺構実測図 …… 203
第66図　ＳＴ1023遺構実測図 …… 204
第67図　ＳＴ1024遺構実測図 …… 205
第68図　ＳＴ1025遺構実測図 …… 206
第69図　ＳＴ1026遺構実測図 …… 207
第70図　Ｂ地区地下式横穴墓分布図 ・209～210
第71図　ＳＴ2001遺構実測図 …… 213
第72図　ＳＴ2002遺構実測図 …… 214
第73図　ＳＴ2003遺構実測図 …… 215
第74図　ＳＴ2004遺構実測図 …… 216
第75図　ＳＴ2005遺構実測図 …… 217
第76図　ＳＴ2006遺構実測図 …… 218
第77図　ＳＴ2007遺構実測図 …… 219
第78図　ＳＴ2008・ＳＴ2011遺構実測図 ‥ 220
第79図　ＳＴ2009遺構実測図 …… 221
第80図　ＳＴ2010遺構実測図 …… 222
第81図　ＳＴ2012遺構実測図 …… 223
第82図　ＳＴ2013遺構実測図 …… 224
第83図　ＳＴ2014遺構実測図 …… 225
第84図　ＳＴ2015遺構実測図 …… 226
第85図　ＳＴ2016遺構実測図 …… 227
第86図　ＳＴ2017遺構実測図 …… 228
第87図　ＳＴ2018遺構実測図 …… 229
第88図　ＳＴ2019遺構実測図 …… 230
第89図　ＳＴ2020遺構実測図 …… 231
第90図　ＳＴ2021・ＳＴ2022遺構実測図 ‥ 232
第91図　ＳＴ2023遺構実測図 …… 233
第92図　ＳＴ2024遺構実測図 …… 234
第93図　ＳＴ2025遺構実測図 …… 235
第94図　ＳＴ2026遺構実測図 …… 236
第95図　ＳＴ2027遺構実測図 …… 237
第96図　ＳＴ2028遺構実測図 …… 238
第97図　ＳＴ2029遺構実測図 …… 239
第98図　Ａ地区北西遺構群土器分布図 …… 241
第99図　Ａ地区北西遺構群
　出土土器実測図(1) …… 242
第100図　Ａ地区北西遺構群
　出土土器実測図(2) …… 243
第101図　Ａ地区北西遺構群
　出土土器実測図(3) …… 244
第102図　Ａ地区北西遺構群
　出土土器実測図(4) …… 245
第103図　Ａ地区北西遺構群
　出土土器実測図(5) …… 246

第104図　A地区北西遺構群
出土土器実測図(6) …… 247
第105図　A地区北西遺構群
出土土器実測図(7) …… 248
第106図　A地区土壙墓・板石積石室墓
・地下式横穴墓出土遺物 …… 254
第107図　A地区地下式横穴墓出土鉄器 …… 255
第108図　A地区およびB地区地下式横穴墓
出土鉄器 …… 256
第109図　B地区地下式横穴墓出土鉄器(1) … 257
第110図　B地区地下式横穴墓出土鉄器(2) … 258
第111図　B地区地下式横穴墓出土鉄器(3) … 259
第112図　B地区地下式横穴墓出土鉄器(4) … 260
第113図　B地区地下式横穴墓出土鉄器(5) … 261
第114図　A地区北東遺構群遺構分布図 …… 263
第115図　A地区北西遺構群遺構分布図 …… 264
第116図　SB1・SB2遺構実測図 …… 265
第117図　SB3遺構実測図 …… 266
第118図　SB4・SB5遺構実測図 …… 267
第119図　SB6遺構実測図 …… 268
第120図　SX1・SX2遺構実測図 …… 269
第121図　出土土器実測図(1) …… 270
第122図　出土土器実測図(2) …… 271
第123図　出土土器実測図(3) …… 272

表　目　次

表1　土壙墓・板石積石室墓・
地下式横穴墓(Ⅰ類)規模分布表 …… 275
表2　地下式横穴墓規模分布表 …… 275
表3　土壙墓主軸分布表 …… 276
表4　地下式横穴墓主軸分布表 …… 276
表5　A地区板石積石室墓(SI)一覧表 … 287
表6　A地区土壙墓(SK)一覧表(1) …… 287
表7　A地区土壙墓(SK)一覧表(2) …… 288
表8　A地区地下式横穴墓(ST)一覧表 … 289
表9　B地区地下式横穴墓(ST)一覧表 … 290
表10　刀子・剣・刀・鉾一覧表(1) …… 291
表11　刀子・剣・刀・鉾一覧表(2) …… 292
表12　鉄鏃一覧表(1) …… 293
表13　鉄鏃一覧表(2) …… 294
表14　鉄鏃一覧表(3) …… 295
表15　鉄鏃一覧表(4) …… 296
表16　鉄鏃一覧表(5) …… 297
表17　土器観察表(1) …… 298
表18　土器観察表(2) …… 299
表19　土器観察表(3) …… 300
表20　土器観察表(4) …… 301
表21　土器観察表(5) …… 302
表22　土師器・陶磁器観察表(1) …… 303
表23　土師器・陶磁器観察表(2) …… 304
表24　土師器・陶磁器観察表(3) …… 305
表25　土師器・陶磁器観察表(4) …… 306

図版目次

図版1　A地区北西遺構群遠景(南東から)・307
A地区北西遺構群遠景(東から) … 307
図版2　A地区北東遺構群
(12・13—c・d区) …… 308
A地区北東遺構群
(12・13—e・f区) …… 308
図版3　A地区北西遺構群—SI103および
周辺検出状況(南から) …… 309
A地区北西遺構群—SI103および
周辺検出状況(東から) …… 309
図版4　A地区北西遺構群
(SK6・SI103・SI105周辺) 310
A地区北西遺構群北側全景 …… 310
図版5　A地区北西遺構群北西側全景 …… 311
A地区北西遺構群北東側全景 …… 311
図版6　A地区北西遺構群東側全景 …… 312
A地区北西遺構群東側全景 …… 312
図版7　A地区北西遺構群南西側全景 …… 313
A地区北西遺構群南東側全景 …… 313
図版8　A地区北西遺構群南側全景 …… 314
A地区西遺構群北側全景 …… 314
図版9　SI105／SI105(完掘) …… 315
図版10　SI108／SI107 …… 316
図版11　SI103／SI103(完掘) …… 317

図版12　ＳＩ102／ＳＩ104 …… 318
図版13　ＳＫ５・６／ＳＫ１・２ …… 319
図版14　ＳＫ４／ＳＫ６ …… 320
図版15　ＳＫ５／ＳＫ２ …… 321
図版16　ＳＫ７／ＳＫ８ …… 322
図版17　ＳＫ12・ＳＫ14 …… 323
図版18　ＳＫ15／ＳＫ16 …… 324
図版19　ＳＫ17／ＳＫ19 …… 325
図版20　ＳＫ20／ＳＫ21 …… 326
図版21　ＳＫ22／ＳＫ23 …… 327
図版22　ＳＫ16・25・57／ＳＫ24 …… 328
図版23　ＳＫ33／ＳＫ26 …… 329
図版24　ＳＫ27／ＳＫ28 …… 330
図版25　ＳＫ29／ＳＫ31 …… 331
図版26　ＳＫ34／ＳＫ31 …… 332
図版27　ＳＫ35・36・37／ＳＫ35 …… 333
図版28　ＳＫ46／ＳＫ38 …… 334
図版29　ＳＫ39／ＳＫ56 …… 335
図版30　ＳＫ40／ＳＫ41 …… 336
図版31　ＳＫ50／ＳＸ１ …… 337
図版32　ＳＴ1001／ＳＴ1002 …… 338
図版33　ＳＴ1003（遺物検出）
／ＳＴ1003（完掘） …… 339
図版34　ＳＴ1004／ＳＴ1006 …… 340
図版35　ＳＴ1007／ＳＴ1005 …… 341
図版36　ＳＴ1008（遺物検出）
／ＳＴ1008（完掘） …… 342
図版37　ＳＴ1009／ＳＴ1009 …… 343
図版38　ＳＴ1010／ＳＴ1014 …… 344
図版39　ＳＴ1019／ＳＴ1016 …… 345
図版40　ＳＴ1023／ＳＴ1025 …… 346
図版41　Ｂ地区南遺構群遠景（南東部） …… 347
Ｂ地区南遺構群遠景（中央部） …… 347
図版42　Ｂ地区南遺構群遠景（南西部） …… 348
Ｂ地区南遺構群遠景
～Ａ地区西遺構群遠景 …… 348
図版43　ＳＴ2001／ＳＴ2002 …… 349
図版44　ＳＴ2003／ＳＴ2004 …… 350
図版45　ＳＴ2006／ＳＴ2009 …… 351
図版46　ＳＴ2008／ＳＴ2016 …… 352
図版47　ＳＴ2013／ＳＴ2015 …… 353
図版48　ＳＴ2005／ＳＴ2011 …… 354
図版49　ＳＴ2020／ＳＴ2021 …… 355
図版50　ＳＴ2023／ＳＴ2024 …… 356
図版51　ＳＴ2029／ＳＴ2025 …… 357
図版52　鉄器(1) …… 358
図版53　鉄器(2) …… 359
図版54　鉄器(3) …… 360
図版55　鉄器(4) …… 361
図版56　鉄器(5) …… 362
図版57　鉄器(6) …… 363
図版58　鉄器(7) …… 364
図版59　鉄器(8) …… 365
図版60　鉄器(9) …… 366
図版61　鉄器(10) …… 367
図版62　土師器(1) …… 368
図版63　土師器(2)・石錘 …… 369

第1章　発堀調査の概要

第1節　遺跡の概観

位置

小木原遺跡群は、宮崎県えびの市大字上江字小木原、蕨、久見迫、馬頭、長谷川、地主原、宮原、烏越にまたがって所在する。ＪＲ吉都線上江駅の西方約1kmに位置し、遺跡の南側が九州縦貫道に接する。遺跡を東西に県道京町小原線が通る。

立地

川内川左岸には、その支流である池島川とに挟まれた標高260m～270mの中位段丘が西は池島、東は観音原、北は五日市におよぶ広大な範囲に広がっており、上江・原田遺跡群となっている。小木原遺跡群はこの段丘の西端に位置し、東側に開析谷が深く入り込みやや突出した立地を呈している。小木原遺跡群の北方下段には永田原遺跡や口ノ坪遺跡の立地する標高240m前後の低位段丘が形成されており、その下段には川内川両岸に広がる標高230～240mの洪積平野となる。

歴史的環境

群内には、県指定史跡の飯野古墳をはじめとして、小木原地下式横穴墓（小木原支群）、久見迫地下式横穴墓（久見迫支群）、馬頭地下式横穴墓（馬頭支群）などの地下式横穴墓が数多く分布しており、これらを総して小木原地下式横穴墓群と呼んでいる。九州縦貫道宮崎自動車道建設に伴って44年、47年、49年に久見迫支群10基、小木原支群7基、馬頭支群14基が調査されている。その概要は、小木原支群では、墳丘を持つ地下式横穴墓で仿製獣形鏡が出土した小木原古墳（44年調査）、横引板鉄留短甲と横引板鉄留衝角付冑を持つ1号地下式横穴墓（44年調査）、横引板鉄留短甲、馬鐸、轡などを出土した3号地下式横穴墓が見られ注目される。また、地下式横穴墓分布の特徴としては、小木原支群では竪坑上部閉塞と羨道閉塞が共存するのに対して、久見迫支群と馬頭支群では羨道閉塞の地下式横穴墓のみの分布である。なお、蕨地区周辺では昭和40年代の砂利採取作業によって破壊されていく地下式横穴墓を木崎原操氏は精力的な踏査・記録によって313基を確認し、分布図を作成している。

その後の調査としては、今回（昭和62年度）の蕨地区（A地区・B地区）の調査、さらに、昭和63年度に62年調査区の南側（蕨C地区）と久見迫地区（昭和44年調査区の東側）の調査がある。

現況

調査区周辺は水田や畑地がひろがる一帯で標高254m～255mとほぼ平坦地である。しかし、丘陵端を中心に砂利採集による土取りが行われており、2～3m削平された箇所が虫食い的に見られる。調査区の北から東にかけてもほとんど削平されており、この地点では木崎原氏によって100基を超える地下式横穴墓が確認されている。調査区の西には県史跡飯野古墳が所在する竹林が有り原状を留どめている。さらにその西側も土取りが行われており100基を超す地下式横穴墓が確認されており、小木原支群は西南端の縦貫道周辺に分布する。一方、調査区の南は県道京町小林線に隣接しており水田地帯が広がる。久見迫支群と馬頭支群の地下式横穴墓はその南端の縦貫道周辺に分布する。

層位

A地区内の水田部での基本土層は下記のとおりである。

1層　黒色（10YR2／1）土層～耕作土。
小円礫や軽石小粒を含み、砂質を帯びる。

2層　黒色（7.5YR2/1）土層～小円礫や軽石小粒を含む。上位は砂質を帯びる。
（埋没表層）

3層　黒色（7.5YR1.7～1.9/1）土層～円礫を含まみ、粘りけを持つ。（　〃　）

4層　黒色(N1.5(YR)0)土層～円礫などは含まず、粘りけを持つ。下位に成る程、軟質を帯びる。（　〃　）

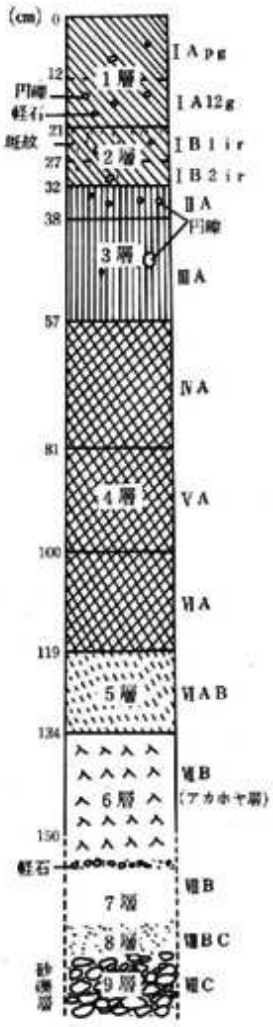
5層　黒褐色（7.5YR2/2）土層～硬質で粘りけを持つ。

6層　明褐色（7.5YR5/8）土層～アカホヤ火山灰層、下部に軽石粒が層を成す。

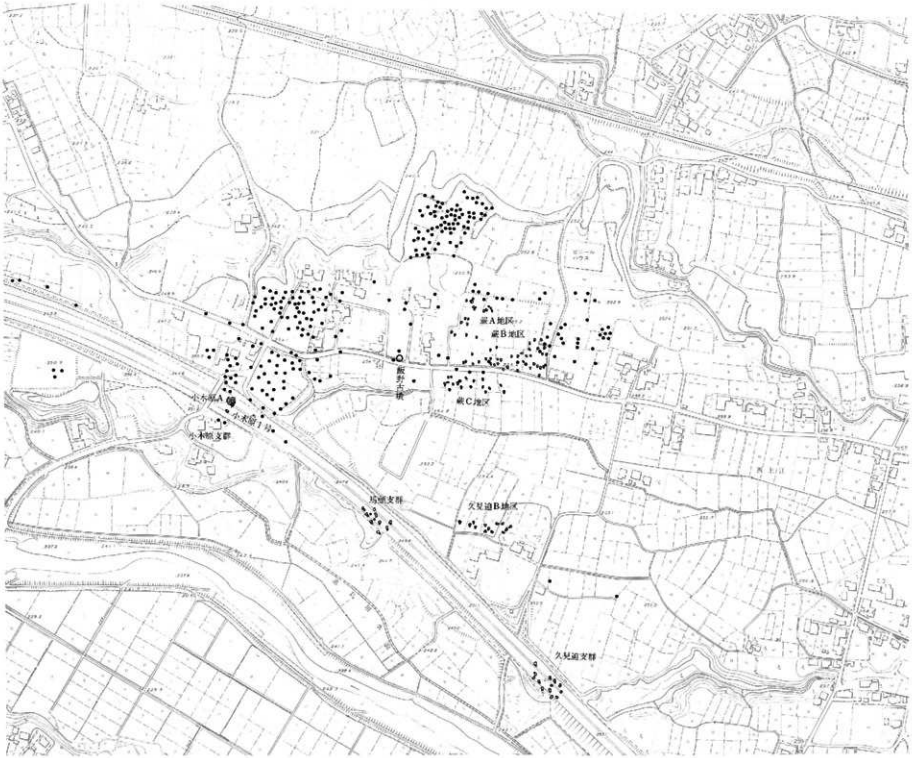
7層　褐色（7.5YR4/3）土層～硬質で粘りけを持つ。

8層　褐色（7.5YR4/4）土層～軟質で小円礫を多く含む。

9層　鈍い黄褐色（10YR6/3）土層～大小の円礫や砂から成る砂礫層。



第1図　基本土層図



第2図　遺跡周辺地形図(ドットは地下式横穴墓等の分布を示す)

第2節　調査の経過

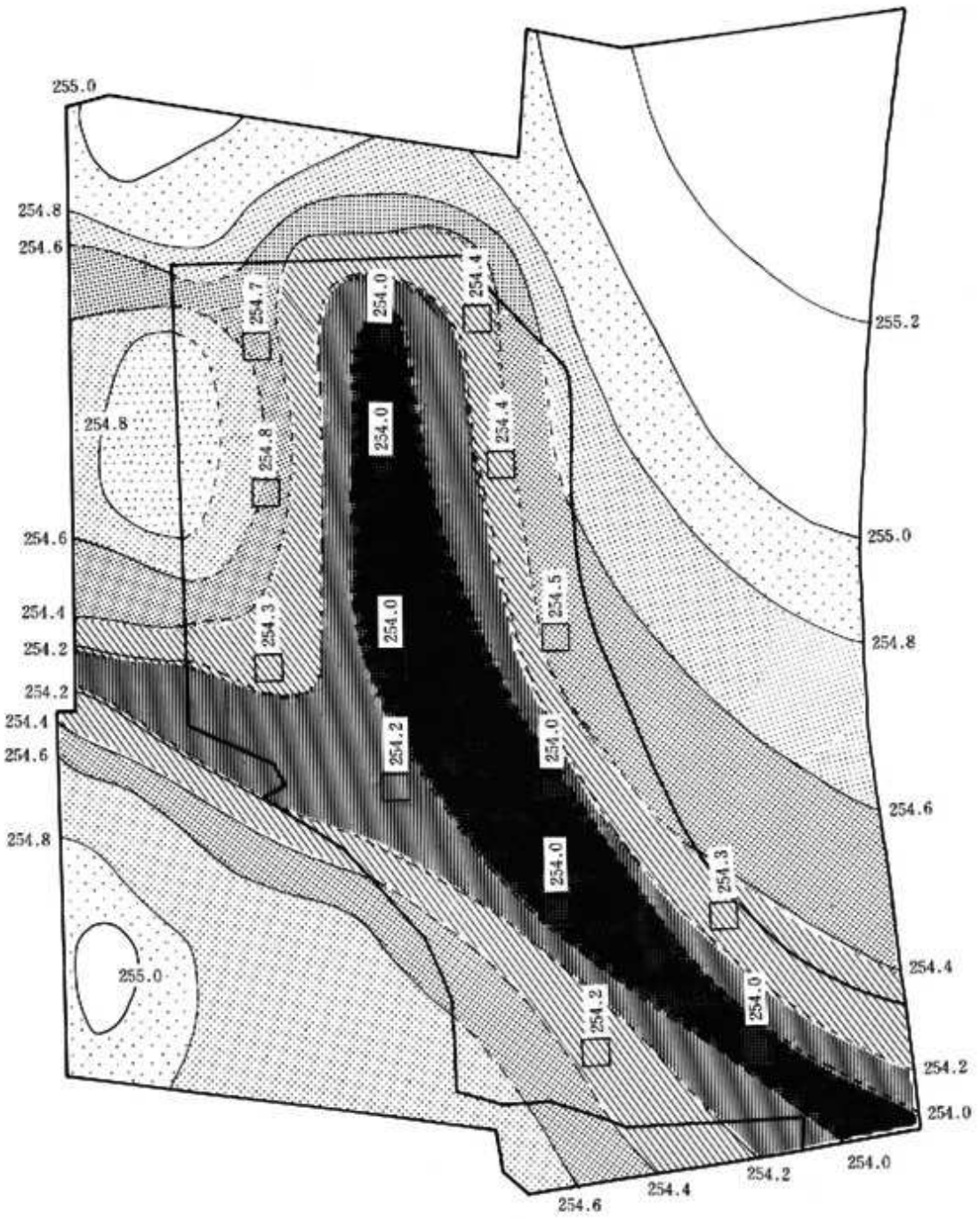
発掘調査は、当初、調査面積約11,000㎡のうち、調査区北側と東側の畑地約2,000㎡から開始した（A地区）。開始時に行った試掘により、包含層までの厚さが40～100cmあることから重機による表土剝ぎをおこなった。その結果、西側の約400㎡の範囲から土壙墓、板石積石室墓、地下式横穴墓等が検出され、板石積石室墓や土壙墓の周辺から古墳時代前期の土器片が多く出土した。また、糸切り皿や青磁皿の破片を伴う柱穴や溝が西側と東側の調査区で検出された。東側の調査区では堀立柱建物跡を4棟検出した。

残りの水田部分については稲刈りが遅れたため11月下旬に試掘調査を行い、本格的な調査に入ったのは重機による表土剝ぎが終了した12月初旬であった。試掘調査の結果、調査区中央部で包含層までの深さが100～140cmと黒色土が比較的深く堆積した場所（小さな谷地形）が調査区の南西から北東方向にかけて延びていたため、重機で工事の堀削深度まで剝いだ段階で遺構・遺物の検出されなかった約4,000㎡については調査区から除外した。水田部分の調査では、土壙墓等を検出した西側の区域は更に南側に広がりを見せ最終的には約1,000㎡の範囲から土壙墓58基、板石積石室墓8基、地下式横穴墓26基が密集して検出された。更にその南側と水路部分からは地下式横穴墓8基が検出された。さらに中央部微低地より南側の約4,000㎡の範囲からは、地下式横穴墓43基が検出された。

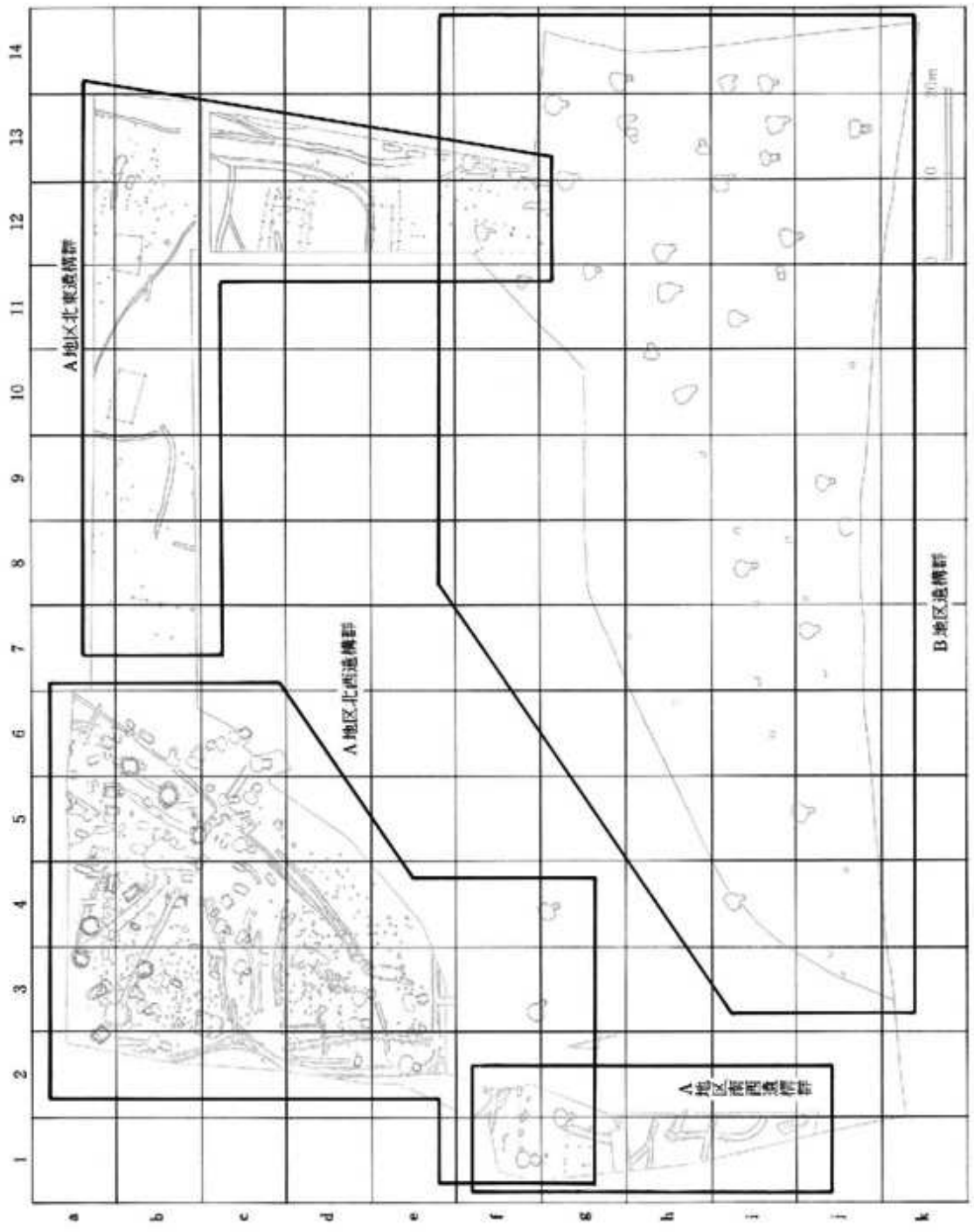
遺物は、前述の土器類のほかに副葬品として土壙墓からは鉄鏃・鉄剣・管玉・紡錘車、板石積石室墓からは鉄鏃、地下式横穴墓からは鉄剣・刀子・鉄鉾・鉄鏃などが出土した。また、中世の柱穴群や溝も調査区のほぼ全域で確認され土師皿・陶磁器・石鍋などが出土した。

なお、B地区で検出された地下式横穴墓は、検出時に重機によって天井が崩壊したもの、天井が原存していたもの、以前から天井が陥没し玄室内に黒色土が充満していたものなどの状況であった。そのため工事の堀削深度から検討し、アカホヤ層面まで堀削工事をする東側については、検出された地下式横穴墓の総てを調査した。しかし、西側についてはアカホヤ層上位の黒色土までしか堀削工事をしないことから、重機によって天井部が崩壊したものと天井が原存しているものについて調査を行い、既に天井が陥没して玄室全体に黒色土が充満している14基については、工事や耕作によって遺構に及ぼす影響は殆どないと考えられるため調査は行わずに現状で保存することとした。発掘調査は、昭和62年9月7日から翌年1月29日まで約5ヵ月間にも及んだ。

調査区の中央に南西から北東方向に斜めに窪地（小さな谷地形）が入り込んでいる。これ



第3図　調査区内等高線図（破線部は推定線）



第4図　グリッド・遺構群配置図

は、池島川から小木原遺跡群中央に北東に入る開析谷によって形成されたものと思われる。この窪地は深いところで地表面から1～1.5mある。窪地を挟んで両側の微高地に遺構が分布する。遺構の検出地点では耕作土と埋没表層を剝ぐと直ちにアカホヤ火山灰層となり遺構も上部がかなり削平された状態で検出された。

なお、遺構の構築状況は、いずれもアカホヤ火山灰層上層の黒色土を掘り込み上部としていると思われるが、各墓制の床面は、土壙墓がアカホヤ火山層（6層）下層の7層上位から下位にかけて、板石積石室が7層下位に築かれている。また、地下式横穴墓では、横口系の閉塞タイプが7層下位、羨門部の閉塞タイプが7層下位から8層下位にかけて、竪坑上部閉塞のタイプでは砂礫層（9層）上部から下位にかけて築いている傾向にある。

第2章　調査の記録

第1節　古墳時代の遺構と遺物

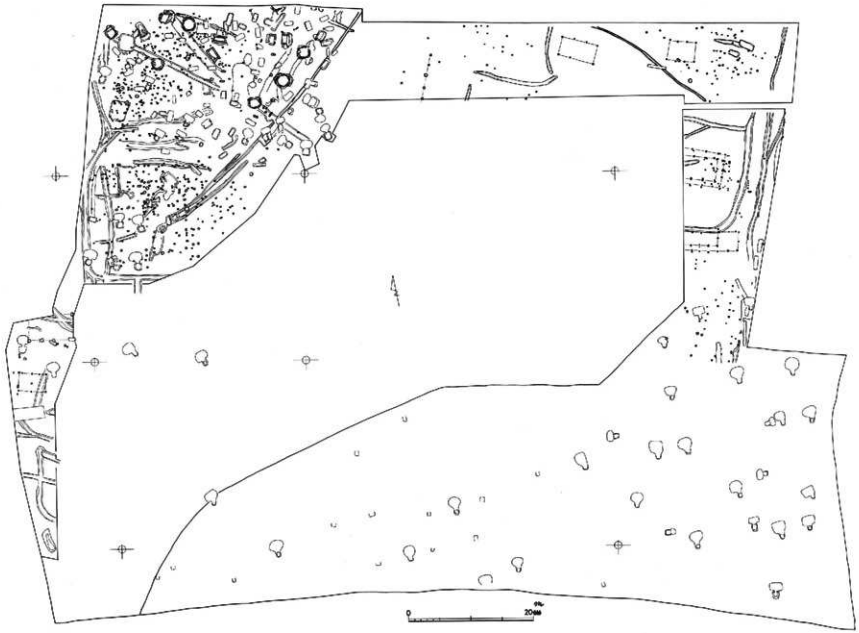
今回の調査の主要部分と成る時期である。A地区では土壙墓、板石積石室墓、地下式横穴墓などの各墓制が、B地区では地下式横穴墓が検出された。遺物も土壙墓と板石積石室墓の周辺から多量の土師器が出土したのをはじめ、地下式横穴墓や土壙墓などから多量の鉄器が副葬品として出土している。

1．遺構

古墳時代の遺構には特徴的な分布がみられる。

A地区北西遺構群の北側では東西40m、南北30mの範囲に土壙墓58基、板石積石室8基、横口系の竪坑をもつ地下式横穴墓などの地下式横穴墓16基が密集の状態で混在する。また、A地区北西遺構群の南側では東西25m、南北25mの範囲に羨門閉塞の地下式横穴墓5基と竪坑上部閉塞の地下式横穴墓3基が混在する。

B地区遺構群は南北50m、東西100mの範囲に羨門閉塞の地下式横穴墓6基と竪坑上部閉塞の地下式横穴墓23基が混在している。分布の傾向としては遺構群の東側では羨門閉塞と竪坑上部閉塞の地下式横穴墓が見られるが、西側では竪坑上部閉塞の地下式横穴墓のみが分布する。羨門閉塞はまったく見られない。



第5図　遺構配置図

第6図　古墳時代遺構分布図